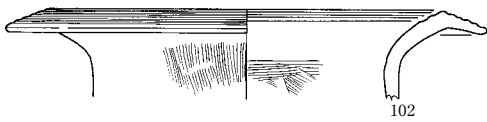




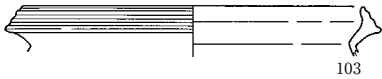
62.4m



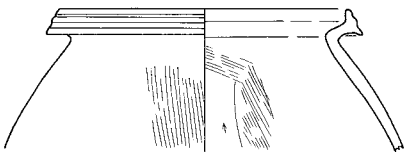
0 S = 1 : 20 50cm



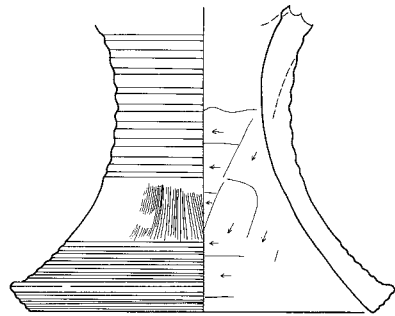
102



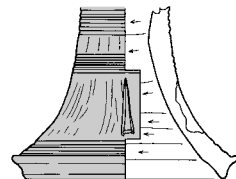
103



104



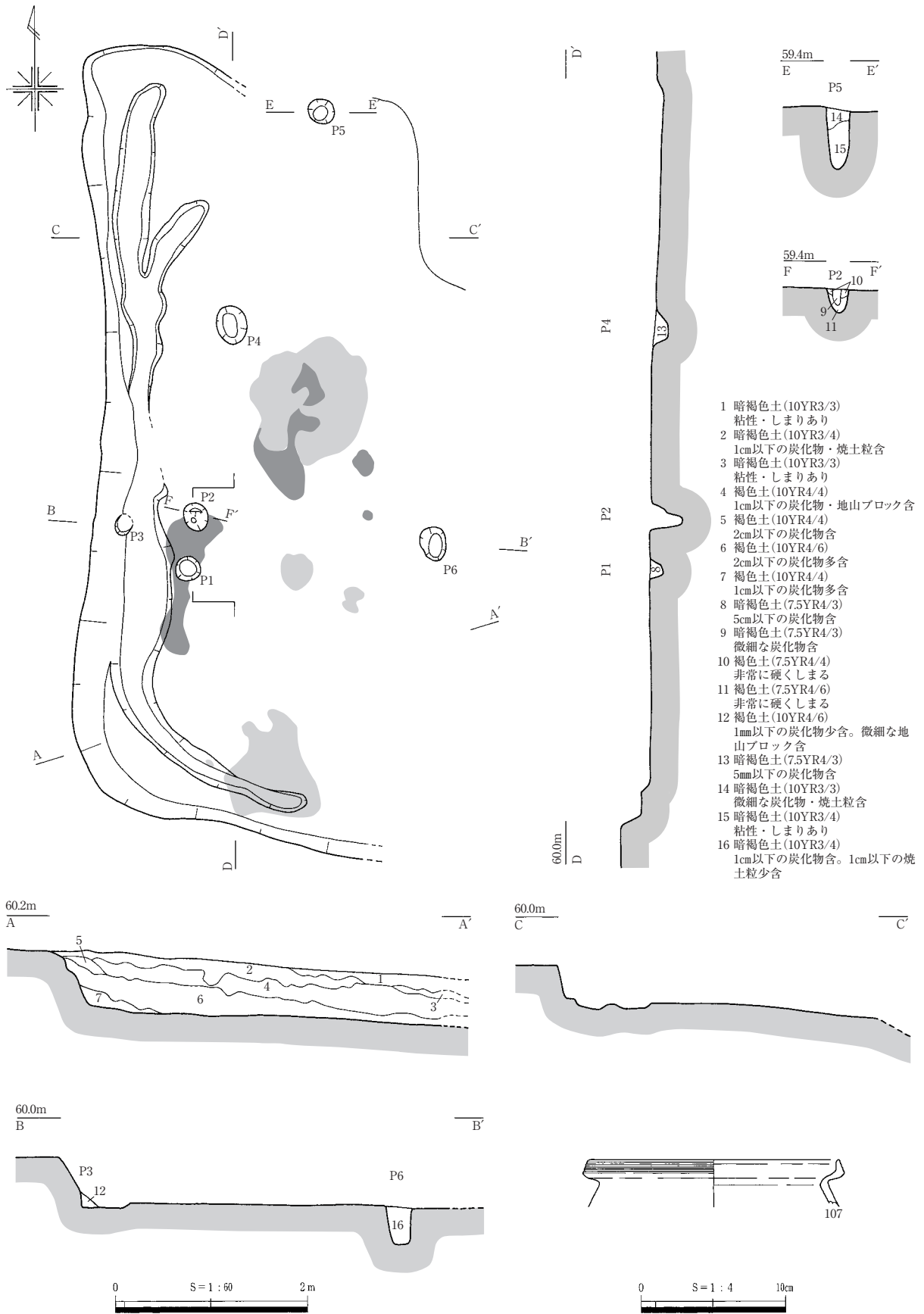
105



106

0 S = 1 : 4 10cm

第51図 SS11出土遺物



第52図 SS10および出土遺物

(4) 方形土坑

SK80 (第53・54図、PL.15・48)

L26グリッド、西尾根から西に向かって下がる標高62.5m付近の緩斜面地に位置する。同時期の遺構は周囲に認められず、17m離れた東にSI36がある。

平面規模は長軸3.5m、短軸2.2m、底面の面積は5.0㎡、深さは最大50cmである。

底面では、壁溝1条、ピット2基を検出した。壁溝は壁際を全周し、南西隅でP1と接する。溝の断面は逆台形、底面からの深さは約7cmである。P1は長軸28cm、短軸25cm、深さ10cm、P2は径30cm、深さ10cmで性格は不明である。本遺構周辺にその他のピットは認められない。

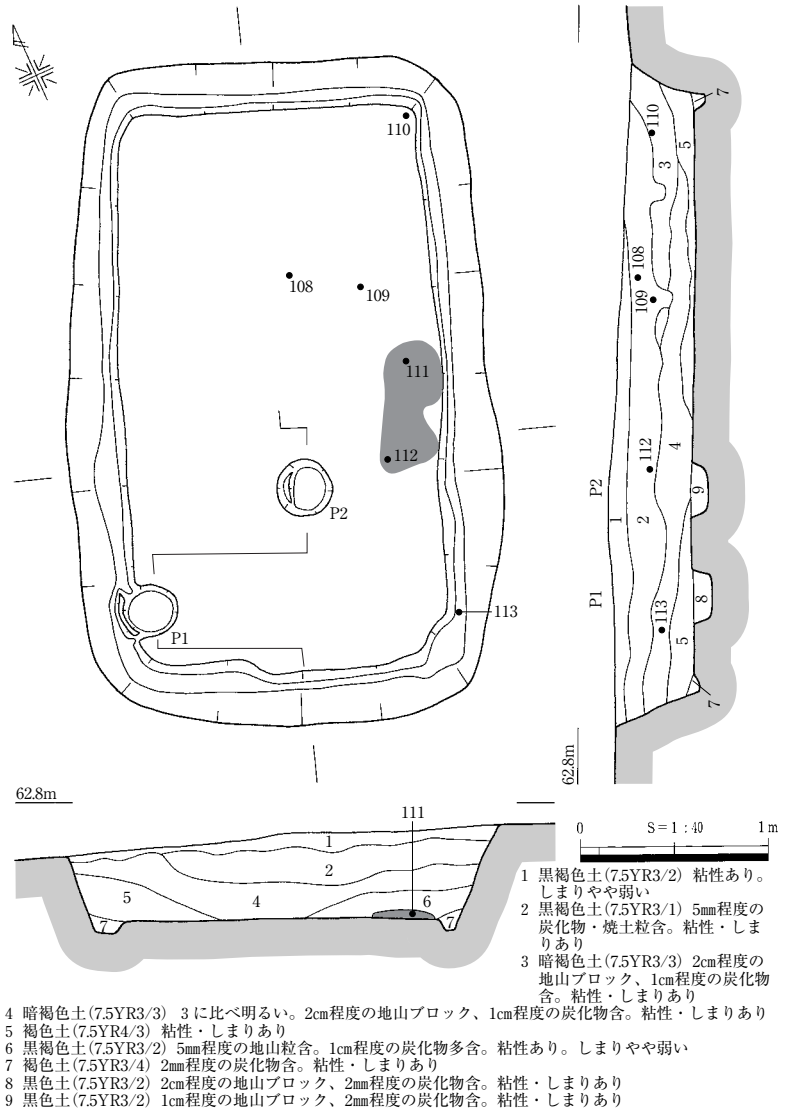
埋土は、大きく褐色土、暗褐色土、黒褐色土に分かれ、自然堆積による埋没と考える。東壁寄りの床面中央で検出した炭化物層は、土器小片を伴い、床面に被熱の痕跡もないことから、廃棄されたものとする。

遺物は、図化できなかったものを含め、弥生時代中期後葉(IV-2からIV-3)の特徴をもつ土器片が多く出土している。そのうち、108は広口壺で、口縁部を水平方向に引き出し、端部に1条、内面に3条の凹線と5本1単位の波状文を施している。109の内面調整は体部下半から2/3までヘラケズリが施されている。110~113は甕である。110は貼付突帯を持たず、頸部にはナデ後に刺突文が施されている。111は床面からの出土で、頸部に貼付突帯をもつ。出土遺物の特徴から、本遺構の廃絶時期は弥生時代中期後葉(IV-2からIV-3)と考える。(長尾)

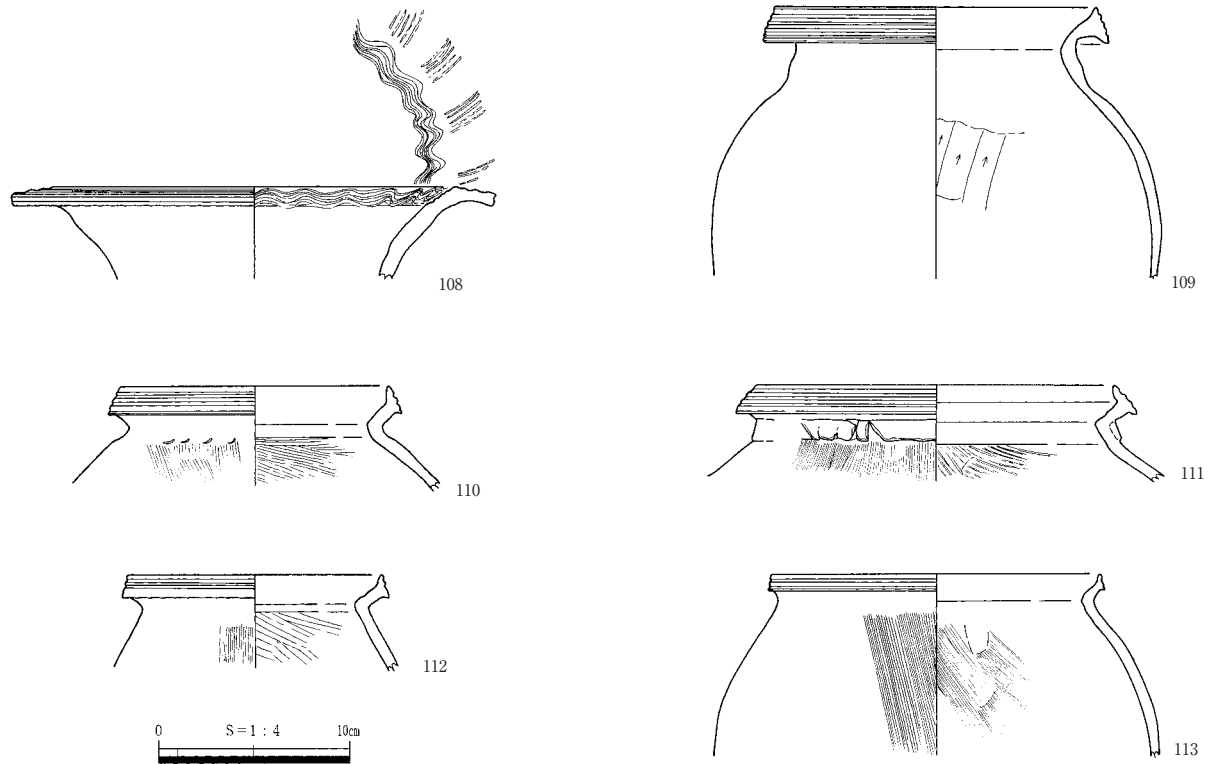
SK82・SK92 (第55・56図、PL.15・53)

I27杭を中心とする谷部西側の斜面部から谷底に近い位置にある。SI35に切られ壁面はほとんど失われている。

本遺構は、SI35埋土掘り下げ後に確認したもので、調査の結果、SK82、92は、どちらも方形土坑であり壁際を全周する壁溝を伴うこと、SK92はSK82に先行すること、SK92は掘り直されていること



第53図 SK80



第54図 SK80出土遺物

が明らかになった。以下、SK92について、掘り直し前をSK92a、掘り直し後をSK92bとし、時期の古い順に報告する。なお、SK92に伴うP1は、性格不明のピットで、掘り直し前後のどちらに伴うものか判断できなかった。規模は長軸16cm、短軸12cm、深さ16cmである。

**SK92a** 壁溝のみ確認できた土坑である。壁溝から推定する平面形の規模は長軸1.95m、短軸1.4m、底面の面積は2.3㎡を測る。壁溝の断面形はU字形、底面からの深さは約3cmである。

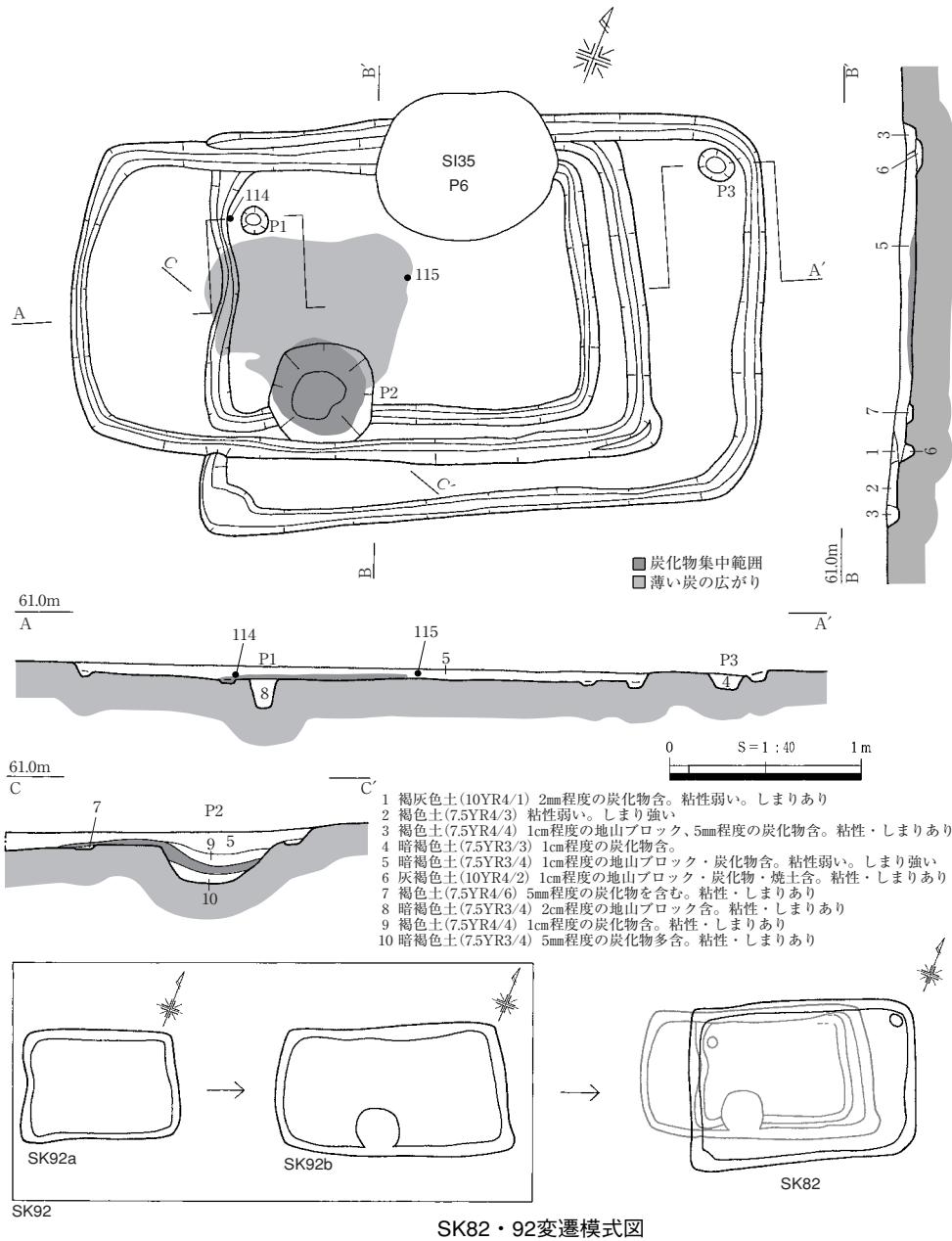
**SK92b** 壁溝から推定する平面形の規模は長軸2.95m、短軸1.7m、底面の面積は4.3㎡である。残存する壁高は4cmを測る。床面に被熱の痕跡は認められない。

壁溝は北側の一部をSK92aと共有している。溝の断面形はU字形、底面からの深さは約5cmである。SK92bに伴うP2は径55cm、深さ20cm、断面形は逆台形を呈し、壁溝と一部接している。P2内には炭化物層が流れ込むように堆積しており、この炭化物層の一部がSK92aの壁溝埋土を覆っていた。性格は不明である。

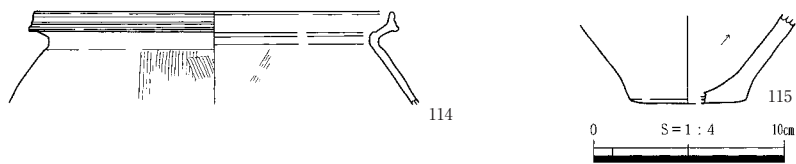
遺物は2点出土した。114は甕である。口縁部外面には2条の凹線文を施しており、弥生時代中期後葉(IV-2からIV-3)に比定される。115は底部である。

出土遺物の特徴から、本遺構の廃絶時期は弥生時代中期後葉(IV-2からIV-3)と考える。

**SK82** 底面のレベルがSI35と同じである。壁溝から推定する平面形の規模は長軸2.9m、短軸2.15m、底面の面積は5.2㎡である。壁溝の断面形は逆台形、底面からの深さは約6cmを測る。被熱の痕跡



第55図 SK82・92



第56図 SK92出土遺物

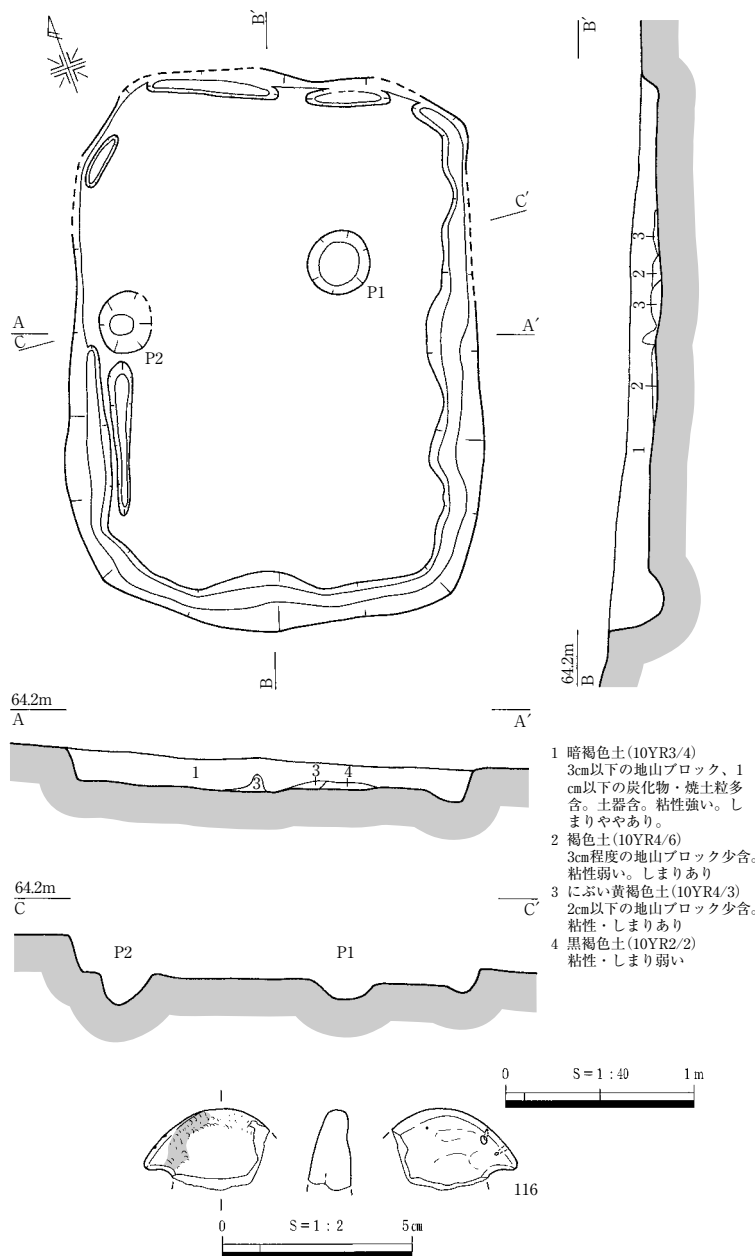
は認められない。SK92埋土まで下げてしまったため、北壁溝における南側の立ち上がりの一部と西壁溝を確認することができなかった。P3は長軸20cm、短軸15cm、深さ70cmを測り、性格は不明である。P3と対角線上にあたる南西隅では壁溝の幅が若干広がる。遺物は出土していないが、検出状況から、廃絶時期はSI35以前である。(長尾)

SK91 (第57図、PL.15・63)

E30からF30グリッド、標高64.0mの東尾根平坦部に位置し、北西側8mに墳丘墓が存在する。平面形は長軸2.95m、短軸2.14mの隅丸長方形で、底面の面積は4.8㎡である。断面形は浅い逆台形となり、検出面から底面までの深さは西側で最大20cmを測る。北壁の一部は攪乱によって失われている。底面は平坦で、中央付近でピット2基、壁際で壁溝を検出した。P1は長軸35cm、短軸34cm、深さ14cm、P2は長軸34cm、短軸27cm、深さ18cmを測り、いずれも浅い。壁溝は断面U字形で幅14~30cm、深さは最大8cmを測り、北側と西側で部分的に途切れる。西側の壁溝は一部2条となり、内側の溝は長さ82cm、幅6~14cm、最深部で1.5cmを測る。被熱面は見られない。

埋土は4層に分けられる。P1、P2には1層が堆積していた。遺物は弥生土器小片が埋土上層を中心に出土しており、下層あるいは底面出土のものは少ない。116は1層出土の分銅形土製品。右側縁と下半部は欠損している。表面

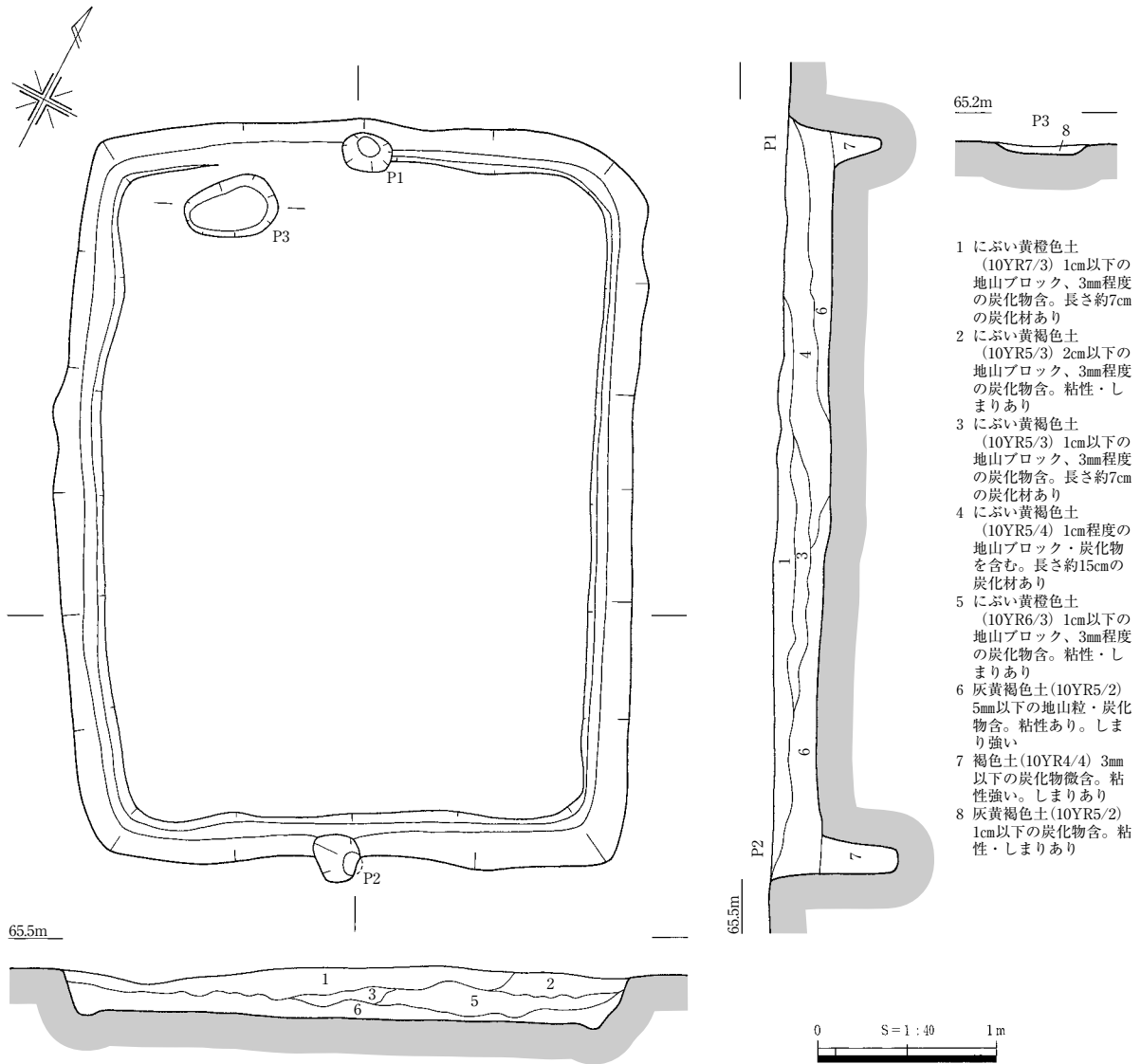
は赤彩されており、縁辺部を中心に2~3列の刺突文を施す。左側縁には裏面にかけて2ヶ所の穿孔が認められる。図化していないが、埋土中から甕の口縁部小片が出土しており、その特徴から本遺構の時期は弥生時代中期後葉(IV-2からIV-3)と考えられる。(大川)



第57図 SK91および出土遺物

SK93 (第58・59図、PL.16・50・53)

G32グリッド、西尾根南側平坦部に位置する。ここには大型の方形土坑が集中して築かれており、SK93はそれらの最も東に築かれている。長軸4.1m、短軸3.2mの方形で、深さは30cmを測る。底面の面積は10.2㎡である。壁に沿って溝底面幅6cm、深さ5cm程度の壁溝がほぼ全周する。また短軸側のそれぞれ中央には、ピットP1、P2が対をなして設けられている。P2は土坑上面と同じ高さから掘り込まれている。P1の掘り込みは北壁の途中から検出した。ともに径20~30cmで、土坑の底面からの深



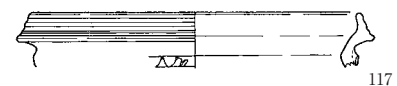
第58図 SK93

さはP1が25cm、P2が45cmを測る。これとは別に西側コーナー付近には、長軸50cm、短軸35cm、深さ5cmを測る浅い皿状のピットP3が認められた。

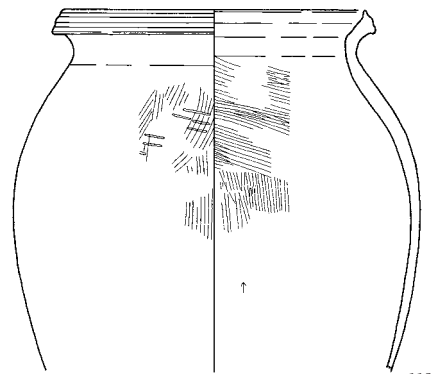
埋土の堆積状況は周辺から中央に向かい埋没したことを示し、自然に埋もれていったものと思われる。

117は上下に拡張された口縁端部に3条の凹線文を施す甕である。頸部には貼付突帯を巡らすが、形骸化している。118も甕。口縁端部の拡張は大きくない。体部外面には整形時のタタキ痕跡を残している。体部内面下半にヘラケズリが施される。

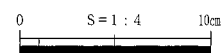
出土遺物は多くないが、こうした遺物の特徴から、SK93は弥生時代中期後葉(Ⅳ-2からⅣ-3)に位置づけられる。(湯村)



117



118



第59図 SK93出土遺物



SK99 (第60図、PL.16・48)

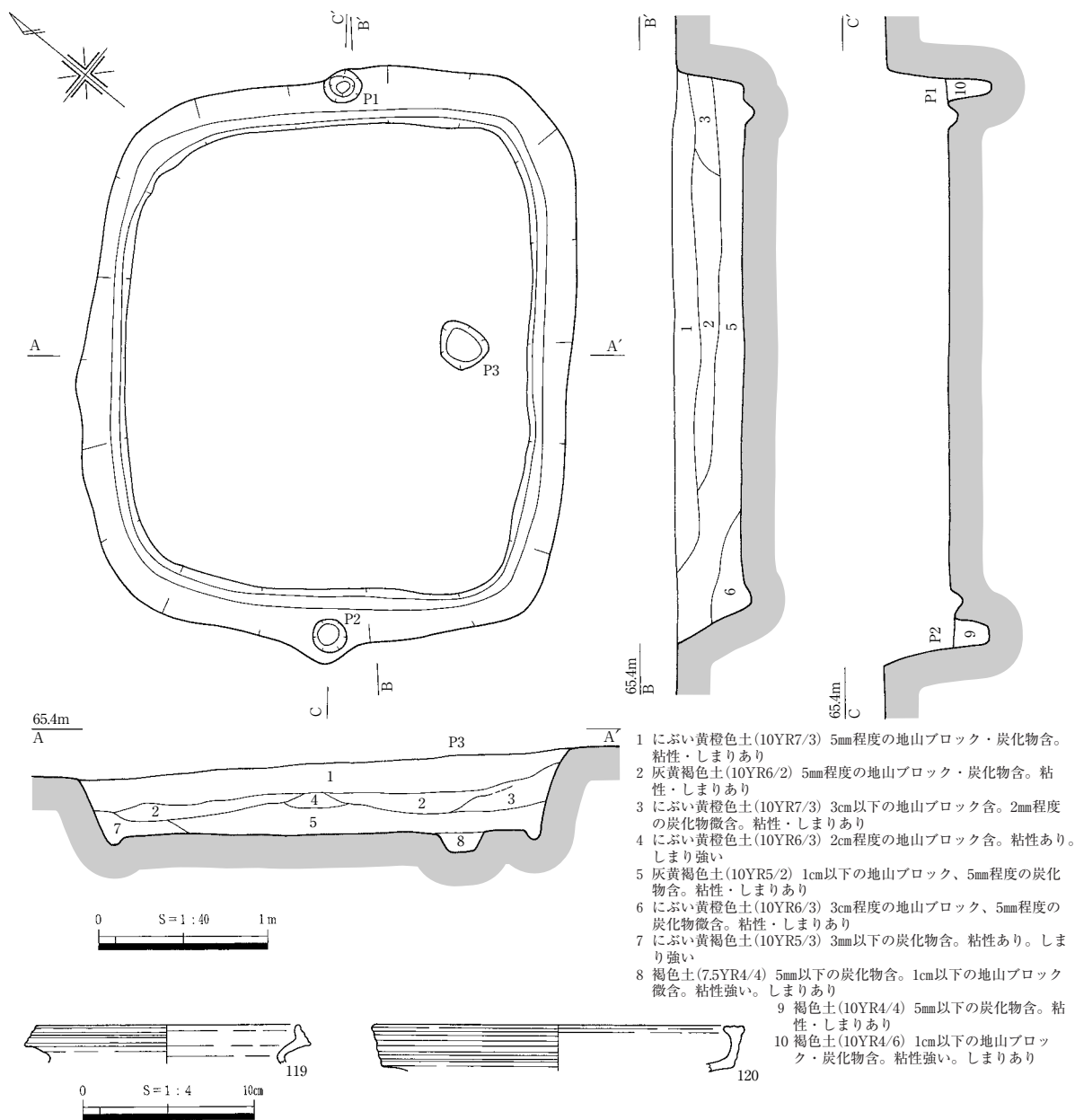
H32グリッド、SK93の西側約10mに位置する。長軸3.4m、短軸2.9mのやや隅丸を呈する方形で、深さは最大で45cmを測る。底面の面積は6.4㎡である。

壁に沿って溝底面幅7cm、深さ5cm程度の壁溝が全周する。SK93同様、短軸側のそれぞれ中央にはピットが対をなして設けられている。P1は土坑上面と同じ高さから掘り込まれており、P2の掘り込みは壁の途中から検出した。P1、P2ともに径約20cmで、土坑底面からの深さはP1が25cm、P2が20cmを測る。東壁のほぼ中央に近接して径30cm、深さ14cmのピットP3が認められた。

埋土の堆積状況もSK93同様、自然堆積と考えられる。

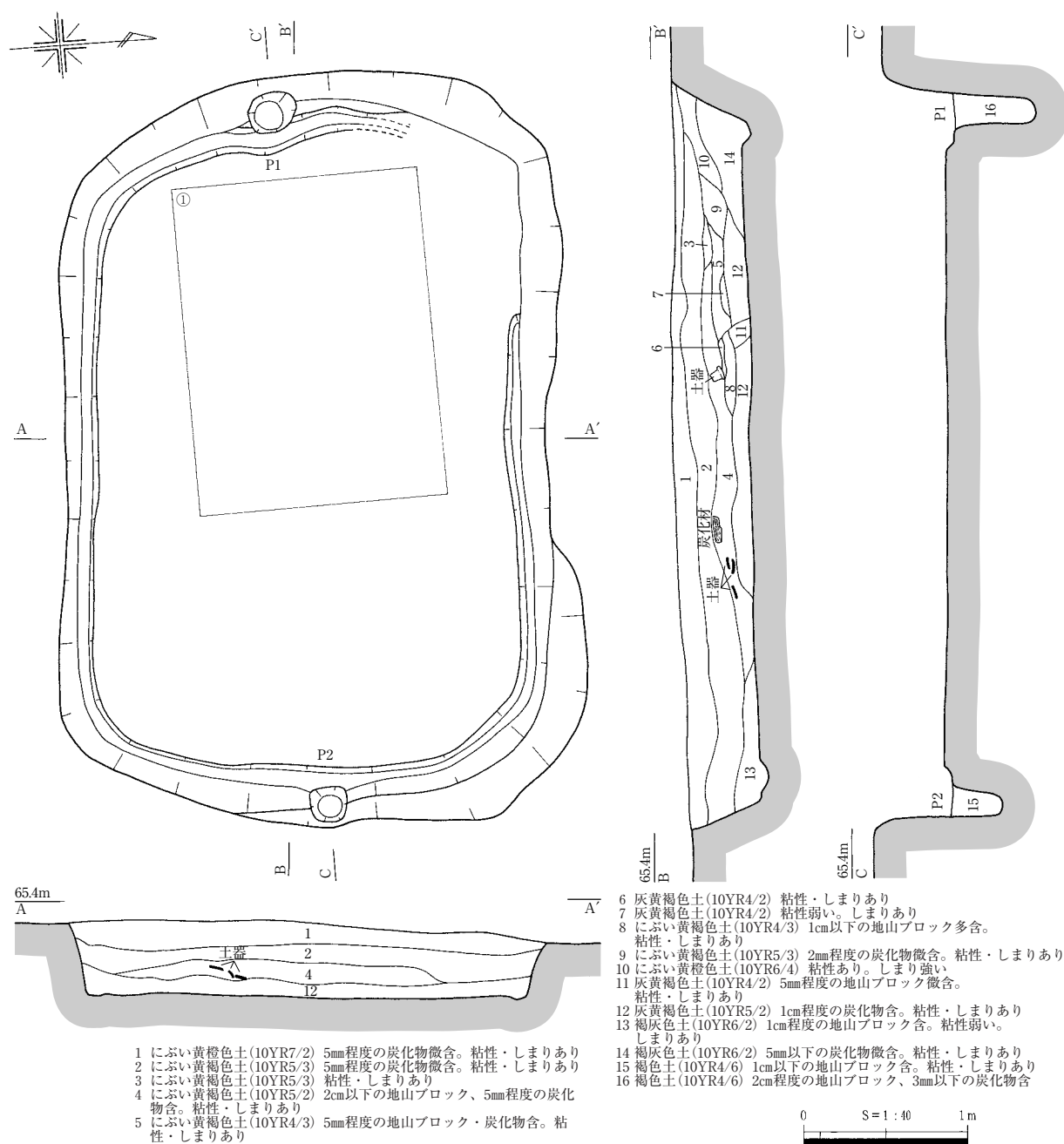
出土土器を2点図示した。119は拡張された口縁端部に3条の凹線文を施した甕。120は屈曲して立ち上がる口縁部外面と端部の平坦面に凹線文を加えた高坏である。

出土遺物の特徴から、SK99は弥生時代中期後葉(IV-2からIV-3)に位置づけられる。(湯村)



第60図 SK99および出土遺物





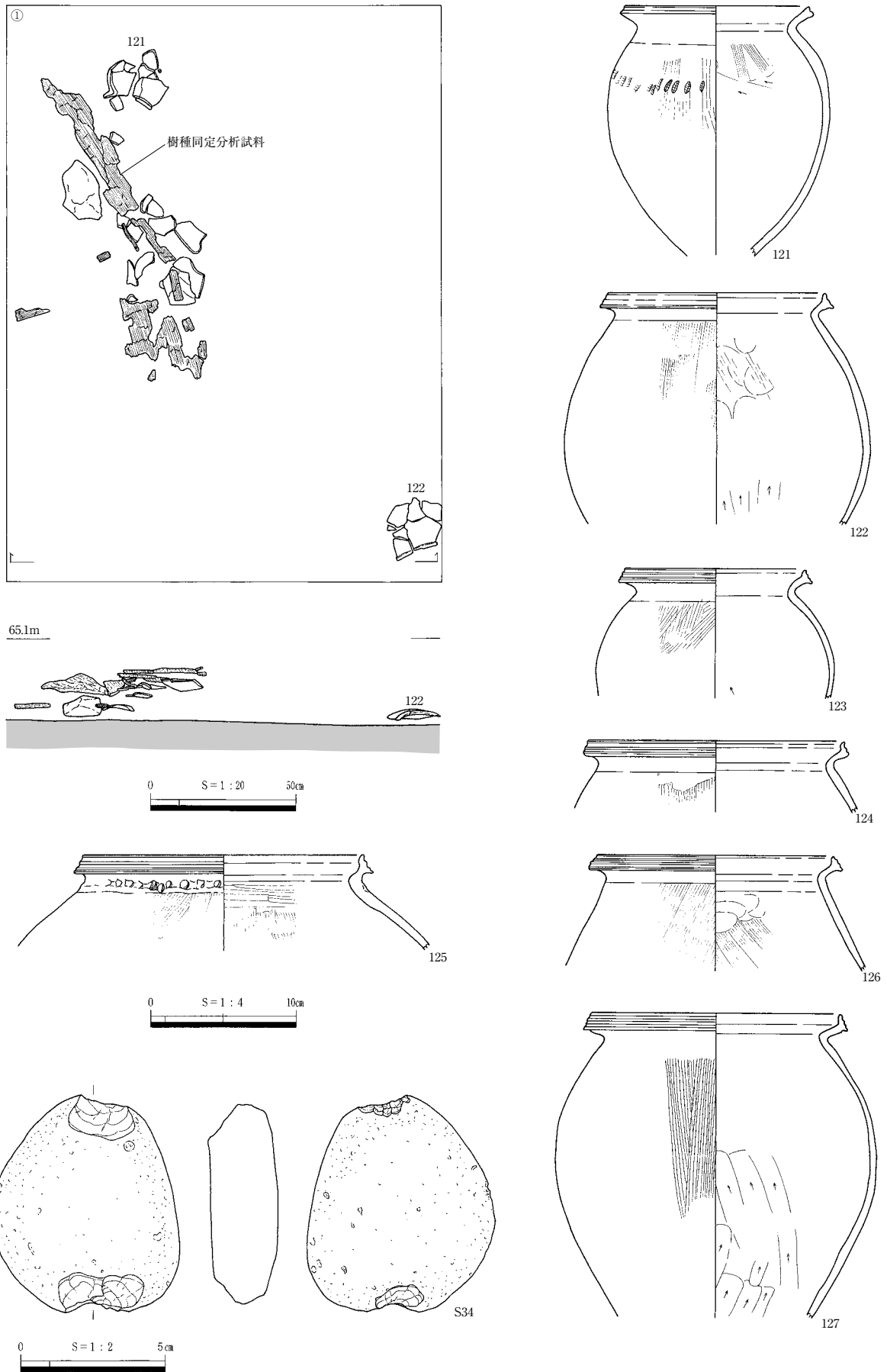
第61図 SK100

SK100 (第61・62図、PL.16・17・48・50・65)

G32からH32グリッド、SK93の北東に接して位置する。長軸4.6m、短軸3.0mのやや隅丸を呈する方形で、深さは最大で45cmを測る。底面の面積は9.7㎡である。

やはり壁に沿って溝底面幅7cm、深さ5cm程度の壁溝があり、北西隅あたりで途切れるがほぼ全周する。また短軸側のそれぞれ中央にはピットが対をなして設けられているのもSK99などと同様である。P1、P2ともに壁の途中から掘り込みを検出したもので、径20～30cm、土坑底面からの深さはP1が55cm、P2が35cmを測る。このふたつ以外にピットは認められなかった。

土坑の西半分付近の底面からやや浮いた位置で土器片などに混じり炭化材が出土した(第62図)。遺



第62図 SK100出土遺物

存状態の良好な部分で長さ55cm、幅10cm、厚さ1cm程度を測る板状のものである。樹種鑑定の結果、この炭化材はアカガシ亜属であった(第4章)。この樹種は今回調査したSI20や大山町茶畑六反田遺跡5区竪穴住居1、同4区竪穴住居2で出土した炭化材にも見られるもので<sup>(註)</sup>、出土した炭化材はSK100の上屋を構成する部材であった可能性がある。

埋土の堆積状況は、壁際を13、14層が埋めた後、中央付近を含め3～12層が堆積し、最終的に1、2層で埋没している。前述の炭化材は4層に含まれる。

出土土器を第62図に示した。121と122は、ほぼ底面に近い位置から出土している。121は肥厚する口縁端部に1条の凹線文を施す。体部内面のケズリは上半に達している。122は拡張された口縁端部に2条の凹線文を施した甕。内面のヘラケズリは体部下半にとどまる。123は体部半ばまでヘラケズリを行う。埋土最下層の12層出土。124～126は4、5層出土。125の頸部には形骸化した貼付突帯が見られる。127は1層出土。S34は扁平な礫の上下両端を打ち欠いた石錘で、12層から出土した。

以上の遺物から、SK100は弥生時代中期後葉(Ⅳ-2からⅣ-3)に位置づけられる。(湯村)

(註) 中森 祥編2004『茶畑六反田遺跡(0・5区)』(財)鳥取県教育文化財団  
野口良也編2007『茶畑六反田遺跡(4・5区)』鳥取県埋蔵文化財センター 所収

#### SK105 (第63図、PL.17・51・52)

G30からG31グリッドに位置し、約10m南にはSK100がある。長軸3.0m、短軸2.3mの方形で、深さは最大で20cmを測る。底面の面積は4.9㎡である。

南西隅のP1、北西隅のP2、北東隅のP3、P3を切るP4の4基のピットが確認された。P1が長軸30cmとやや楕円形となるほかは20cm程度の径で、深さもP2の15cmが最大で、そのほかは10cm未満である。壁に沿って溝底面幅、深さともに5cm前後の壁溝が全周する。

埋土中からは土器に混じって炭化材が出土した。いずれも小片で遺存状態は悪いが、壁際から土坑の長軸に直交するように残っており、SK100同様、上屋を構成する部材であった可能性がある。土器は135のような壺または高坏の脚もあるが、甕が多い。底面に近い位置から出土したものは130、133、135である。

以上の遺物から、SK105は弥生時代中期後葉(Ⅳ-2からⅣ-3)に位置づけられる。(湯村)

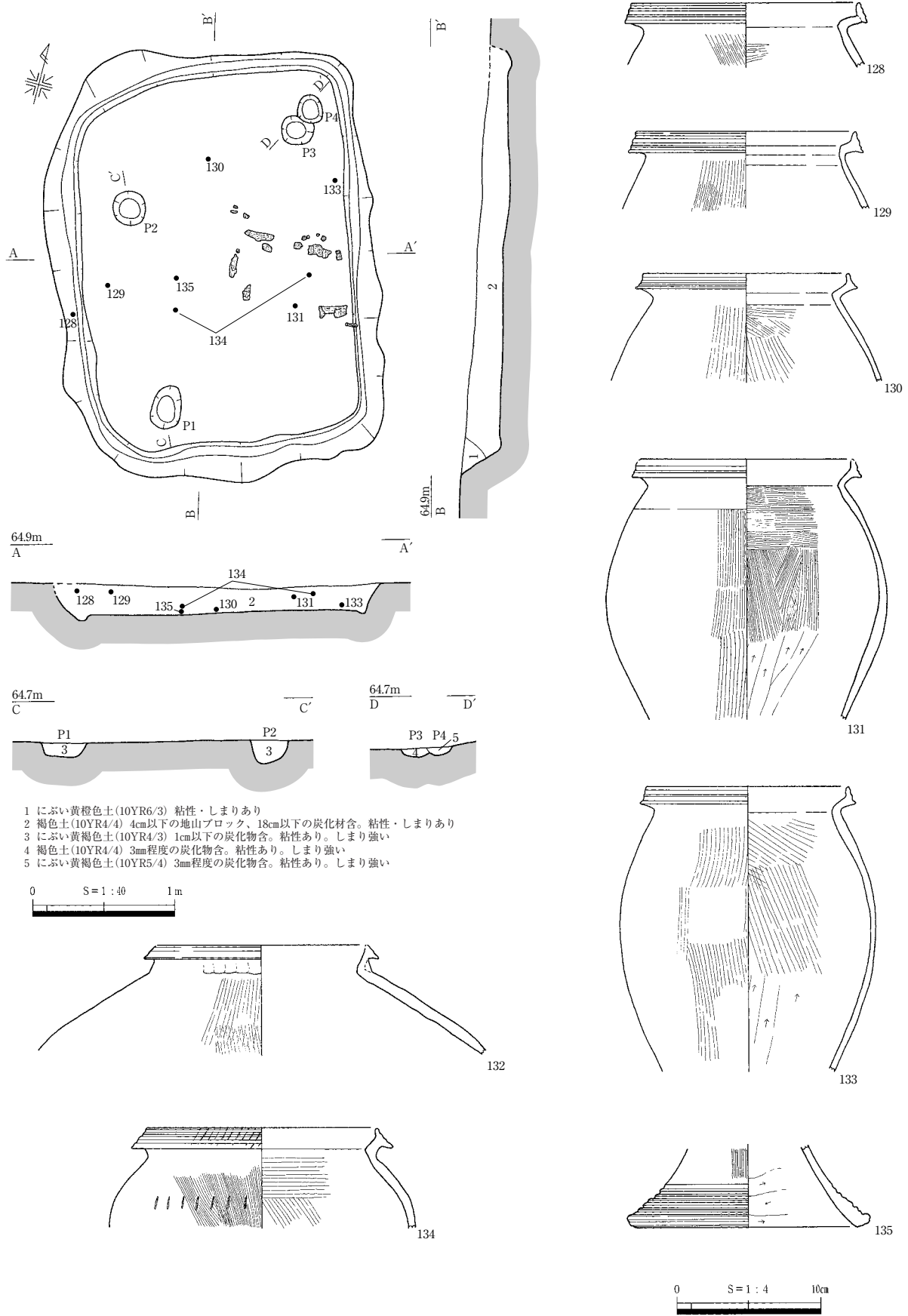
#### SK121 (第64・65図、PL.18・49・52)

H32グリッド、SK99の西に接して位置する。長軸4.5m、短軸3.3mの方形で、深さは最大で55cmを測る。底面の面積は10.0㎡である。

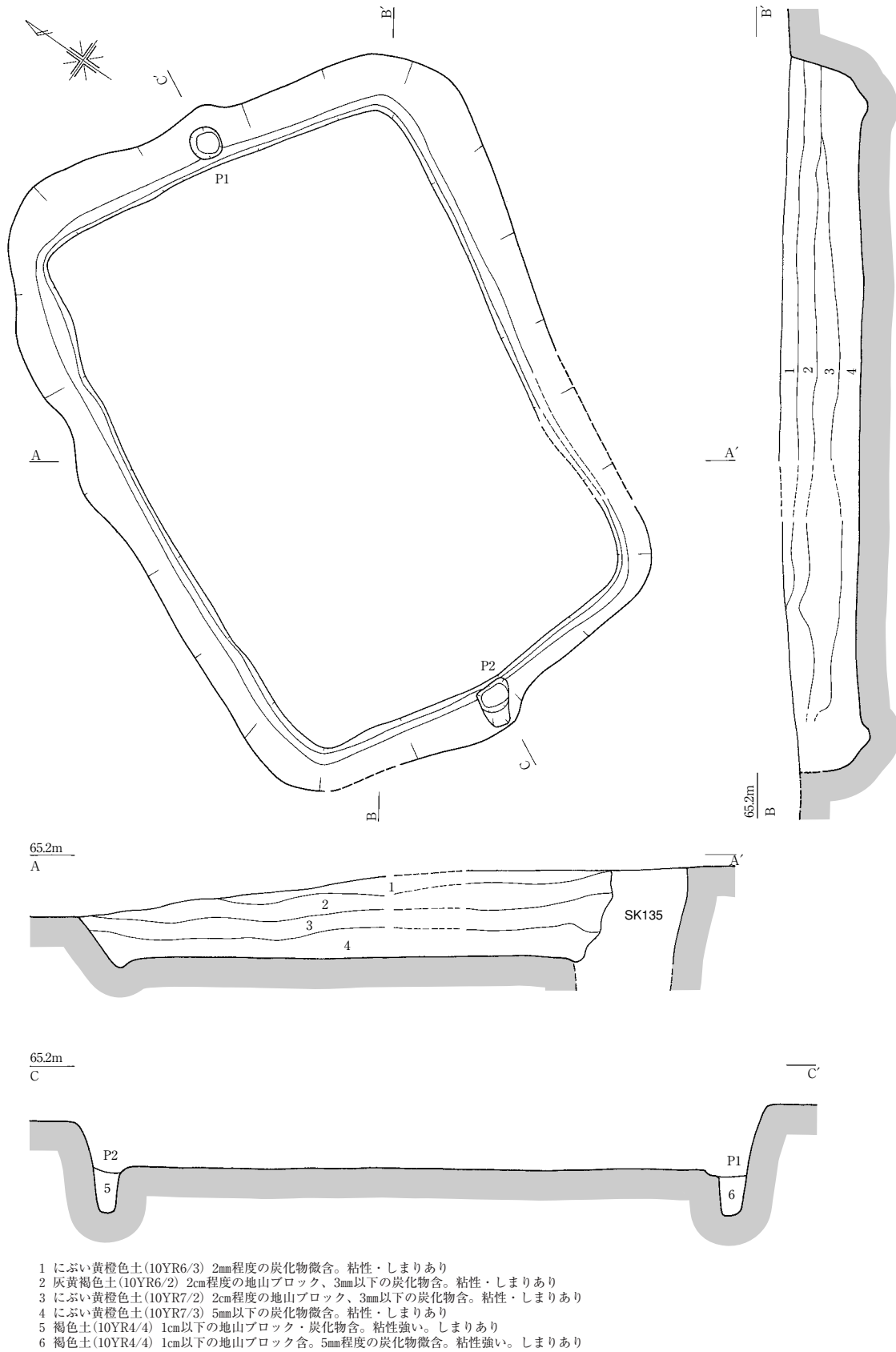
壁に沿って溝底面幅、深さともに5cm程度の壁溝が全周する。SK99などと同様に、短軸側のそれぞれ中央にはピットが対をなして設けられている。P1は壁の途中から掘り込みを検出し、P2は土坑の上面とほとんど同じ高さから掘り込まれている。ともに径約20cmで、土坑底面からの深さは30cmを測る。このふたつ以外にピットは認められない。

埋土は遺構全体を覆うように堆積しており、自然に埋没したものと思われる。

遺物は第65図に示した。136は2層から出土した小型の直口壺で、体部外面に線刻絵画がある。下半に描かれているのは右向きの魚と思われる。そのほかにも線刻が認められるが意匠は不明。頸部外

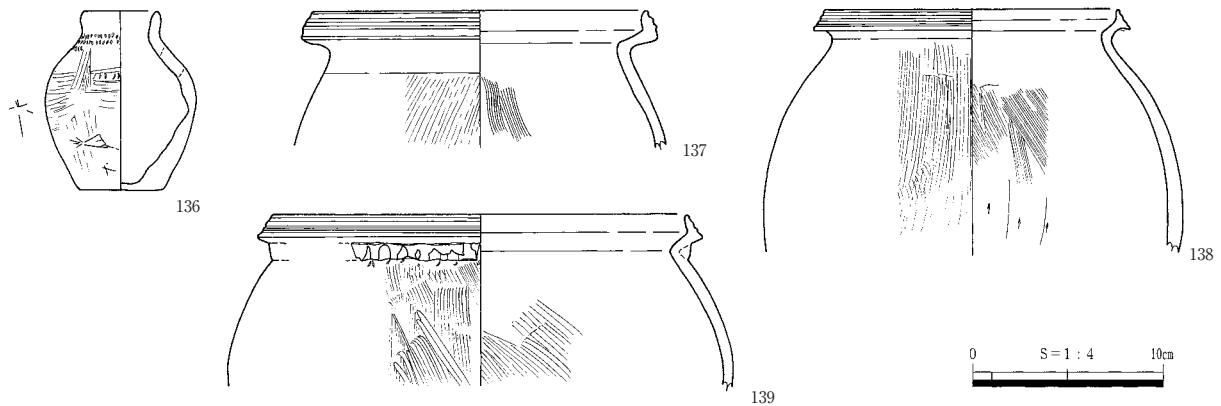


第63図 SK105および出土遺物

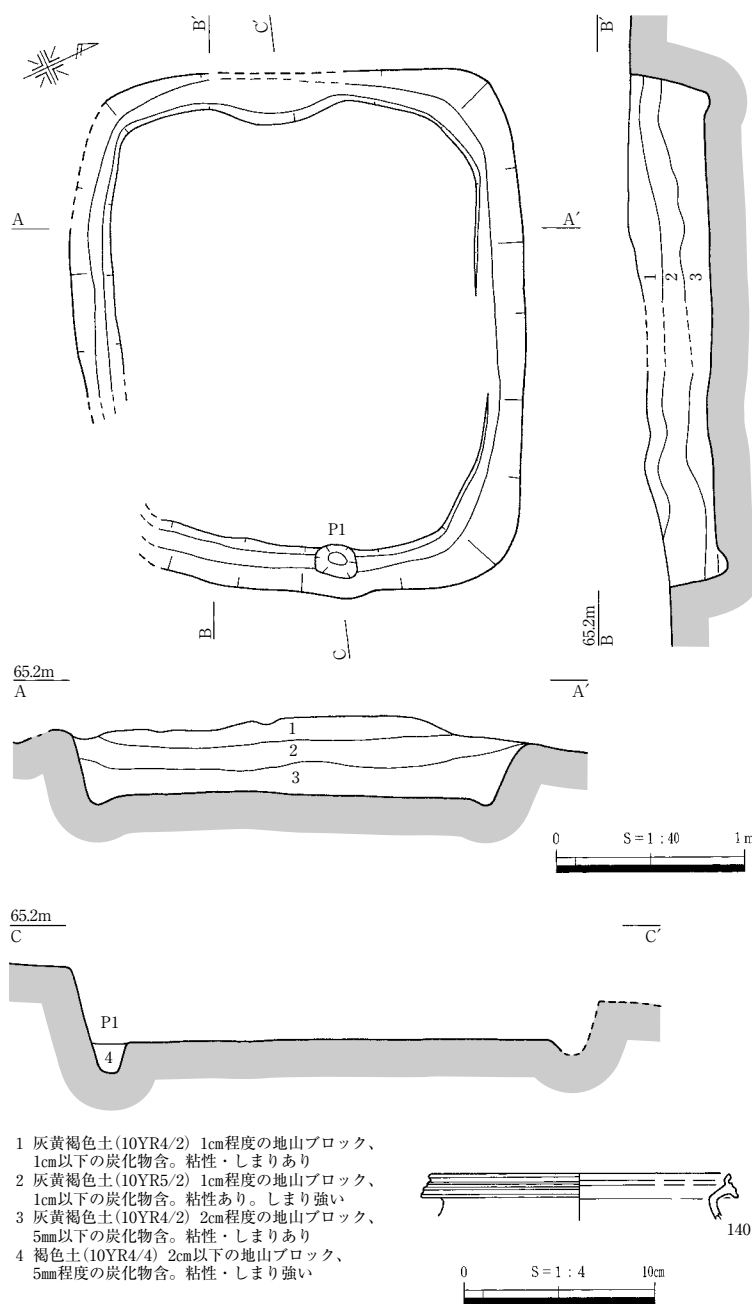


0 S=1:40 1m

第64図 SK121



第65図 SK121出土遺物



第66図 SK122および出土遺物

面に2段の刺突文を巡らせ、体部外面はミガキが施される。

137～139は甕。138は内面のヘラケズリが体部半ばに達している。137とともに3層出土。139は形骸化した貼付突帯を頸部に巡らせる。埋土最下層の4層から出土した。

出土遺物の特徴から、SK121は弥生時代中期後葉(IV-2からIV-3)に位置づけられる。(湯村)

SK122 (第66図、PL.18・49)

H31グリッド、SK121の北に接して位置する。長軸2.8m、短軸2.4mのやや隅丸の方形で、深さは最大で40cmを測る。底面の面積は4.4㎡である。

壁に沿って溝底面幅、深さともに7cm程度の壁溝がほぼ全周する。東壁の中央には長軸20cm、短軸15cmのP1が設けられている。土坑底面からの深さは約15cmを測る。これ以外にピットは認められない。

埋土は遺構全体を覆うように堆積しており、自然に埋没したもの

と思われる。

遺物は多くなく、土器140を示した。上下に拡張された口縁端部に3条の凹線文を施している。内面頸部以下の調整は、残っている範囲ではナデのみである。

140は最上層から出土したものであり遺構の時期を決定する根拠としては弱い。周辺の方形土坑の時期と同じ特徴を有しており、SK122も弥生時代中期後葉(IV-2からIV-3)の遺構と考えられる。

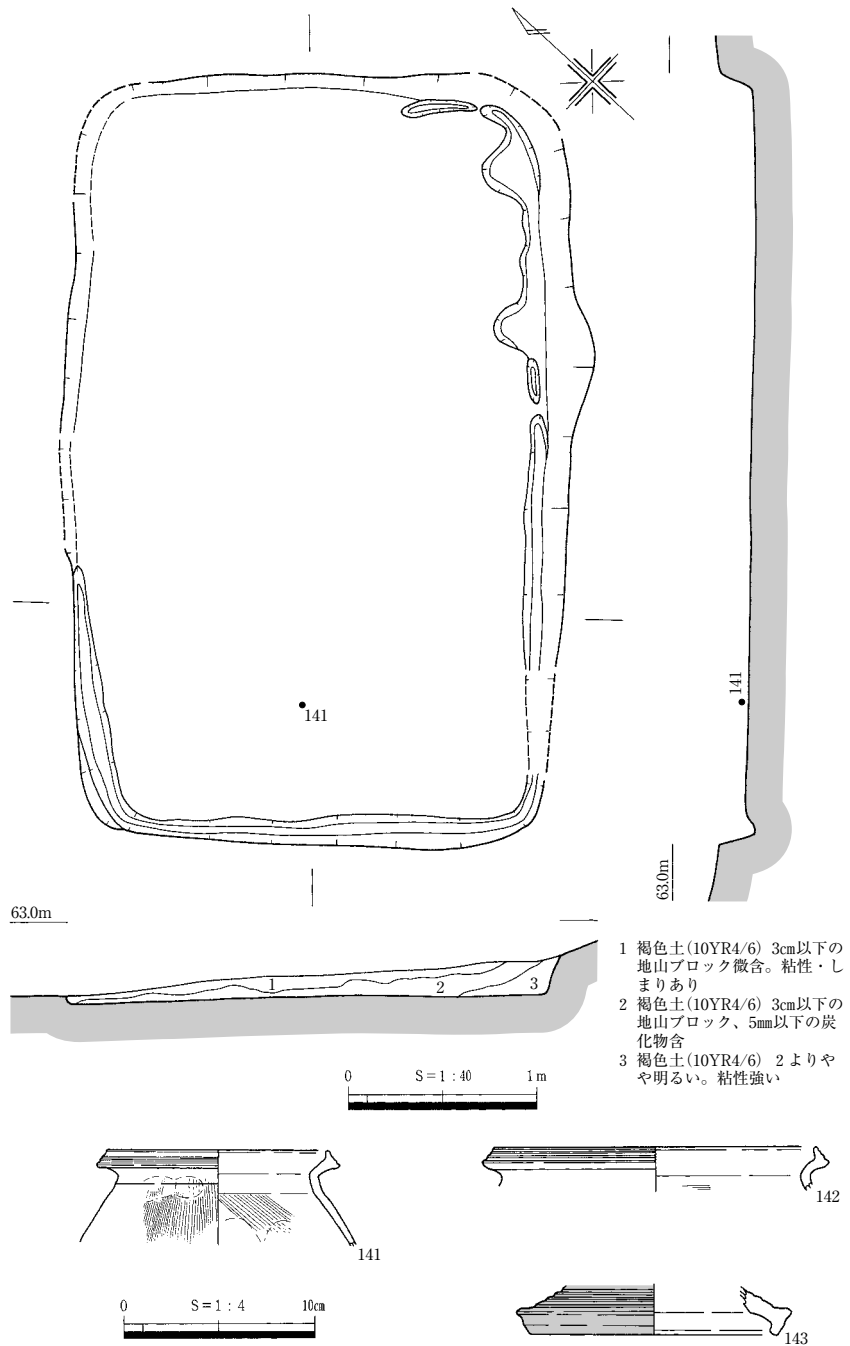
(湯村)

SK123 (第67図、PL.19・49)

G28グリッド、東尾根平坦部から谷部へ下る標高62.8mの緩斜面に位置し、北東側2.5mに墳丘墓が近接する。平面形は長軸4.13m、短軸2.81mの隅丸長方形を呈する。底面の面積は9.1㎡である。断面形は浅い逆台形で、検出面から底面までの深さは東側で最大26cmを測る。北西壁面と北隅は根の攪乱によって失われている。底面は平坦で、壁際から壁溝を検出した。壁溝は断面U字形で、幅20~34cm、深さは西側で最大6cmを測り、西辺中央から北東隅まで途切れ、半周する。

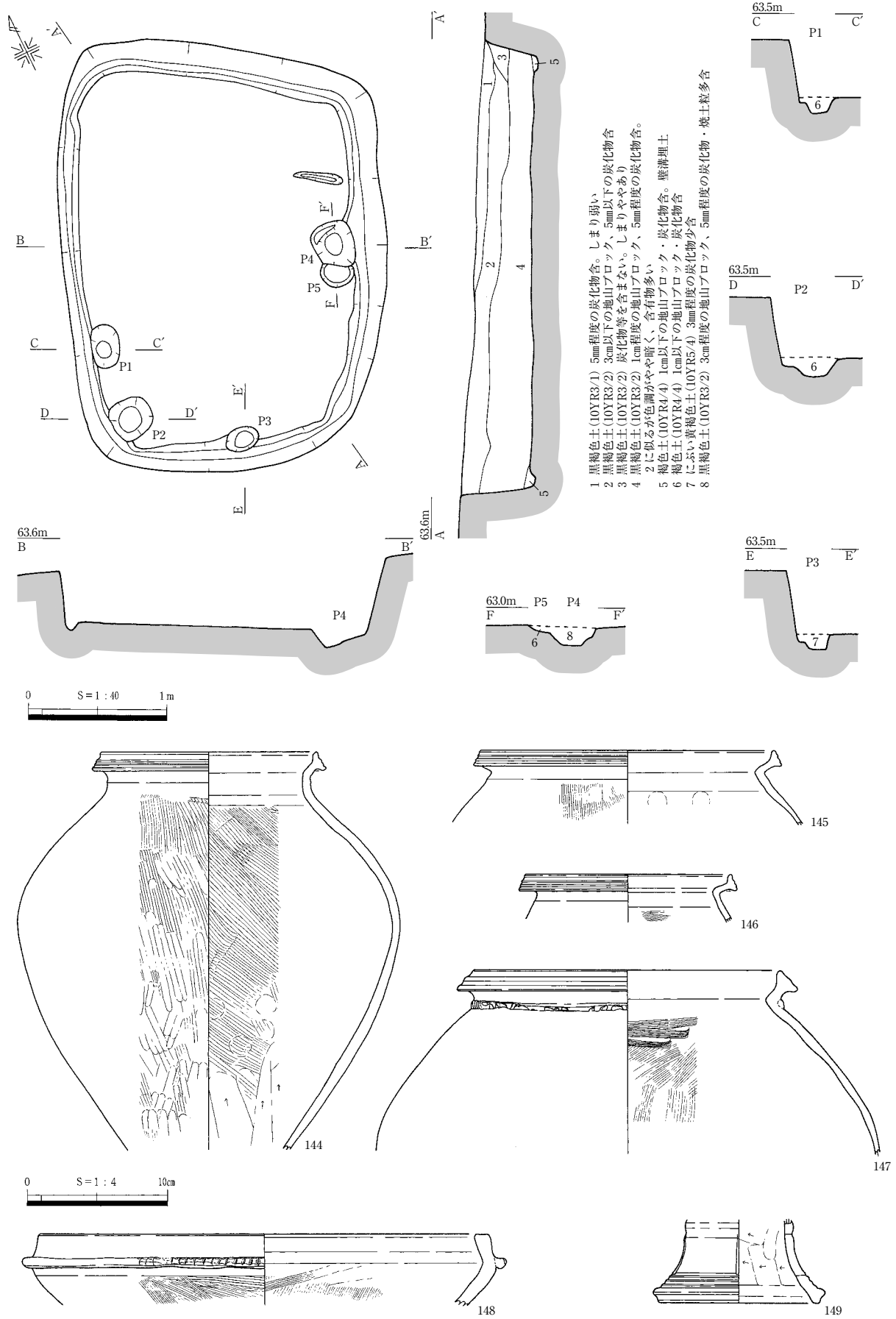
埋土は3層に分けられ、褐色系の土からなる。埋土は斜面の傾斜に沿うように堆積しており、土坑廃絶後に自然堆積したものと考えられる。遺物は1、2層から出土したものが多く、底面出土のものは少量であった。141は2層出土の甕。口縁部外面に3条の凹線文を施し、内外面はハケで調整する。

142は埋土中出土の甕。口縁部外面に3条の凹線文を施す。143は壺か高坏の脚部である。以上の出土遺物から本遺構の時期は弥生時代中期後葉(IV-2からIV-3)と考えられる。(大川)



第67図 SK123および出土遺物





第68図 SK127および出土遺物

## SK127 (第68図、PL.19・52・54)

I30グリッド、標高63.5mの谷頭に近い平坦面に位置し、約17m南東に大型の方形土坑がまとまって築かれている。

平面形は長軸3.12m、短軸2.37mの隅丸長方形を呈する。底面の面積は4.9㎡である。断面形は逆台形で、検出面から底面までの深さは、南側で最大50cmを測る。底面は平坦で、壁際から5基のピット、壁溝を検出した。壁溝は断面U字形で、幅11～15cm、深さは西側で最大6cmと浅い。P4の北側にも長さ38cm、幅6cm、深さ3cmの溝が1条延びる。P1～P5はいずれも壁溝に沿う。ピットの規模は長軸、短軸、深さの順でP1(33×22-14)cm、P2(34×32-12)cm、P3(26×17-10)cm、P4(36×30-14)cm、P5(24×17-6)cmを測り、いずれも浅い。P2が南西隅、P3が南辺、P4、P5が東辺のほぼ中央に位置するが、それぞれ対応するピットが対辺になく不規則な配置となる。

埋土はピットも含めて8層に分けられる。壁溝、ピットが埋没した後、比較的高所にあたる南から北に向けて、谷の傾斜に沿うように埋土は堆積しており、自然堆積と考えられる。他の土坑と埋土の質が異なり、黒褐色土を主体とするのは、本遺構が立地する谷地形に起因する堆積環境によるものと考えられる。

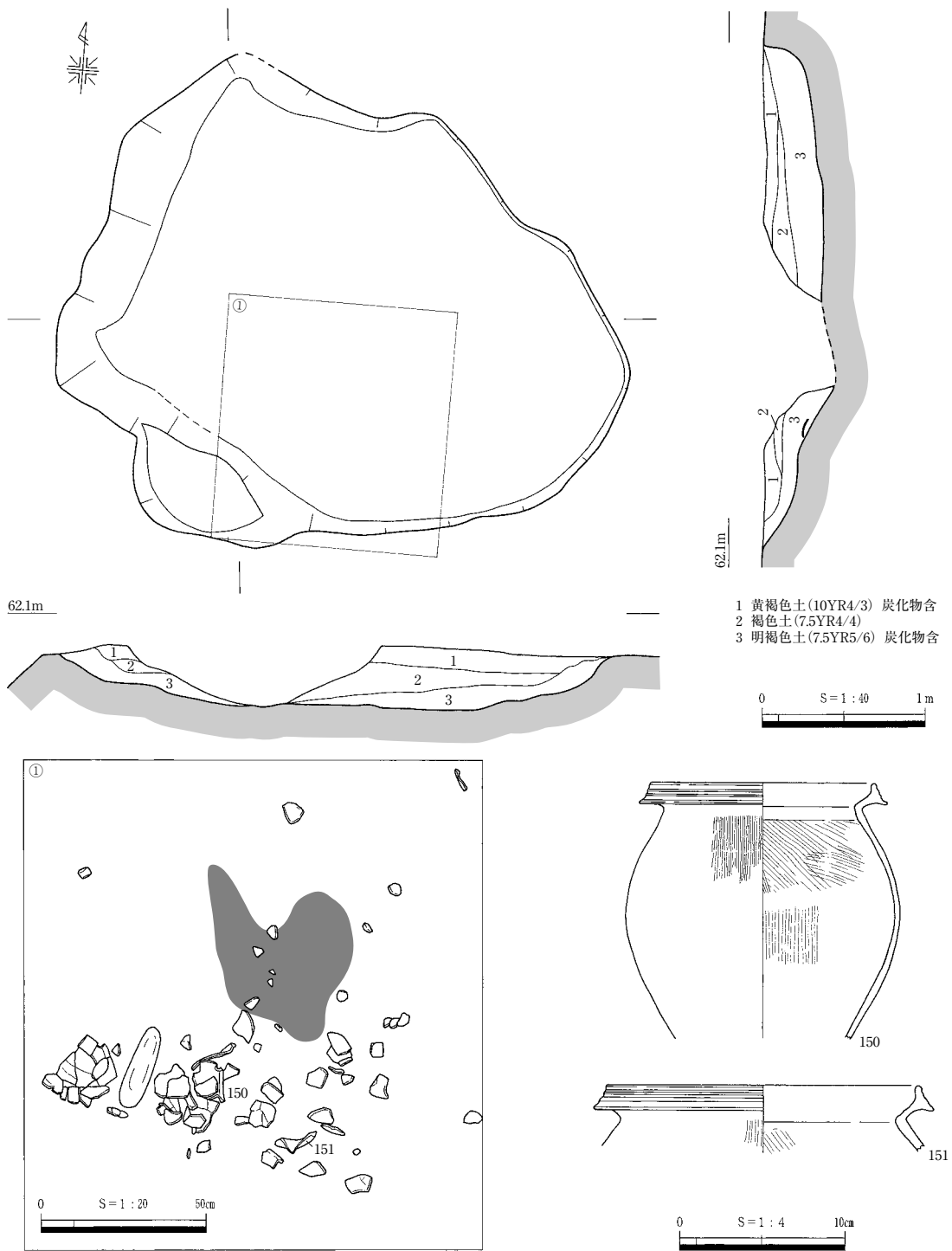
遺物は埋土中に比較的多く認められ、埋土の上部から出土したものが多く、底面出土のものは少なかった。埋土中から出土した壺144、甕145～147、高坏148、脚部149を図化している。144は口縁部外面に3条の凹線文を施し、体部内面のケズリは下部にとどまる。147は口縁部に2条の凹線文を施し、頸部には貼付突帯が施される。148は口縁部外面に突帯を巡らせ、突帯の表面にはキザミを施す。149は裾部に3条の凹線を巡らせ、透孔を穿つ。出土土器の特徴から本遺構の時期は弥生時代中期後葉(IV-2からIV-3)と考えられる。(大川)

## (5)土坑

## SK74 (第69図、PL.19・50・53)

AD29グリッド、5区の尾根上で検出した土坑である。長軸3.4m、短軸2.8mの不整形土坑である。検出面からの深さは40cmで、浅い皿状にくぼむ。中央やや南西よりでは、地山に至る深い木の根の攪乱が認められた。埋土は地山に由来する黄褐色系の粘性土で、3層に分層が可能である。最下層は地山に類似するが、炭化物を含む点で異なる。いずれも水平堆積であり、自然堆積により埋没したものとみられる。

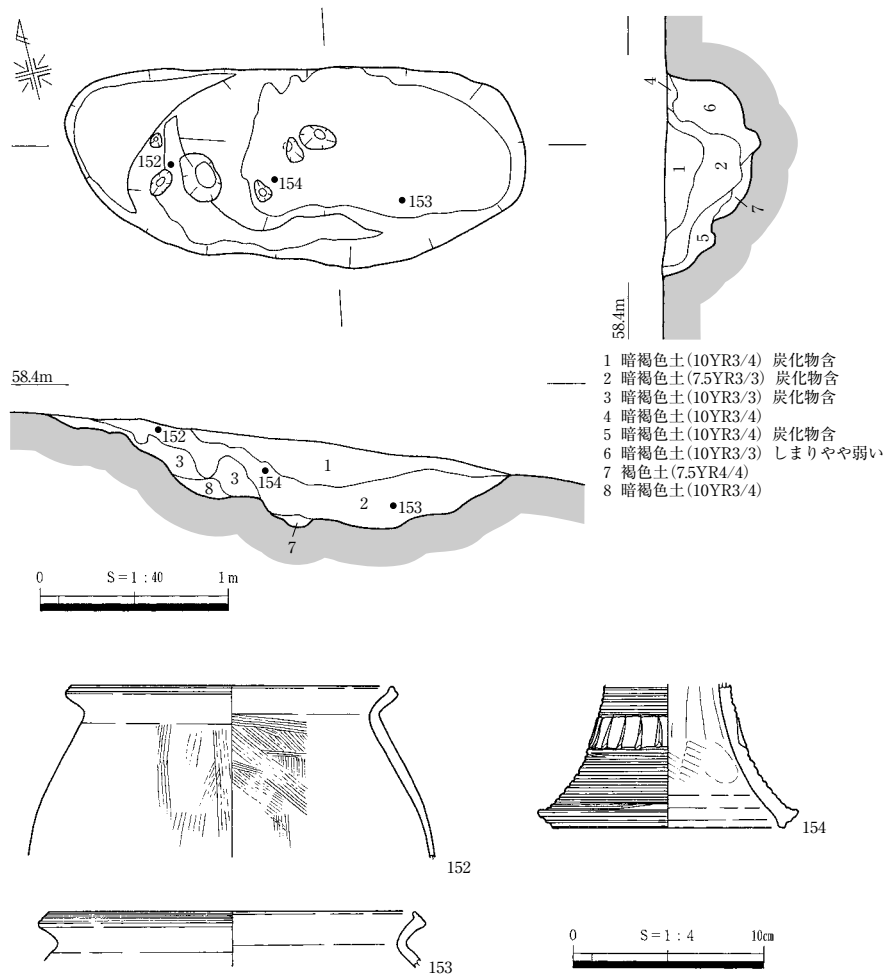
遺物は、最下層埋土中の底面よりやや高い位置から出土した。高所側にあたる土坑の南側から、土坑内に流入した状態で出土したことから、複数個体の甕の破片を一括して廃棄したものとみられる。出土した土器の大半は、口縁部から胴部にかけての細片で、底部は見受けられない。このうち2点を図化した。150は甕の口縁部から胴部にかけての破片である。口縁端部は上下に拡張し、4条の凹線文を施し、胴部内外面ともにハケメ調整を施す。151も甕の口縁部で、形態や調整は150に類似する。当該遺構出土の甕口縁部は、いずれも150や151と同様のものであり、頸部に貼付突帯がめぐるものは認められない。また遺構外出土遺物として掲載したS52の石庖丁(第148図)は、その一部の破片が当該遺構中央部の攪乱坑から出土しており、これに接合する破片も近くの表土に近いところから出土している。このことから石庖丁も本来当該遺構に伴う遺物であった可能性が高い。出土した土器は、IV-2からIV-3期のものであることから、弥生時代中期後葉の土坑とみられる。(小山)



第69図 SK74および出土遺物

SK76 (第70図、PL.20・53)

H19グリッドの4区北端の緩斜面にて検出した土坑である。長軸2.4m、短軸1.0mを測り、長楕円形を呈する。検出面からの深さ50cmで、底面は凹凸が著しい。埋土は高所側にあたる西側からの流入が顕著であり、自然堆積土とみられる。土器片が若干出土しているが、埋土の中・上層からの出土であり、埋没に伴う混入品とみられる。出土した土器はIV-1期のものであるが、先に述べたとおり当該遺構に伴うものではないので、土坑の時期を示すものではない。このため当該遺構の時期決定は難



第70図 SK76および出土遺物

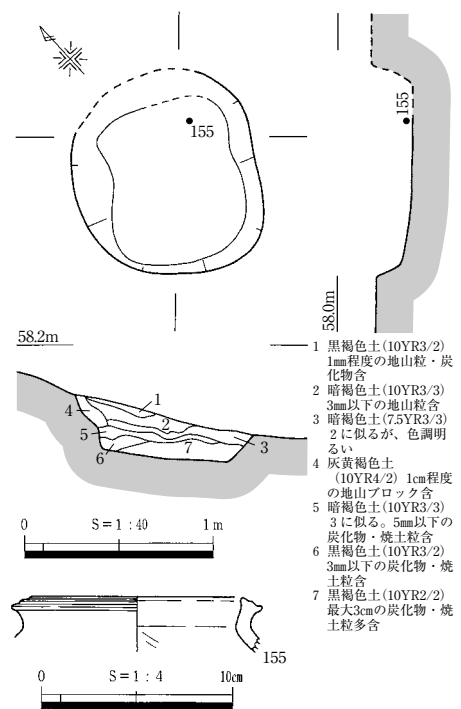
しいが、弥生時代中期後葉のものと思われる。(小山)

SK77 (第71図、PL.20・53)

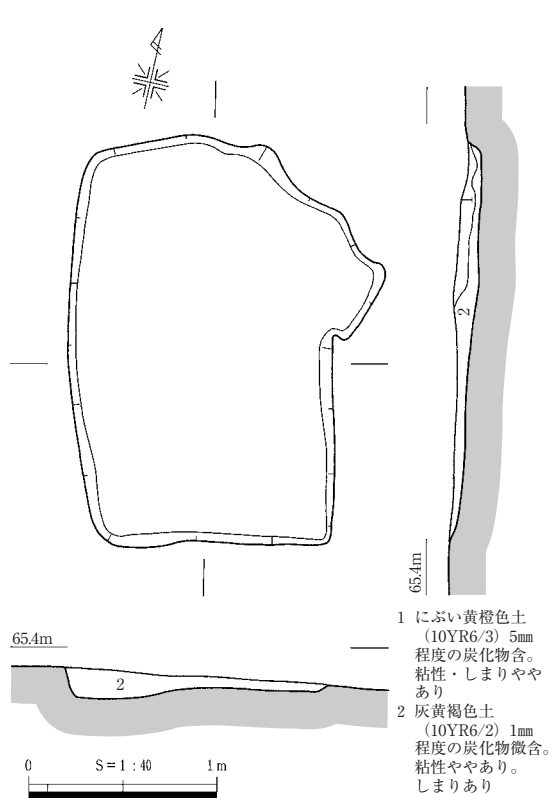
2区に近いH19グリッドで検出した。西尾根が谷に向かい下っていくところにある。長軸1.1m、短軸1.0mの円形で、深さは斜面上方で25cm、下方で15cmを測る。

埋土下層には炭化物や焼土粒を多く含み、とくに最下層の7層は炭化物の集中とっていいほど顕著であった。遺物は底面に貼りつくように155が出土した。口縁端部はあまり拡張されず2条の凹線文が施される。

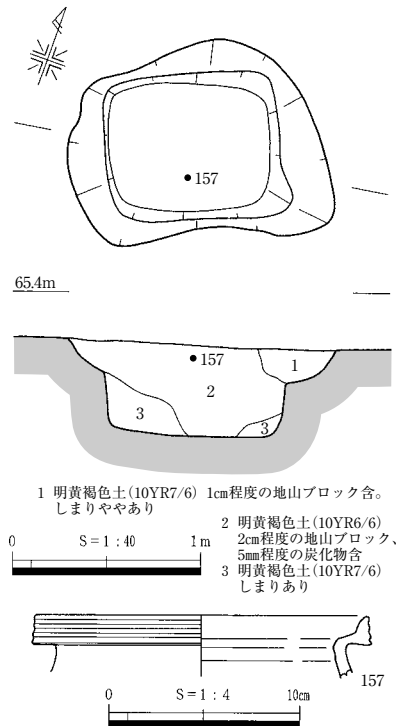
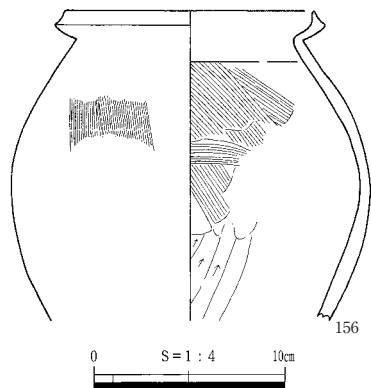
他に時期を知りうる遺物が出土しておらず、この1点のみを時期決定の根拠とするには少し弱い。土器の特徴に加え、遺構の位置がIV-1期の遺構分布域にあることから、弥生時代中期後葉でもIV-1期としておきたい。(湯村)



第71図 SK77および出土遺物



第72図 SK94および出土遺物



第73図 SK95および出土遺物

SK94 (第72図、PL.20・53)

F32グリッド、標高65.3mの東尾根平坦部に位置し、東側にSK95、西側2.5mの位置にSK93が近接する。平面形は長軸2.14m、短軸1.68mの歪な長方形を呈する。断面形は浅い逆台形となり、検出面から底面までの深さは西側で最大18cmを測る。底面は平坦で、ピット等は認められなかった。

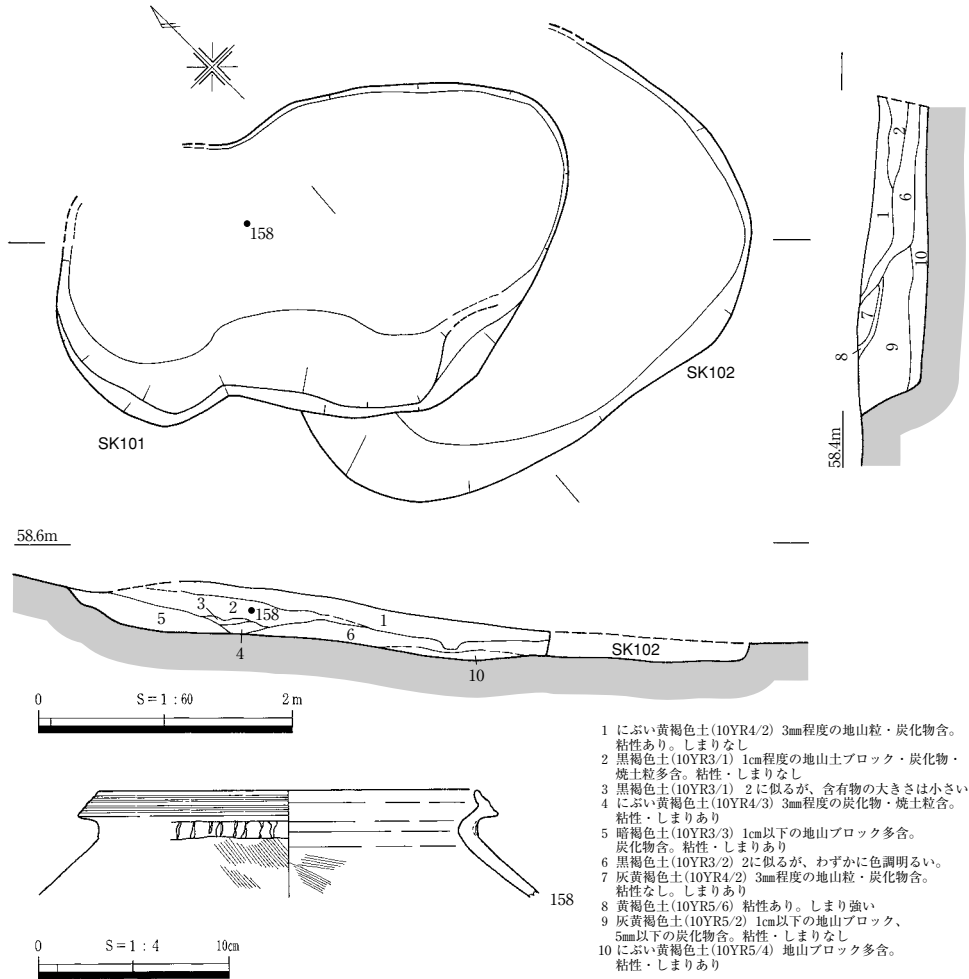
埋土は2層に分けられる。遺物は埋土上層から出土しており、下層あるいは底面出土のものは少なかった。156は1層から出土した甕。口縁端部を内傾させ

直立気味に立ち上げる。出土遺物の特徴から本遺構の時期は弥生時代中期後葉(IV-2からIV-3)には廃絶していたものと考えられる。(大川)

SK95 (第73図、PL.20・48)

F32グリッド、標高65.1mの東尾根平坦部に位置し、西側にSK94が近接する。上面は長軸1.44m、短軸1.08mの不整長方形を呈するが、2段掘りとなる土坑の下半は比較的整った方形となる。上半部が崩れた状態を示している可能性もある。検出面から底面までの深さは最大54cmを測る。

埋土は3層に分けられ、3層が底面壁際に堆積した後、2層が全体に堆積することから、自然堆積と考えられる。遺物は埋土上層から出土しており、下層あるいは底面出土のものは無かった。157は甕。口縁部外面に3条の凹線を施す。出土土器の特徴から本遺構は弥生時代中期後葉(IV-2からIV-3)には廃絶していたものと考えられる。(大川)



第74図 SK101・102および出土遺物

SK101 (第74図、PL.20・51)

H22グリッドに位置し、SI22の北に近接する。谷に向かう斜面に築かれた土坑である。長軸4.3m、短軸2.6mの不整形で、深さは30cmを測る。

大型の土坑であるが、底面にはピットなどは認められなかった。

埋土中から出土した158を示した。拡張された口縁端部に4条の凹線文が施され、頸部には形骸化した貼付突帯がある。出土した土器の特徴から、弥生時代中期後葉(IV-2からIV-3)の遺構と考えられる。(湯村)

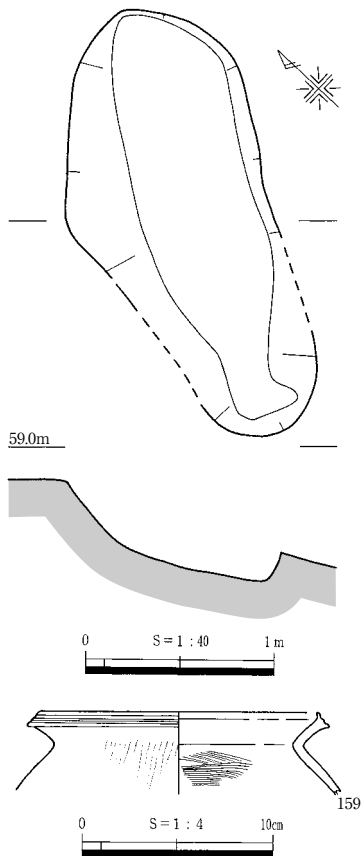
SK102 (第74図、PL.20)

SK101に切られる。斜面上方では一部検出しきれておらず、長軸4.0m、短軸3.5m程度の楕円形の土坑と推定される。南壁が最も深く、50cmを測る。SK101同様、ピットなどは伴っていない。図化できる遺物はなかったが、SK101と同時期の遺構と考えられる。(湯村)

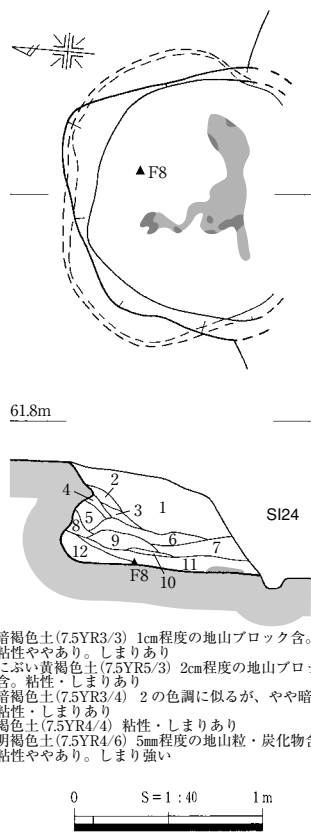
SK104 (第75図、PL.21・51)

H22グリッド、SK101の北西に接して位置する。長軸2.4m、短軸1.2mの長楕円形を呈し、深さは30cmである。標高58.5m前後の等高線に長軸が沿うように掘られている。底面は斜面の傾斜に従いわず





第75図 SK104および出土遺物



第76図 SK115および出土遺物

- 1 暗褐色土(7.5YR3/3) 1cm程度の地山ブロック含。粘性ややあり。しまりあり
- 2 にぶい黄褐色土(7.5YR5/3) 2cm程度の地山ブロック含。粘性・しまりあり
- 3 暗褐色土(7.5YR3/4) 2の色調に似るが、やや暗い。粘性・しまりあり
- 4 褐色土(7.5YR4/4) 粘性・しまりあり
- 5 明褐色土(7.5YR4/6) 5mm程度の地山粒・炭化物含。粘性ややあり。しまり強い

- 6 褐色土(7.5YR4/4) 1cm程度の地山ブロック多含。粘性・しまりあり
- 7 暗褐色土(7.5YR3/4) 5mm程度の地山粒・炭化物多含。粘性ややあり。しまりあり
- 8 明褐色土(7.5YR4/6) 1cm程度の黒色土ブロック多含。粘性・しまりあり
- 9 にぶい褐色土(7.5YR5/3) 5mm程度の炭化物含。粘性弱い。しまりあり
- 10 明褐色土(7.5YR3/4) 5mm程度の炭化物含。粘性あり。しまりやや弱い
- 11 褐色土(7.5YR4/3) 5mm程度の炭化物・焼土粒多含。粘性あり。しまりやや弱い
- 12 明褐色土(7.5YR4/6) 2mm程度の炭化物多含。粘性・しまりあり

かに傾くが、全体としては平坦である。

埋土上層に土器片がまとまっていた。159は口縁端部を上下に拡張し、2条の凹線文を施した甕である。近接するSK101、102同様、弥生時代中期後葉(IV-2からIV-3)の遺構と考えられる。(湯村)

### SK106 (第77図、PL.21・51・68)

西尾根北側で弥生時代の住居跡が集中しているところにあり、I25からJ25グリッドにまたがった、谷に向かい傾斜が変換する地点に築かれている。SI18が西に近接する。

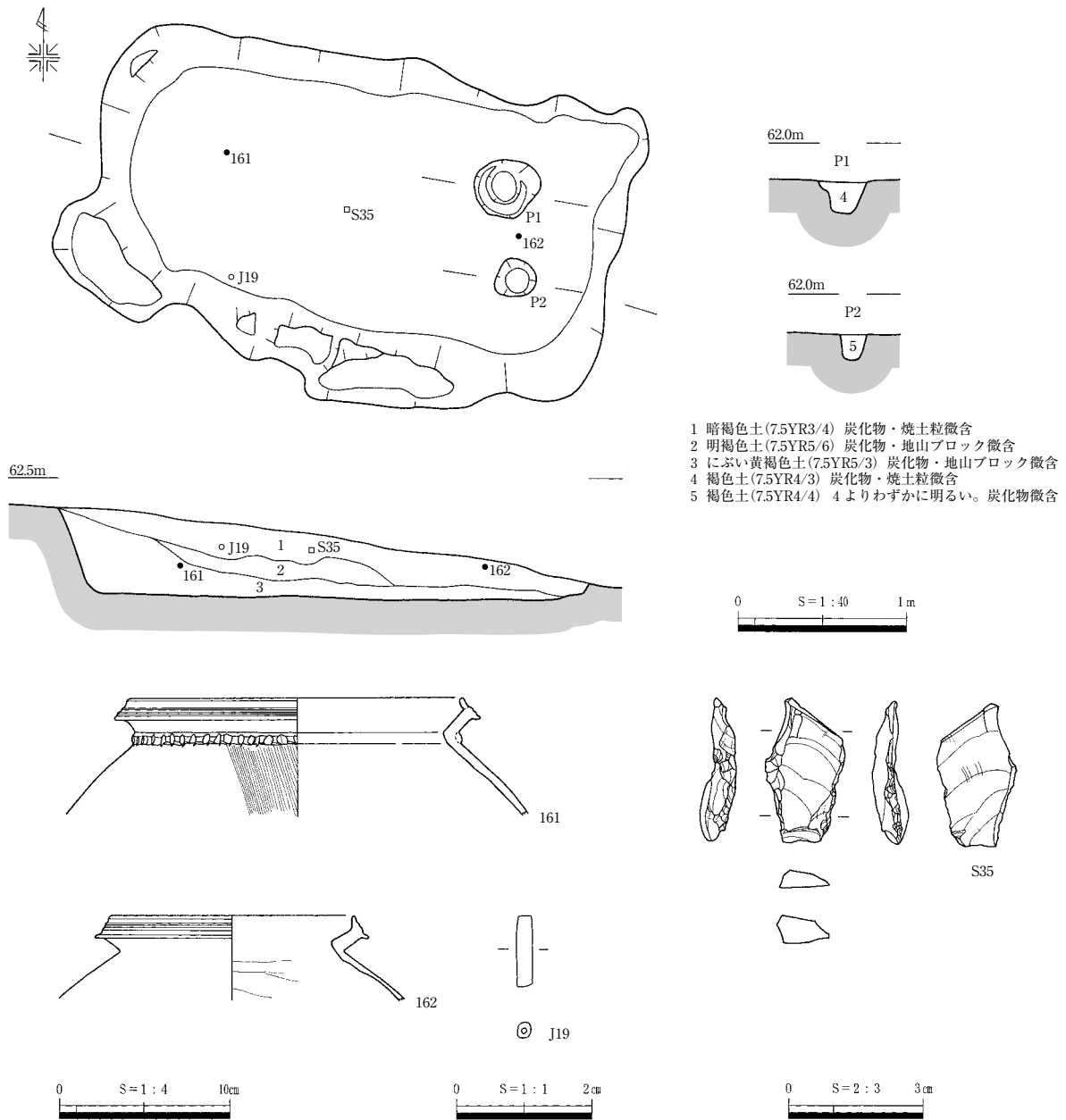
東西方向に長軸を向けた、長軸3.2m、短軸2.0mの不整形な長方形を呈する。斜面の上方では最大50cmの深さを測るが、下方では立ち上がりは10cmもない。東側底面にふたつのピットが並んでいる。P1は長軸45cm、短軸35cmの2段掘りで、深さは20cmである。P2はひと回り小さく、径25cm、深さ15cmである。

遺物は埋土中から出土している。161の貼付突帯は形骸化しきっていない。162の器壁は肩部より下がはつきりと厚みを減じている。内面に明瞭なケズリを認めたわけではないが、ケズリ後ナデを施した可能性も考えられる。J19は管玉。緑色凝灰岩と思われるが灰白色がかっている。S35はナイフ形石器である。右側縁は腹面側から、

左側縁は背腹両面から加工して切り出し形に仕上げている。刃部背面側は平坦な剥離面で、素材剥片を剥離した石核の素材面か。腹面を見ると素材剥片の打点は基部からそう遠くなく、縦長を志向しつつも寸づまりな剥片を素材としていと考えられる。器体は摩滅していない。

S35のように遺物の流れ込みも見られ、土器も新相、古相を示しているが、遺構の時期としては、弥生時代中期後葉(IV-2からIV-3)と思われる。(湯村)





第77図 SK106および出土遺物

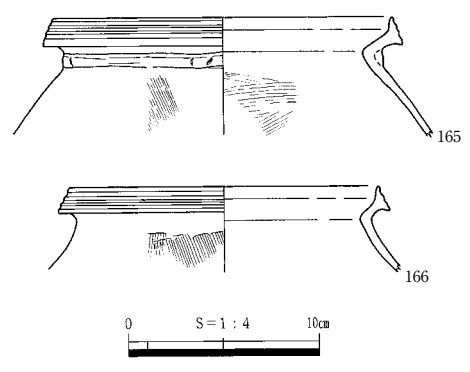
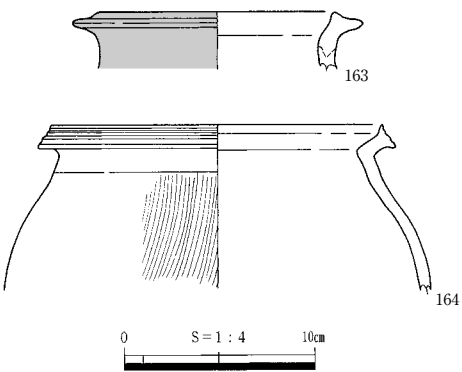
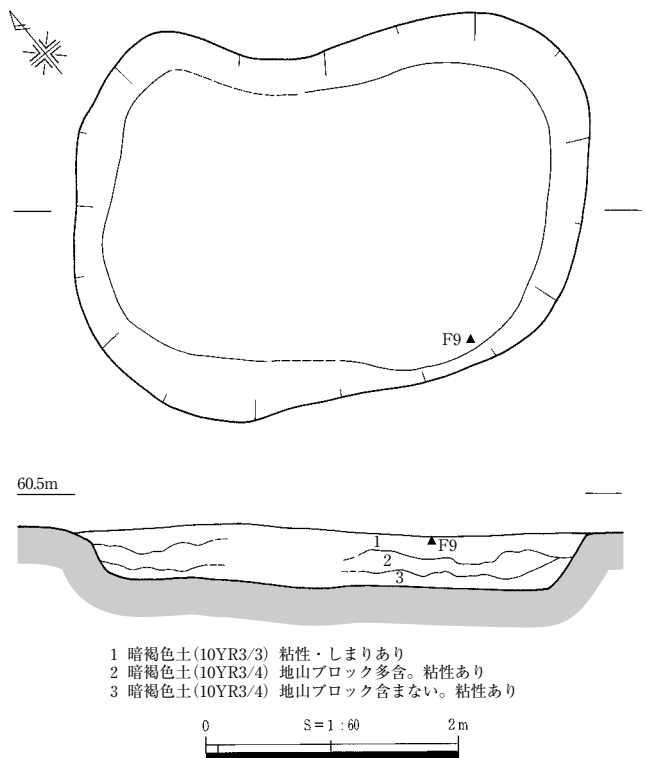
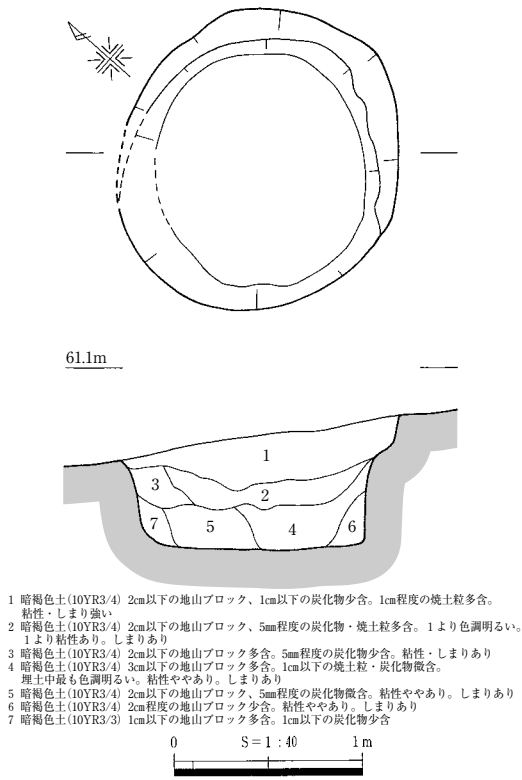
SK115 (第76図、PL.21・51・70)

J24杭に近接し、SI24に切られる土坑である。推定される平面形は、上縁部の直径1.4m、内部の最も広がる部分の直径1.6m、底部の直径1.5mの歪な円形である。断面形はフラスコ状を呈し、形態的な特徴から貯蔵穴と考える。深さは最大55cmある。

底面上に堆積する11層は焼土や炭化物を多く含んでおり、遺物も出土していることから、貯蔵穴としての機能した後、廃棄土坑として利用されたものと推測する。

160は11層出土の甕である。口縁部は上下に拡張し、外面に4条の凹線を施す。残存している範囲内で内面にヘラケズリ調整は認められず、これらの特徴から弥生時代中期後葉(IV-2からIV-3)に比定される。鉄器F8は底面直上出土。刃先は失っているが、袋状のノミの可能性はある。

以上の特徴から、本遺構の廃絶時期は弥生時代中期後葉(IV-2からIV-3)と考える。(長尾)



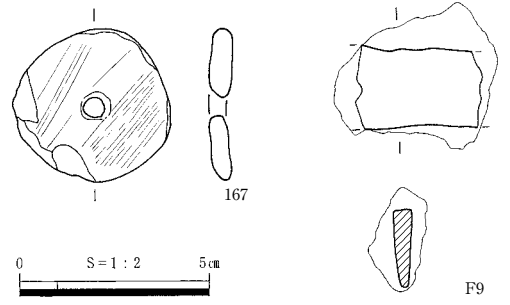
第78図 SK118および出土遺物

SK118 (第78図、PL.21・51)

G26グリッド、東尾根から谷部に向かう標高60.7mの斜面に位置し、東側1.5mの位置にSS8が近接する。平面形は長軸1.59m、短軸1.48mの円形を呈する。断面形は逆台形であり、検出面から底面までの深さは東側で最大70cmを測る。

埋土は7層に分けられる。6、7層が底面壁際に堆積した後、レンズ状に堆積することから、自然堆積と考えられる。遺物は埋土上層からの出土が多く、下層あるいは底面出土のものはなかった。163は1層から出土した壺。外面に赤彩が施される。164も1層出土の甕。口縁部外面に3条の凹線文を施す。出土土器の特徴から本遺構は弥生時代中期後葉(IV-2からIV-3)には廃絶していたものと考えられる。

(大川)



第79図 SK119および出土遺物

SK119 (第79図、PL.21・54・64・70)

谷の底にあたるH25グリッドに位置する。北西にはSI37が近接する。当初は遺構を認識できなかったが、谷の土層堆積を確認するために設定したトレンチで存在を確認した。

長軸4.0m、短軸3.3mの不整楕円形で、底面は広く平坦である。深さは最大で45cmを測る。

埋土中から出土した遺物を示した。165、166ともに拡張された口縁端部に3条の凹線文を施す。165の頸部には貼付突帯が見られるが、上からナデつけられている。167は土器体部片を用いた紡錘車。両面から穿孔されている。F9は厚手の器体で一側縁を刃部としている。

SK119は、弥生時代中期後葉(IV-2からIV-3)の遺構と考えられる。(湯村)

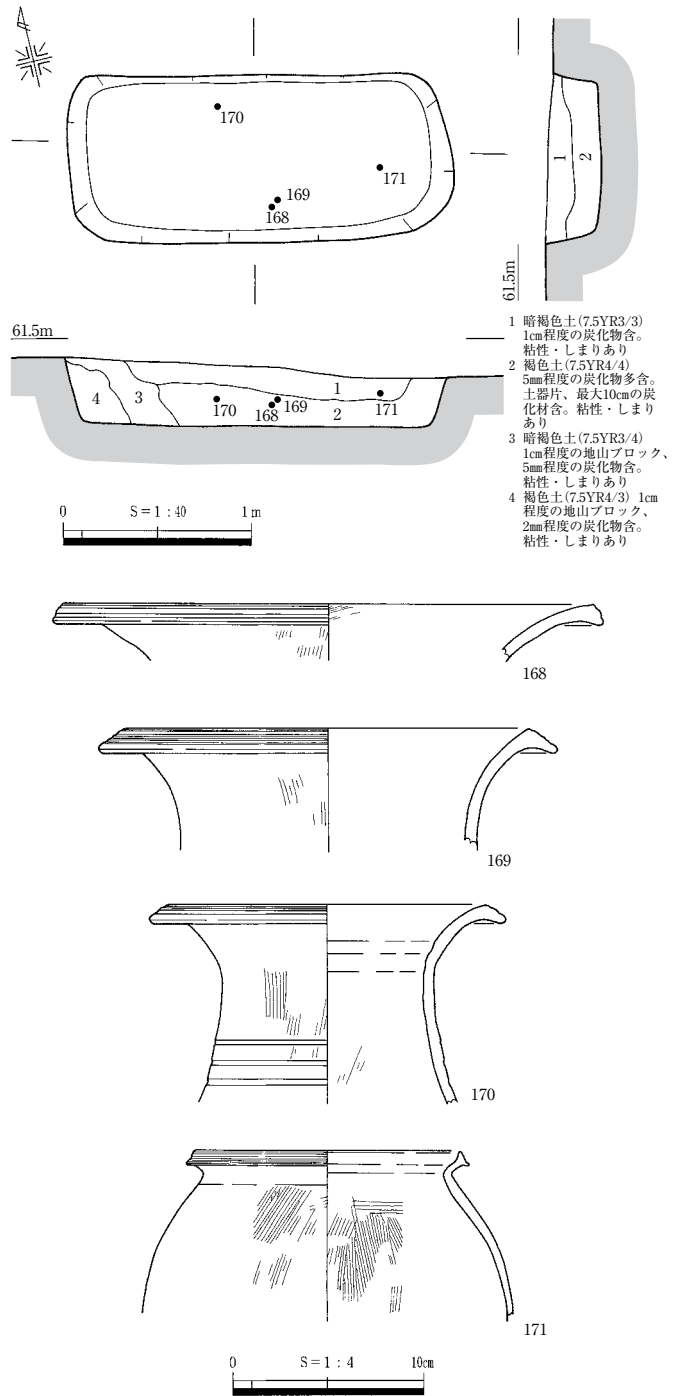
SK126 (第80図、PL.22・49)

J22グリッド、標高61.3m付近の緩斜面に位置する。

平面形は長軸2m、短軸90cmの長方形で、深さが45cmである。底面に溝やピットは検出しておらず、遺構の性格は不明である。

埋土は4層に分かれ、そのうち2層には炭化物とともに大ぶりの土器片が含まれていた。完形に復元できたものではなく、炭化材と共に廃棄されたものと推測する。

168~170は広口壺である。口縁部を水平方向に引き出し、下方に拡張するもので、端部には凹線文を施している。170では頸部にも3条の凹線文が認められる。171は甕で、口縁部は上下に拡張し、内面にヘラケズリ調整は認められないが、口縁端部の凹線文は多条化している。これらの遺物の特徴から、本遺構の廃絶時期は弥生時代中期後葉(IV-2からIV-3)と考える。(長尾)



第80図 SK126および出土遺物



写真4 SK126遺物出土状況(西から)

SK137 (第81・82図、PL.22・54)

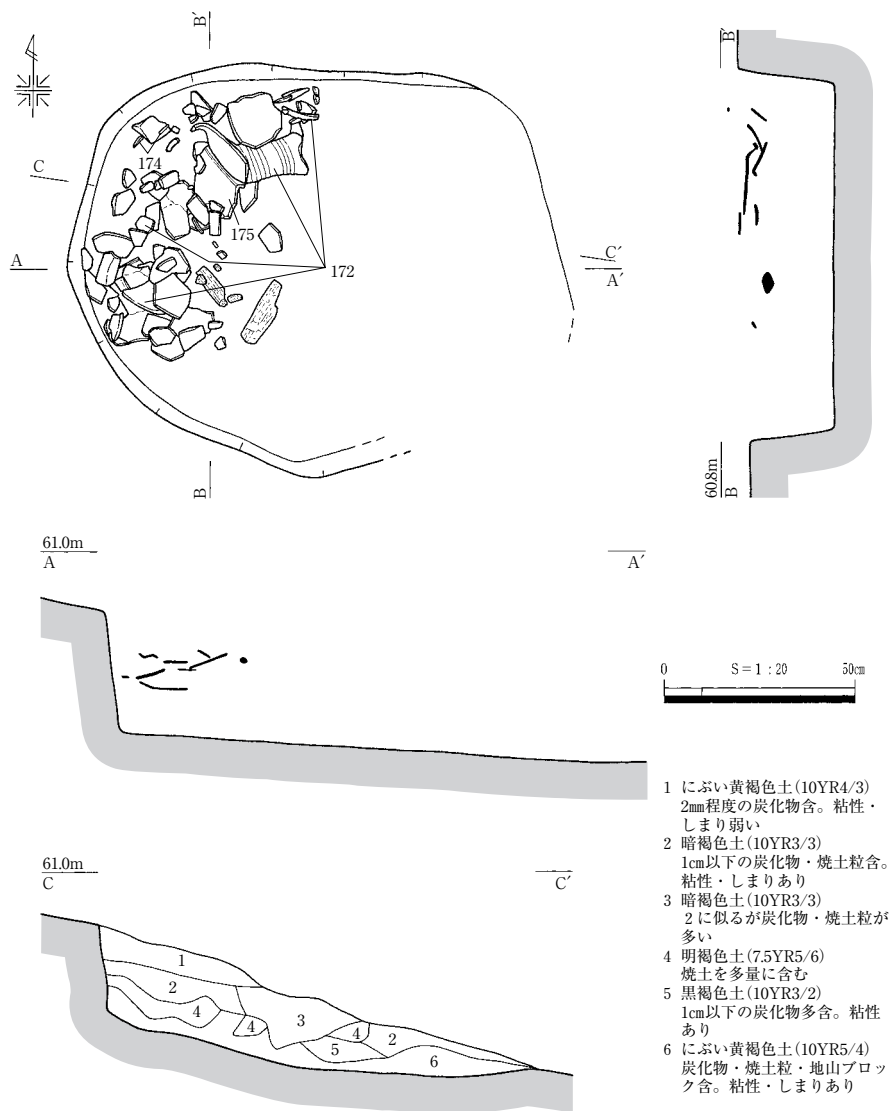
西尾根北側の住居が集中するところの東側、I23グリッドの谷を臨む標高60.7m付近の斜面に位置する。長軸1.3m、短軸1.1mの円形で、深さは最大で30cmを測るが、斜面下方では立ち上がりは消えている。

検出した時点で多くの土器片が見られ、図化して取り上げた。埋土は全体的に炭化物を密に含み、間に焼土ブロックを挟む(4層)。遺物はこの焼土ブロックより上の炭化物層でのみ出土した。

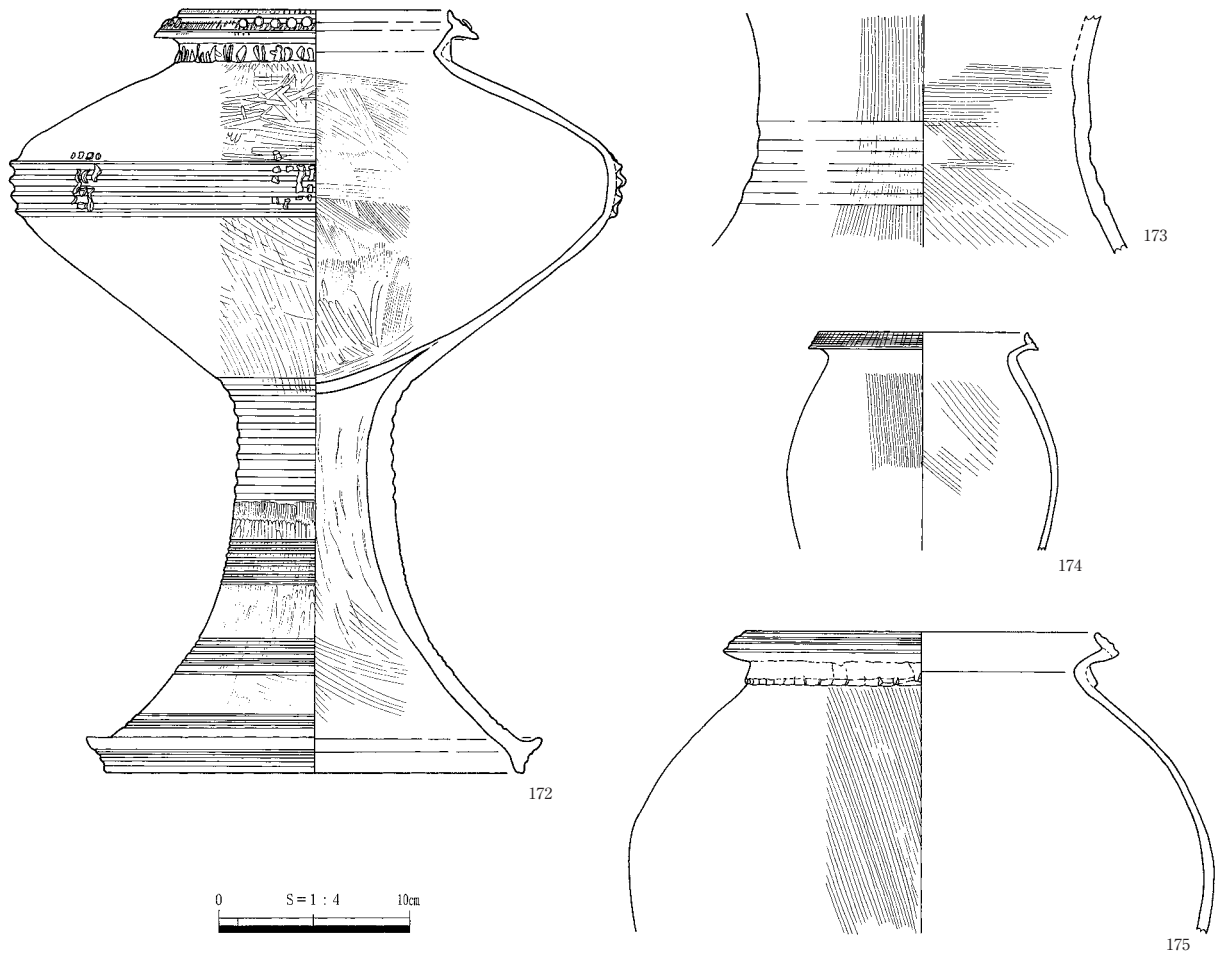
172は脚付壺で、体部上半より上の破片をかなり欠くが図上では復元できた。体部が算盤玉状に強く張り、外面調整にミガキが施され、浮文、突帯文、沈線文を加えるなど加飾性が強い。173はこの部分しか残っていなかったが、かなり大型の長頸壺か広口壺の頸部である。174は口縁端部にキザミも加える。175は大型の甕で、頸部の貼付突帯はナデつけられている。

出土土器の様相は祭祀的なものを感じさせるが、完形品があったわけではなく遺構の性格としては廃棄土坑と考えておきたい。

出土遺物の特徴から、SK137は弥生時代中期後葉(IV-2からIV-3)の遺構と考えられる。(湯村)



第81図 SK137



第82図 SK137出土遺物



写真5 SK137半裁状況(南から)

(6) 墳丘墓・SK116の概要(第83・84図、PL.23～25・55)

はじめに 第1章第2節(2)調査の経過で述べたように、保存協議を行うこととなったため、墳丘墓及び東に隣接するSK116は調査途中の状態では埋め戻しを行った。本年度の調査では主に墳丘の調査を行い、墳丘の盛土、貼石を確認した。埋葬施設については、墓壙の検出を行い、一部サブトレンチを設けて墓壙埋土の状況を確認している。またSK116を含めて土層観察用に設けたベルトはそのまま残し、調査を終えている。ここでは現時点の調査成果を概要として述べる。(大川)

**墳丘** 4区東尾根のF28からG29グリッド、南北に延びる尾根筋から西側斜面にかけてゆるやかに傾斜する標高63.0～63.8mの地点に築造されている。墳丘は長軸11.3m、短軸8.3mの長方形を呈し、墳丘裾から墳頂部までの高さ40～58cmを測る。

墳丘の南辺に緩やかなテラス面が形成される他、外表施設として貼石があり、墳丘の西側及び南側裾に区画溝が付設する。

墳丘は地山整形後、盛土を施して構築されている。

貼石は墳丘裾ではなく墳頂部の四辺に設けられ、長軸8.7m、短軸6.5mを測る。貼石には長径約30～60cmの垂角礫が用いられる。東辺は主に1～2段、西辺及び北辺は2～3段に石を重ね置くが、南辺は石の扁平な面を外側に向けて横一列に並置する等、貼石の形態は一様でない。西辺の中央には長さ1.6m、幅60cmの範囲に貼石を一部外側へ拡張させた張り出し部があり、東辺中央にも長さ96cm、幅70cmで張り出し状に石を配置した箇所が認められた。これら張り出し部の性格については、断ち割り調査等を行っていないため不明である。

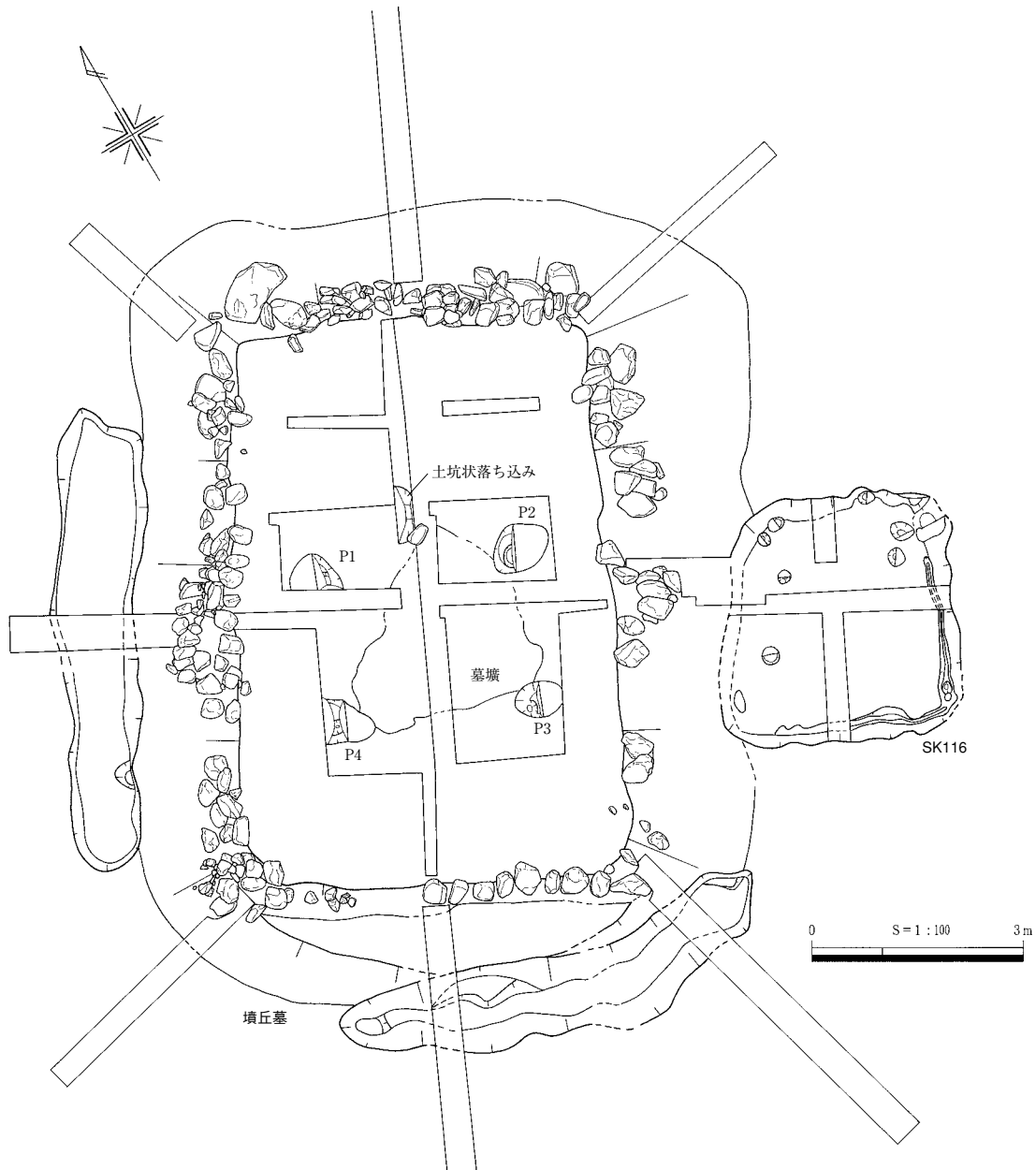
貼石の主な石材は船上山溶岩に由来する安山岩であり、船上山山塊を源流とし遺跡近傍を流れる河川の河床礫が利用されている。貼石の一部には、海岸部からの採取が想定される砂岩も認められた(註)。区画溝は地山を掘り込んで構築され、西側区画溝は長さ6.5m、幅89cm～1.22m、深さ11～17cmを測る。南側区画溝は長さ6.15m、幅88cm～1.26m、深さ3～17cmを測り、やや弧状を呈し東端は墳丘南東隅まで延びる。(大川)

**埋葬施設** 墳頂部の中央にて墓壙を1基検出した。墓壙は盛土直下の地山面から掘り込まれており、長軸2.7m、短軸2.6m、深さ52cmを測る不整形を呈する。墓壙内は断ち割り調査のみにとどめたが、その所見から墓壙は、北側に浅いテラスをもつ片側2段墓壙とみられる。下段墓壙内の断面観察では、平坦な墓壙底から立ち上がる2本のラインが認められ、木棺痕跡の可能性はある。これが妥当であれば、箱形木棺が納められていたものと考えられる。

また墓壙の検出作業の途中、墓壙を取り囲む4基の柱穴の存在が明らかとなった。柱穴の芯々間で囲まれる範囲は東西約2.7m、南北約2.1mを測る。柱穴の規模が明らかかなP2では、長軸89cm、短軸68cm、検出面からの深さ約70cmを測る。またP2では、不明瞭ながら直径約20cmの柱痕跡が認められた。

柱穴の検出面はいずれも地山面であり、一部墓壙埋土を切る。盛土の断面にて本来の掘り込み面を検討したところ、盛土の途中で掘り込まれていることが判明した。遺物は、P3埋土中から土器が出土したほか、墓壙内から1点、また盛土中からも若干の土器片が出土した。このうちP3出土の甕は墳丘墓の北側に位置する竪穴住居跡SI26から出土した土器と接合した(第29図65)。また墓壙北側の地山面にて土坑状の落ち込みを検出したが、出土遺物も皆無なため、性格は不明である。(小山)

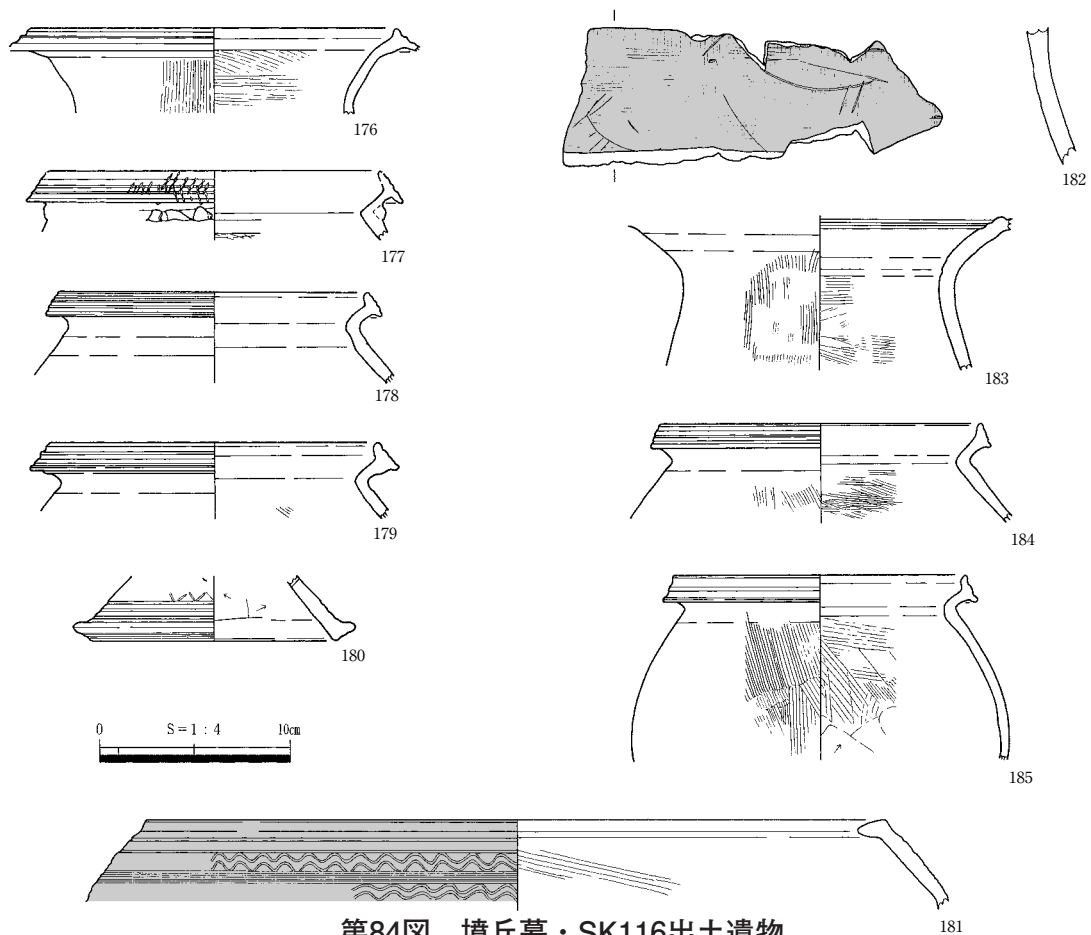




第83図 墳丘墓・SK116平面図

**出土遺物** 遺物は墳丘西側及び南側裾部、区画溝を中心に出土した。一部を第84図に示した。176・177は南側区画溝、178・179は西側区画溝の埋土中、180は墳頂部を覆う黒褐色土中、181は西側張り出し部周辺から出土した。絵画土器182は西側から南側裾部にかけて出土した5点の破片が接合した。接合関係が明らかでないため提示していないが、このほか線刻を施した破片が2点出土している。176は口縁部外面に凹線文を巡らせた広口壺。177～179は口縁部外面に凹線文を巡らせた甕。177は凹線文の上にキザミを施し、頸部に貼付突帯が巡る。180は脚部の外面に凹線文、鋸歯文が施される。181は口縁部を内側に肥厚させ、体部外面に沈線と2条1単位の波状文を施した脚付きの鉢と思われる。182は線刻絵画が施された壺の頸部。左下部の線刻は2本の角、脚部の表現からシカと想定される。中央下部に1本、右上部にも4本の線刻が認められるが、それぞれ意匠は不明である。線刻絵画はハケ調整の後に刻まれ、一部ナデを施した箇所も認められる。出土土器の特徴から、墳丘墓は弥生時代中期後葉(Ⅳ-2からⅣ-3)の所産と考えている。(大川)





第84図 墳丘墓・SK116出土遺物

SK116（第83図、PL.25） 墳丘墓の東側裾部に接し、長軸が墳丘墓の主軸と平行すること、出土土器が墳丘墓と同時期に比定されること等から、墳丘墓との関連性が高いと考えられる。平面形は長軸3.55m、短軸3.15mの不整形を呈し、深さは最大22cmを測る。底面でピット8基、壁溝を検出した。遺物は埋土上部から底面直上にかけて出土し、平面分布は南東に偏る。出土土器の一部を第84図に示した。いずれも床面直上から出土した。183は口縁部内面に凹線文を巡らせた広口壺。184・185は口縁部外面に凹線文を巡らせた甕。185は体部内面下半にヘラケズリが認められる。出土土器の特徴から本遺構の時期は弥生時代中期後葉(IV-2からIV-3)である。(大川)

おわりに 梅田萱峯墳丘墓は、四隅や貼石の形態から、方形貼石墓と考えられ、県内では中期後葉に遡る最古の墳丘墓と考えられる。また墓壙を取り囲む4基の柱穴の検出は、類例として鳥根県出雲市西谷3号墓や福岡県前原市平原1号墓等が知られるが、当該例はその最古の事例に位置付けられる。

このように今回の墳丘墓の調査は、埋葬から墳丘築造を経て墓上祭祀にいたる一連の行為の流れを層位学的に明らかとしたほか、後期に出現する王墓に採用された墓上祭祀の系譜を考える上でも、極めて重要な知見をもたらしたといえる。

以上、概要を述べた墳丘墓及び関連性が窺われるSK116は、今後の調査によって記載内容に変更が生じる可能性があることをお断りしておきたい。今後本報告にて詳細な調査成果の報告と、検討を行いたい。(小山)

(註) 貼石の石材鑑定を鳥取大学名誉教授赤木三郎氏にお願いした。

### 第3節 古墳時代の遺構・遺物

#### (1) 概要

これまでの梅田萱峯遺跡の調査で検出されていなかった、古墳時代の遺構を確認した。

前期中葉の竪穴住居跡1棟、中期前葉から中葉の竪穴住居跡4棟を検出した。前期中葉のものは、西尾根北側の、弥生時代住居跡の密集部に築かれているが、中期前葉のものは同じ西尾根でも南側の平坦部にのみ認められ、弥生時代の遺構が配置された空間とは基本的に重複しない。(湯村)

#### (2) 竪穴住居跡

SI16 (第85～88図、PL.26・27・56～58・64・67・68・70)

L28からM28グリッド、調査区西際の北西に向かって下がる標高63.5～64mの斜面地に位置し、一部は調査区外にかかる。8m東にSI34、20m南東にSI39がある。

本遺構は、調査前の踏査で既に窪地として確認していたことから、竪穴住居跡と考え調査を開始した。表土以下、全てを人力で掘り下げることとし、古墳時代以降の遺物包含層を除去したところ、円形状の黒色土の広がり、その北側に土手状の高まりを検出したため、住居に伴って周堤が遺存している可能性を想定し調査を進めた。

本住居の全体形は不明だが、平面は長方形に復元できる。長軸8.4m、短軸7.1m、床面の面積は53.9㎡と推定される。深さは最大90cmである。

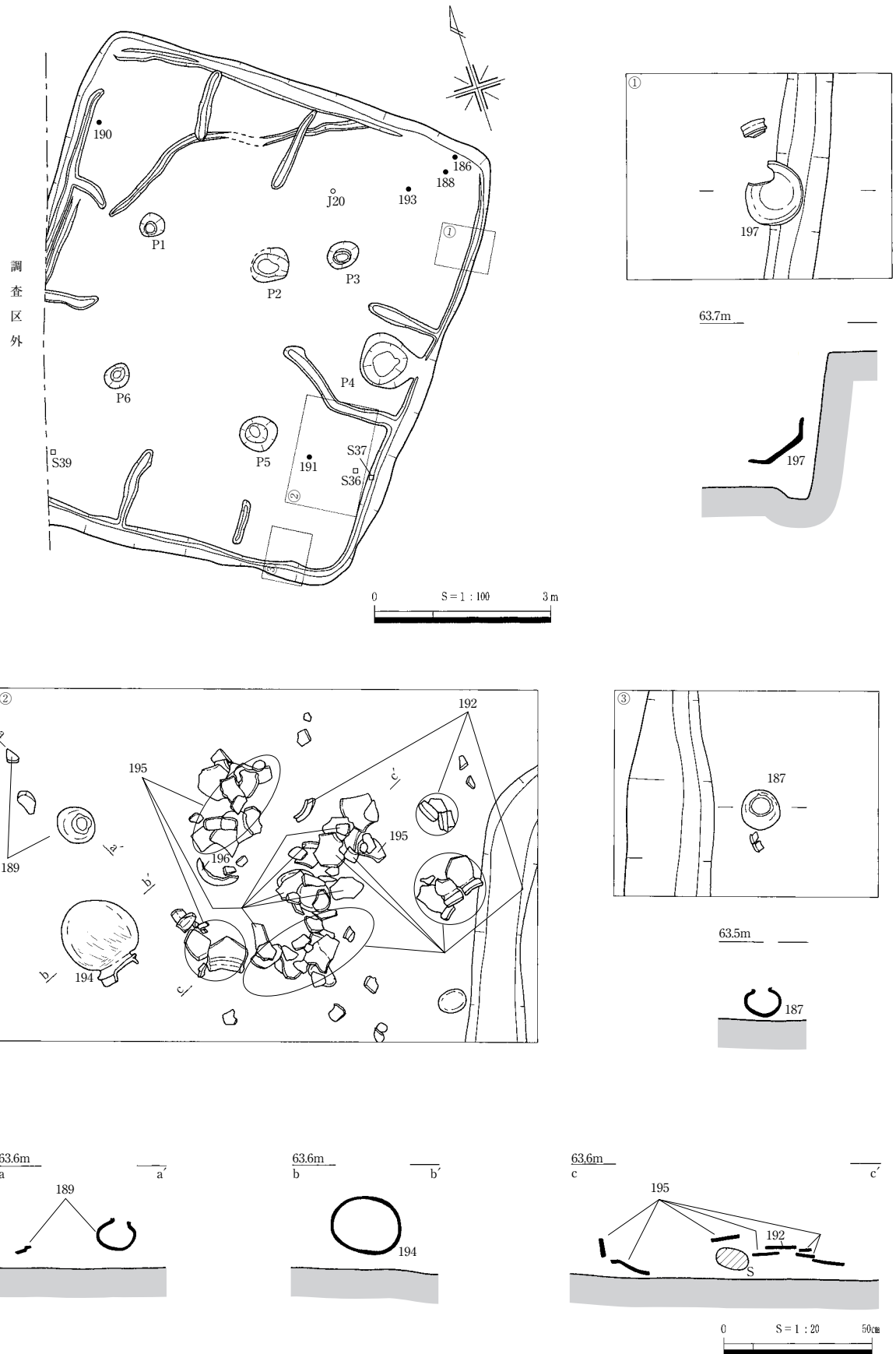
床面から、壁溝3条、床溝8条、ピット6基を検出した。被熱面や貼床は認められない。

壁溝の検出状況から、床面の拡張が想定される。拡張前の壁溝は、住居北西部にのみ残る。平面形が弧状を呈するものと、南北方向に直線的に伸びるものの2条があり、両者の前後関係は不明である。拡張後の壁溝は、壁際をほぼ全周している。幅は約12cm、断面は逆台形状で、床面からの深さは約8cmを測る。

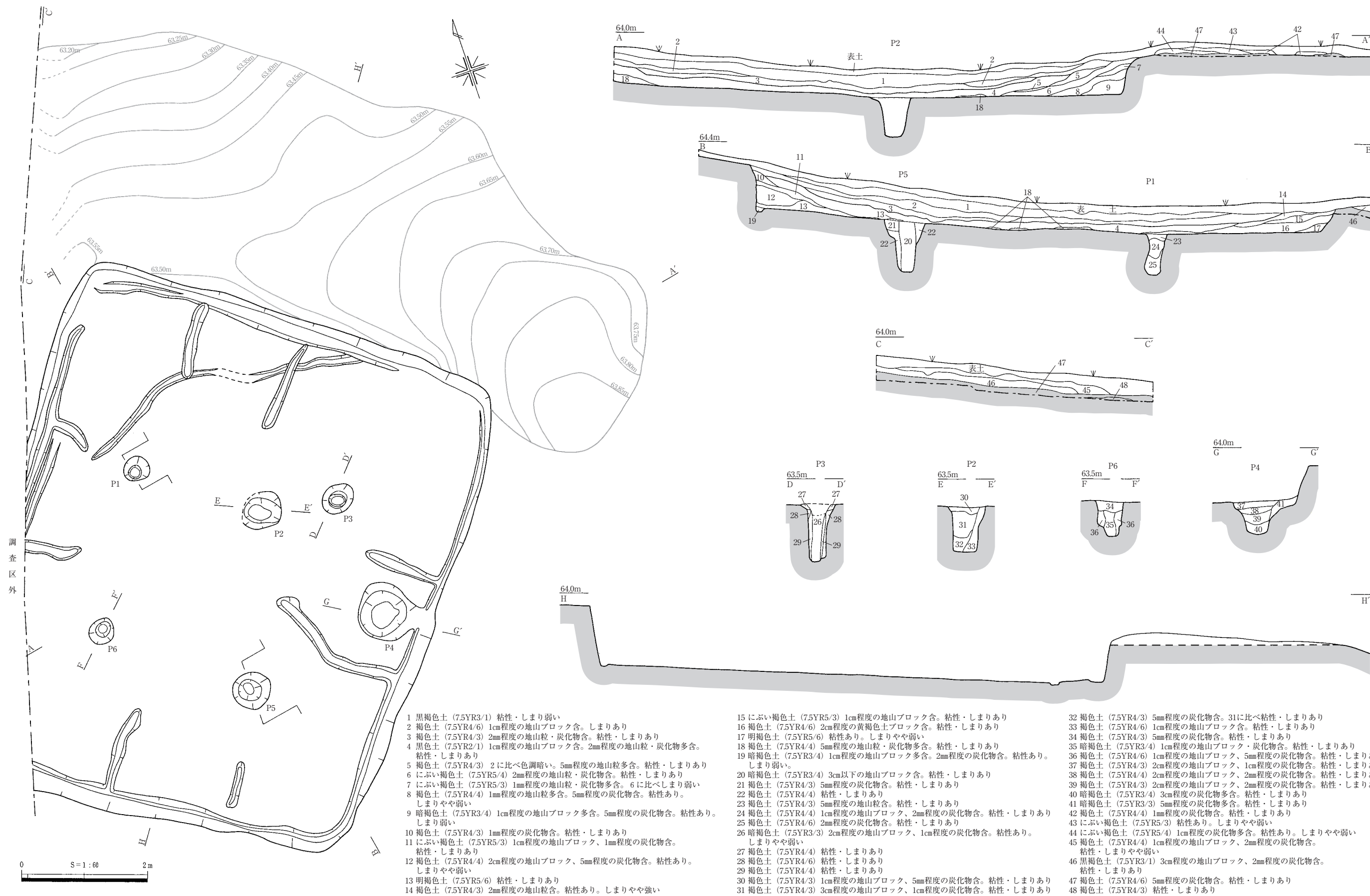
主柱穴は、配置からP1、P3、P5、P6と考える。柱は各壁隅から2.6～3.2m内側に位置し、主柱間距離は、P1-P3間から時計回りに3.3m、3.3m、2.5m、2.5mである。主柱穴の深さは約60～90cmを測り、同時期の他の住居跡に比べ深い(表15)。柱痕跡から推定される柱の直径は14～22cmである。P2は柱痕跡をもち、P3の位置と近接する点から、主柱の建て替えも想定されるが、両者の前後関係は明確でない。東壁際には、2条の床溝に囲まれた特殊ピットP4がある。P4の規模は長軸90cm、短軸80cm、深さ50cm、平面は円形、断面は逆台形状である。P4最下層(40層)は3cm程度の炭化物を多量に含み、住居埋土最下層とは異なることから、廃絶時に既に堆積していた可能性がある。

P4に伴う床溝は、東壁から住居中央に向かって平行にのびる。溝は、幅15cm前後、床面からの深さ約5cmで、長さは北側が1.2m、南側が2.2mを測る。南側の溝は、東壁から約1mの地点で北西方向にやや向きをかえ「く」字状を呈す。東壁の溝に対応するように、他の3方の壁からも、壁中央あたりから住居の中心に向かって2条一組の溝が延びている。

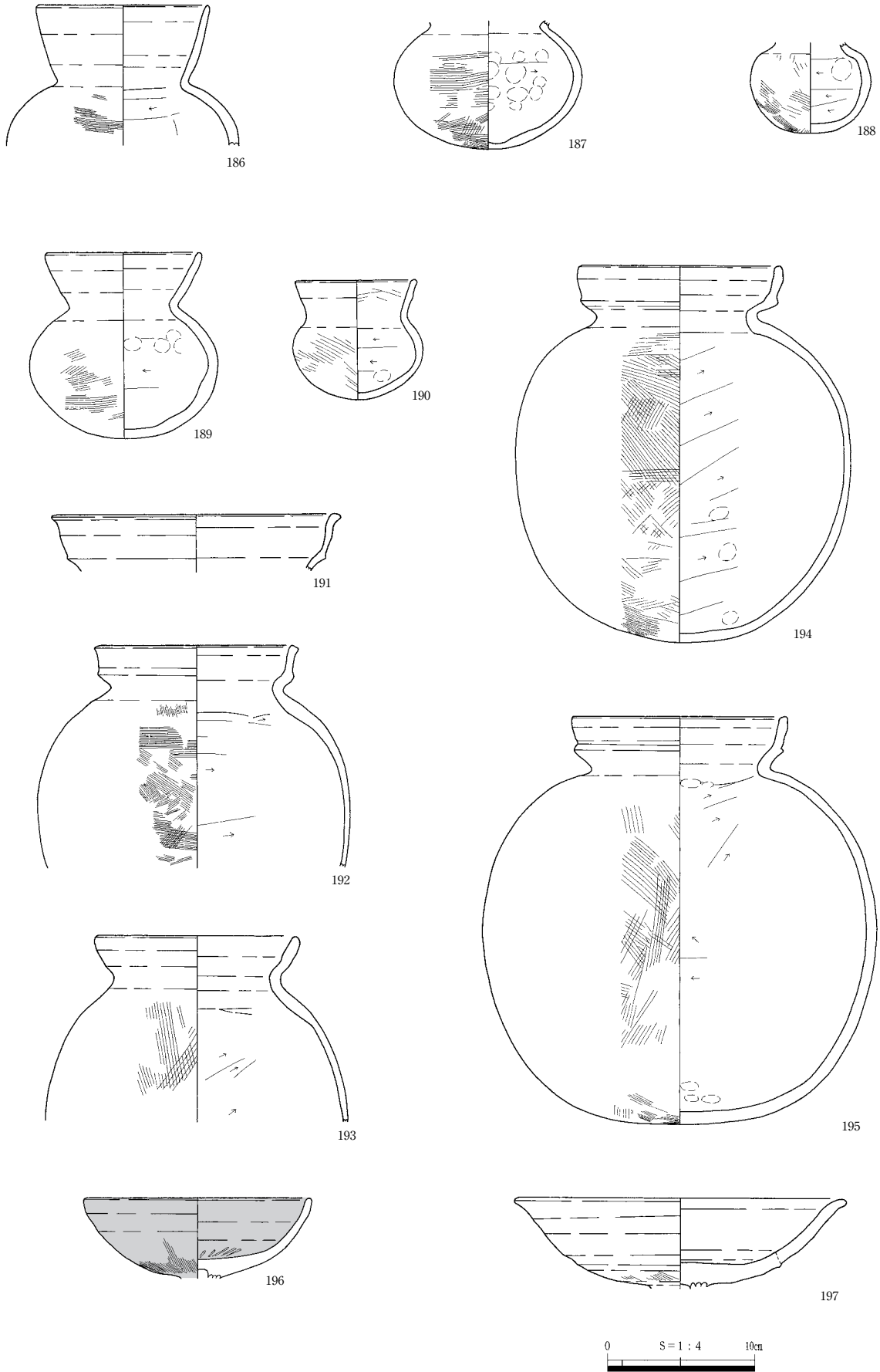
土手状の高まりは、標高の低い側にあたる、住居北西から北東にかけて弧状に認められ、未調査地にも続いている。そのうち、今回の調査で検出した範囲は、南北方向で最大3.7m、東西約10mで、住居の壁際から1.5～2m外側で高まりが最も盛り上がる。土層図より復元される地山面(47層上面)からの高さは、残りのよい北側で最大20cm、北東側で10cmと推測される。この土手を構成する土(42～



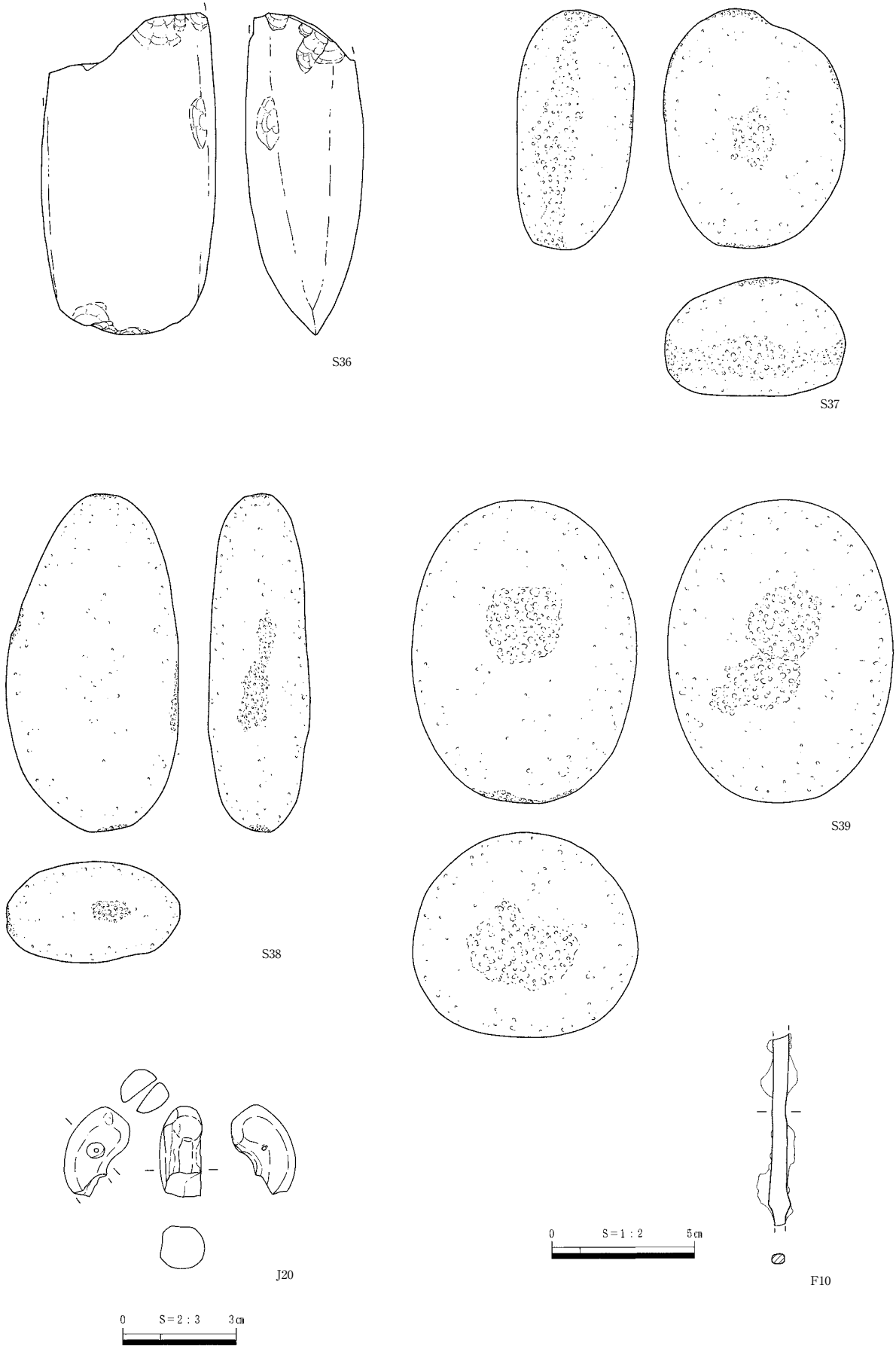
第85図 SI16(1)



第86図 SI16(2)



第87図 SI16出土遺物(1)



第88図 SI16出土遺物(2)



46層)は、小片のため図化はしていないが、弥生土器片や石器を含んでいる。42～45層は土質が類似する土で、遺物は含んでいないが、住居内壁際に堆積する褐色土層によく似る。46層(黒褐色土)は北西側のみ確認できる堆積で旧表土の可能性もある。

土手状の高まりは、本来の形状が不明で、斜面地という立地からも局地的な堆積による自然地形である可能性を否定できないが、幅がほぼ一定で北壁に沿うように弧状に巡る点や住居内壁際に同質の土が流れ込むように堆積している様相などから、周堤として機能していたものとする。

住居の埋土は、大きく4層に大別される。壁際に堆積する最下層(褐色土層)の上には、黒色土層(4層)が、全体に薄く広がるように堆積している。褐色土表面が腐植化したものと推測され、中層(2、3層)の堆積が開始されるまで、長期間土の流入が途絶えていた可能性がある。中層以上からは、図化していないが、奈良期のものと推測される須恵器や鉄滓が出土している。後述のとおり、SI16以南では、奈良時代(8世紀後半)の鍛冶関連遺構が検出されていることから、この時期に再びSI16周辺の土地が利用され、これらの遺物が窪地化したSI16に廃棄されたか、或いは自然に流れ込んだものと推測される。その後は、遺構の規模が大きいためか完全には埋まりきらずに窪地のまま残り、最終的には再び黒褐色土(1層)で覆われている。

掲載遺物のうち、床面出土は甕の口縁部191、布留系甕193、石斧S36、敲石S39、瑪瑙製勾玉J20である。その他の遺物も床面付近出土である。186は直口壺。187～190は小型丸底壺。191～195は甕。196～197は高坏である。その他、S37・38は敲石で、S38はP4からの出土である。F10は長頸鏃か。

遺物の特徴から、本遺構の廃絶時期は古墳時代中期中葉(天神川VI期)以前と考える。(長尾)

#### SI19 (第89～91図、PL.28・58・59・65・66)

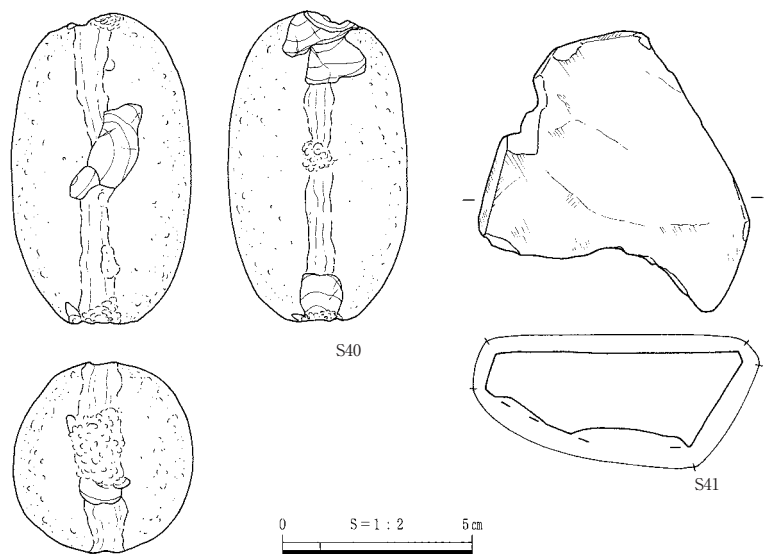
I27からI28グリッド、谷部西側にあたる標高62～62.5mの緩斜面に位置する。周囲に同時期の遺構はなく、36m北に離れてSI24、28m南西にはSI16がある。

谷部土層断面の検討から、本遺構は基本層序4層上面から掘り込まれていたことが明らかになっている(第1節参照)。床面は基本層序11層に達する。

北壁の上面はSD1に切られているため不明だが、全体形は方形に復元できる。長軸4.5m、短軸4.4m、床面積は15.1㎡で、深さは最大68cmを測る。

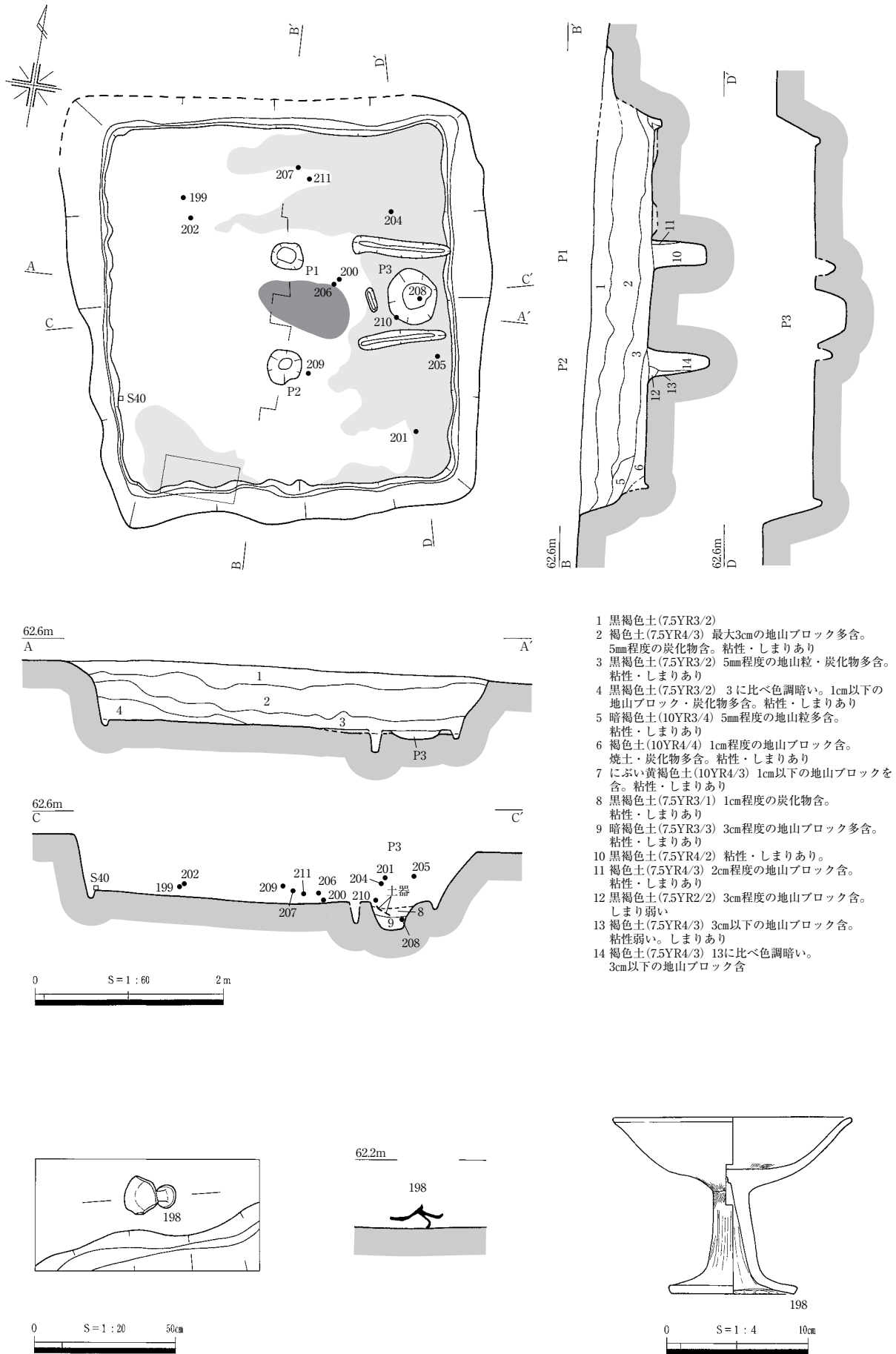
床面から、壁溝1条、床溝3条、ピット3基を検出した。被熱面は認められない。住居東側および南西側の一部には、地山ブロックを多く含む黄褐色土の貼床が施されている。

壁溝は壁際を全周する。幅約8cm、断面は逆台形状で、床面からの深さは8cmである。支柱穴はP1、P2で、柱間距離は1.2mを測る。柱痕跡から推定される柱の直径は18～20cmである。東壁際には、3条の床溝に囲

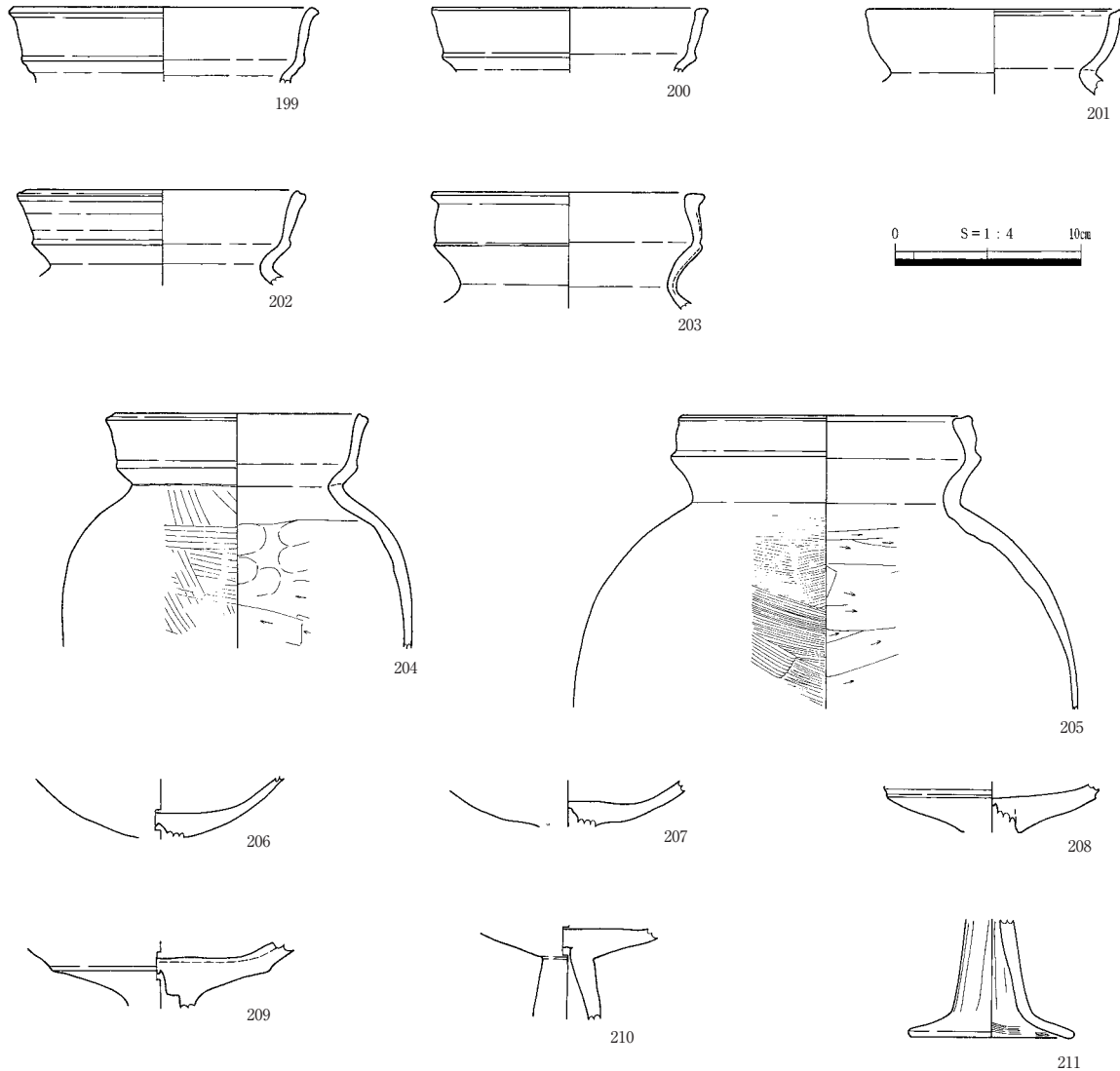


第89図 SI19出土遺物(1)





第90図 SI19および出土遺物(2)



第91図 SI19出土遺物(3)

まれた特殊ピットP3がある。P3の規模は長軸60cm、短軸55cm、深さ25cm、平面は歪な円形で、断面は逆台形状である。埋土中には炭化物や土器片が認められる。

P3を囲む床溝は、貼床除去中に確認したために本来の平面形は不明である。断面形は底の幅が狭い逆台形である。P3を挟んで東西方向に平行して延びる2条の溝は、幅12~18cm、床面からの深さ約8~12cm、長さ90cmを測る。南北方向に延びる溝の規模は、幅8cm、床面からの深さ12cm、長さ24cmである。床面には、住居中央に炭化物層が広がっていたが、被熱の痕跡は認められなかった。

埋土は、大きく3層に分かれ、最終的には自然堆積によって埋没したものとする。ただし、南西壁際から床面に流れ込むように堆積する6層には、多量の焼土、炭化物や土器小片が含まれ、破損した高坏198がやや浮いた状態で出土している。これらの状況から、6層は住居廃絶後に人為的に廃棄された可能性がある。

図化した遺物のうち、床面出土は高坏210で、その他は埋土中出土である。199~204は複合口縁をもつ甕。201は布留系甕である。205は甕で、口縁部がやや内傾する。206~211は高坏である。その他、石器も図化している。S40は床面からの出土で、1条の溝をもつ石錘。S41は砥石である。

遺物の特徴から、本遺構の廃絶時期は古墳時代中期前葉から中葉(天神川V~VI期)と考える。(長尾)

SI24 (第92・93図、PL.29・59・60・61・64・65・70)

J23からJ24グリッド、西尾根から東に向かって下がる標高61.5mの斜面地に位置する。弥生時代の住居跡が密集する西尾根北側部分にあり、周囲に同時期の遺構は認められない。36m南東に離れてSI19がある。また弥生時代のSI29及びSK115を切っている。

平面は方形を呈し、長軸4.2m、短軸約3.9mを測る。床面積は12.7㎡、深さは最大80cmである。

床面では、壁溝1条、ピット5基を検出した。被熱面、貼床は認められない。南西側及び北側の一部では、SI29埋土を床面とする。

壁溝は住居壁際を全周する。幅6～14cm、断面は逆台形、床面からの深さ約8～12cmである。支柱穴はP1～P4で、柱配置から中央ピットP5を囲む4本柱の建物である。柱の位置は壁際から56～76cm内側に位置し、支柱間距離は、P1-P2間から時計回りに2.5m、2.1m、2.1m、2mである。柱痕跡から推定される柱の直径は10～12cmである。中央ピットP5の規模は長軸1.1m、短軸84cm、深さ50cm、平面は歪な楕円形で、断面は逆台形状である。内部は2段掘りになっている。P5の34、35層は、炭化物と土器片を多く含んでいる。色調が住居最下層と異なることから、廃絶時には既に堆積していた可能性がある。

埋土は、大きく褐色土、黄褐色土、暗褐色土に大別できる。そのうち、褐色土7、10、11層は、床や壁面を構成する土によく似ており、住居内全体に広がる。遺物を含まずしまりの強い土質であることから、建物の構造材を撤去した後、人為的に埋め戻したものと推測するが、この埋め戻し土の由来については明らかにすることができていない。7層以後は、壁側から住居中央に向かって堆積が進んでおり、最終的には自然堆積によって埋没したと考える。

遺物は、床面から低脚坏219及び台石S44が出土した。その他の遺物は、埋土中からの検出である。212、213は小型丸底壺、214～218は甕、220は低脚坏である。212は短い複合口縁をもつ。218は布留系甕である。その他、石器、鉄器が出土した。石器S42、S43は敲石。鉄器F11は棒状鉄器で、木質が付着している。

遺物の特徴から、本遺構の廃絶時期は古墳時代前期中葉(天神川Ⅲ期)と考える。(長尾)

SI34 (第95図、PL.30・60・61・69)

K29からL29グリッド、西尾根から南側平坦部の標高64m付近に位置する。8m西にSI16、12m南にはSI39がある。

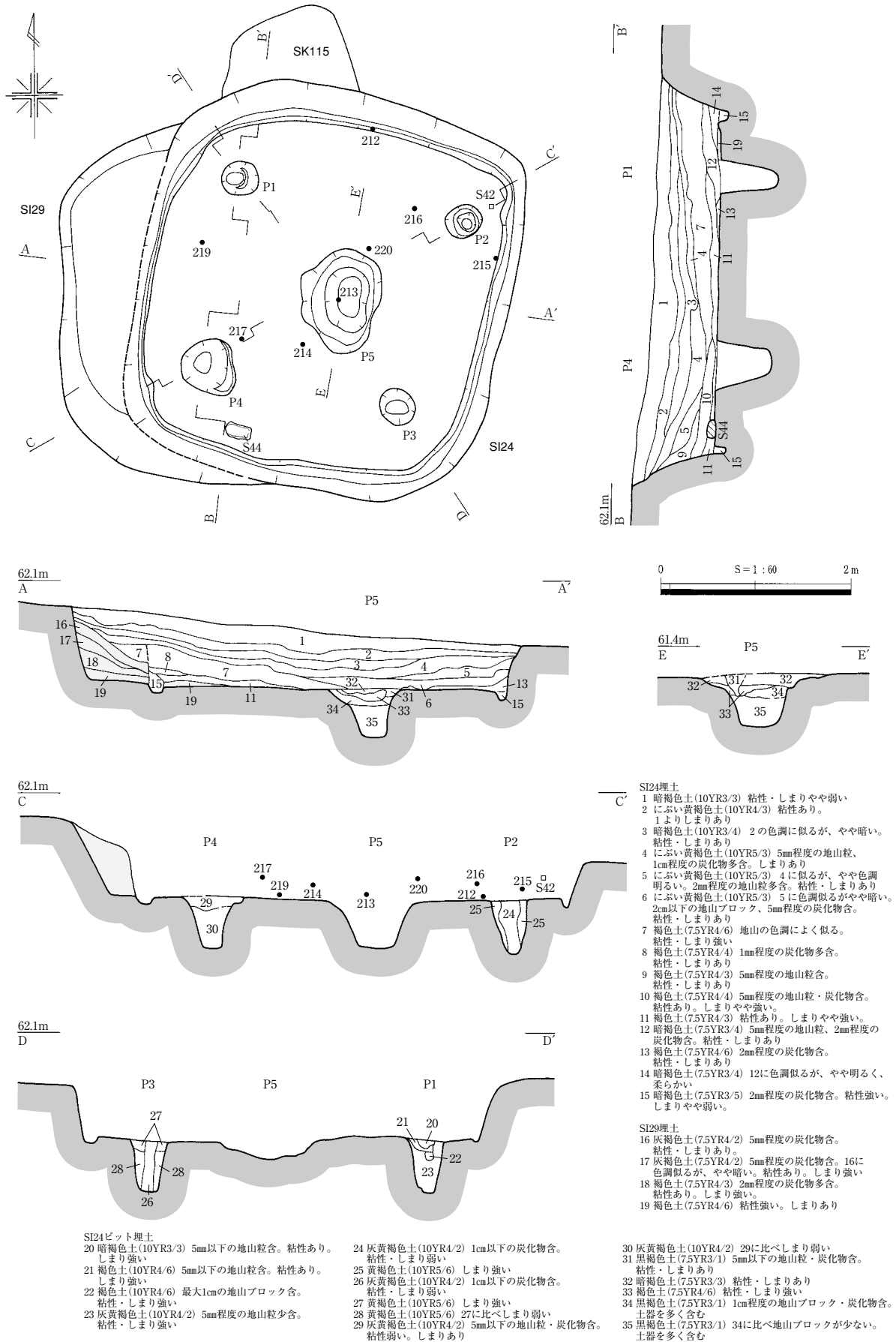
平面は長方形を呈し、長軸4.4m、短軸3.7m、床面積は14.9㎡を測る。深さは最大60cmである。

床面では、壁溝1条、ピット6基を検出した。被熱面、貼床は認められない。

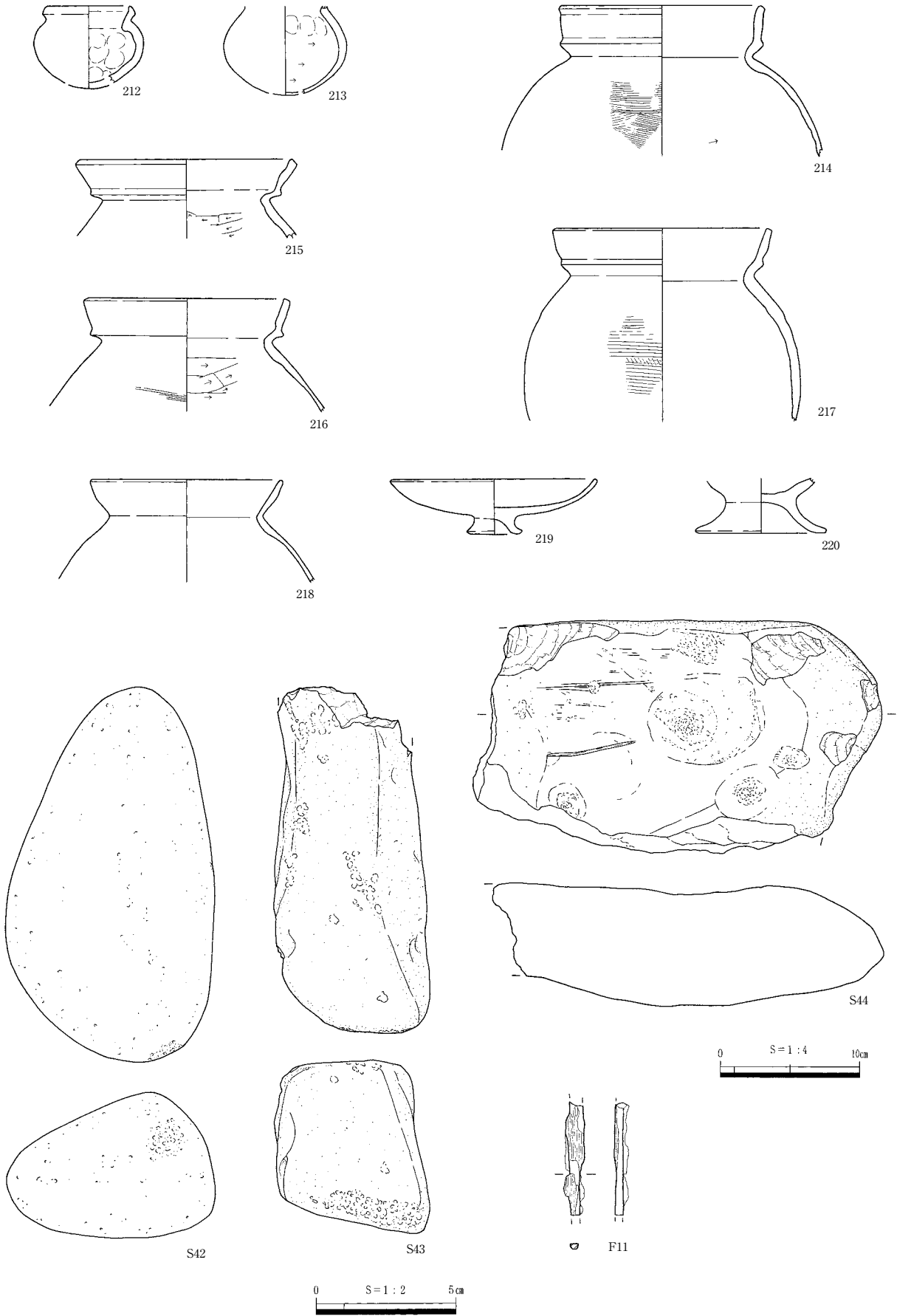
壁溝は壁際を全周する。幅約8～14cm、断面はU字状で、床面からの深さは4cmである。支柱穴はP1、P2で、柱間距離は1.3mを測る。中央ピットP3の規模は径56cm、深さ12cm、平面は歪な円形で、断面はU字状である。埋土中には炭化物や焼土粒が多く認められる。北壁際に検出したP4は、溝を伴わないものの、配置から特殊ピットと考える。規模は長軸62cm、短軸54cm、深さ20cm、平面はやや東側に突出する歪な円形で、断面はU字状である。一部が壁溝と接している。埋土中からは、多量の炭化物や焼土粒を伴って、高坏脚部228が出土した。その他のピットについては性格不明である。

埋土は、3層に大別でき、自然堆積によって埋没したものと考える。

図化した土器のうち、228はP4埋土出土の高坏。223～227は底面付近からの出土である。223は小



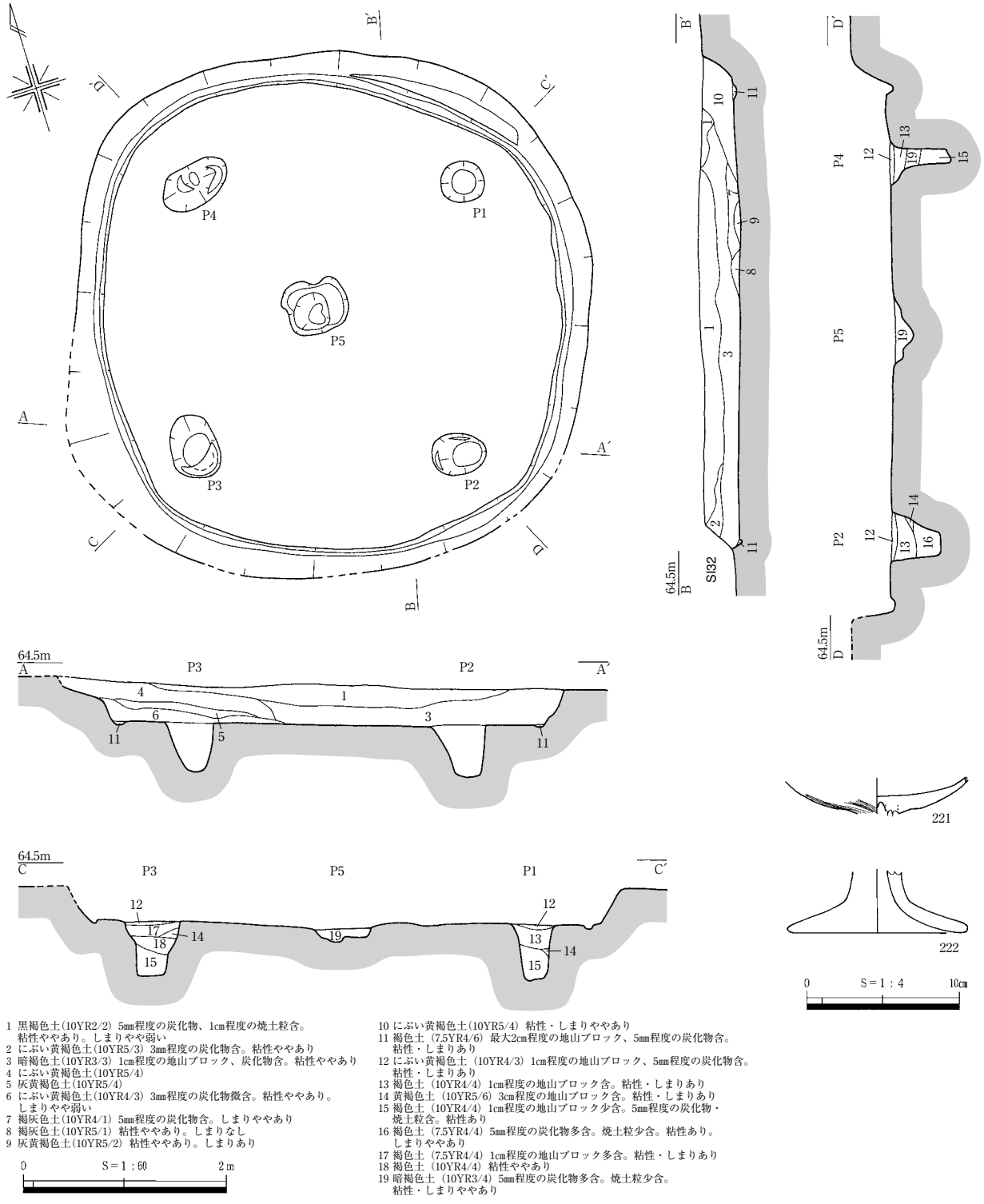
第92図 SI24・29



第93図 SI24出土遺物

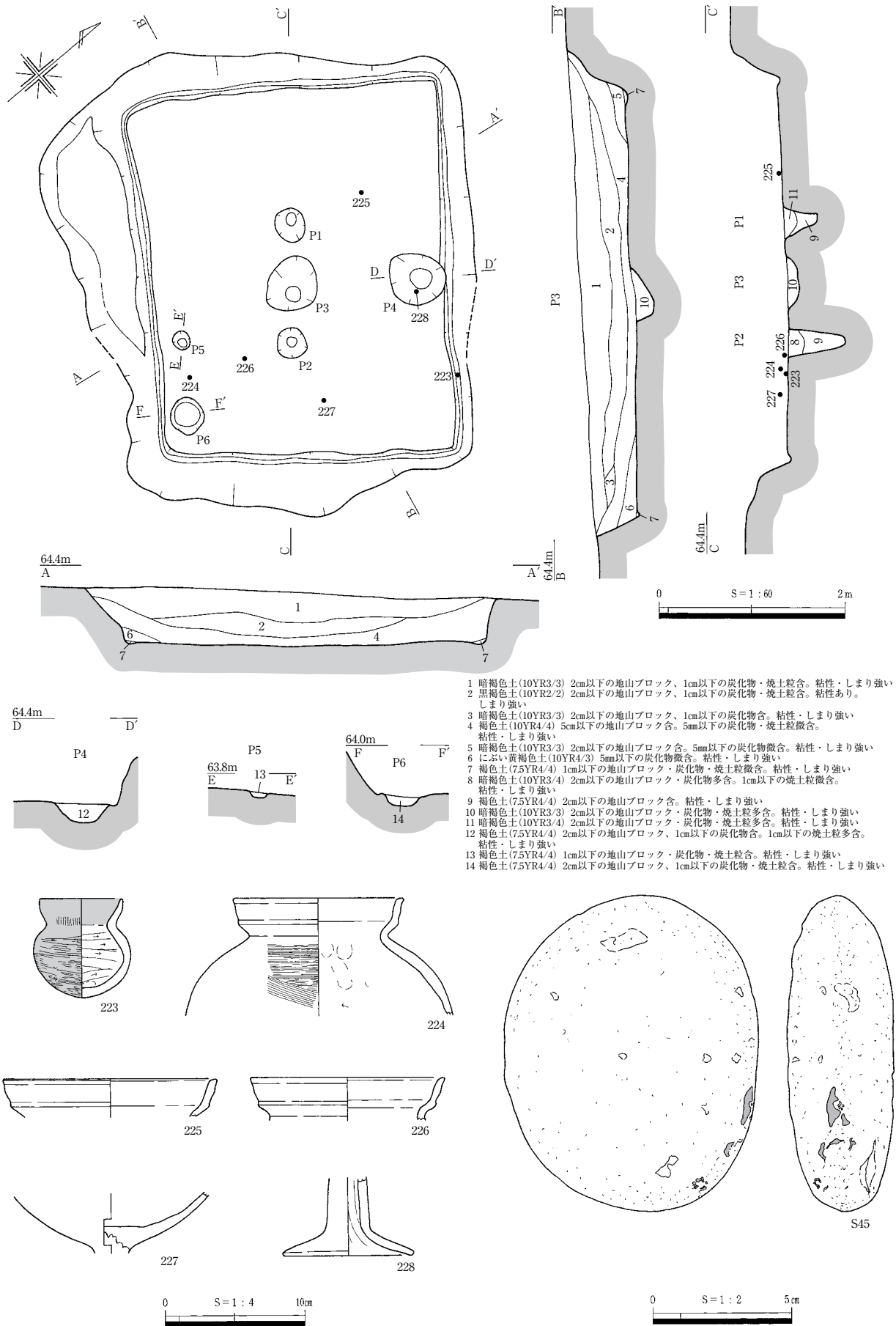
型丸底壺。口縁部は短く、内外面に赤彩がみられる。224~226は甕である。その他、1層から鉄滓付着礫S45が出土している。後述のとおり、SI34南側では奈良時代(8世紀後半)の鍛冶関連遺構が検出されていることから、S45も鍛冶に関わる遺物で、SI34が埋没しきらずに窪地となっていたところに廃棄された可能性がある。

遺物の特徴から、本遺構の廃絶時期は古墳時代中期前葉(天神川V期)以前と考える。(長尾)



第94図 SI39および出土遺物





第95図 SI34および出土遺物

SI39 (第94図、PL.31・60・61)

L31グリッド、西側尾根から南側平坦部の、標高64.2m付近に位置する。12m北にSI34がある。奈良時代(8世紀後半)のSI32に切られ、南西壁を失っている。平面は長軸5.2m、短軸5.1mの隅丸方形で、床面の面積は19.3㎡、深さは最大40cmである。

床面では、壁溝1条、ピット5基を検出した。被熱面、貼床は認められない。

壁溝は住居壁際を全周する。幅8~12cm、断面は逆台形、床面からの深さ約4~6cmである。主柱穴はP1~P4で、柱配置から中央ピットP5を囲む4本柱の建物である。柱の位置は壁際から約60cm内側に位置し、柱間距離は全て2.7mを測る。中央ピットP5の規模は長軸64cm、短軸60cm、深さ12cm、平面は歪な隅丸方形で、内部は2段掘りになっている。

埋土は、黄褐色土が壁際から床面上に流れ込むように堆積した後、黒褐色土、暗褐色土の順に水平に堆積している。自然堆積による埋没と考える。図化した遺物は、埋土中出土の高坏221、222である。遺物の特徴から、本遺構の廃絶時期は古墳時代中期前葉から中葉(天神川VからVI期)と推測する。

(長尾)

第4節 奈良時代の遺構・遺物

(1) 概要

梅田萱峯遺跡では、これまで奈良時代に関しては1区で土器埋設ピットや土器溜りといった生活痕跡を認めていたのみであったが、今回、西尾根南側平坦部において竪穴住居跡2棟、鍛冶関連遺構を確認した。鍛冶関連遺構は工房と思われる建物跡2棟と廃棄土坑ほかである。

(湯村)

(2) 竪穴住居跡

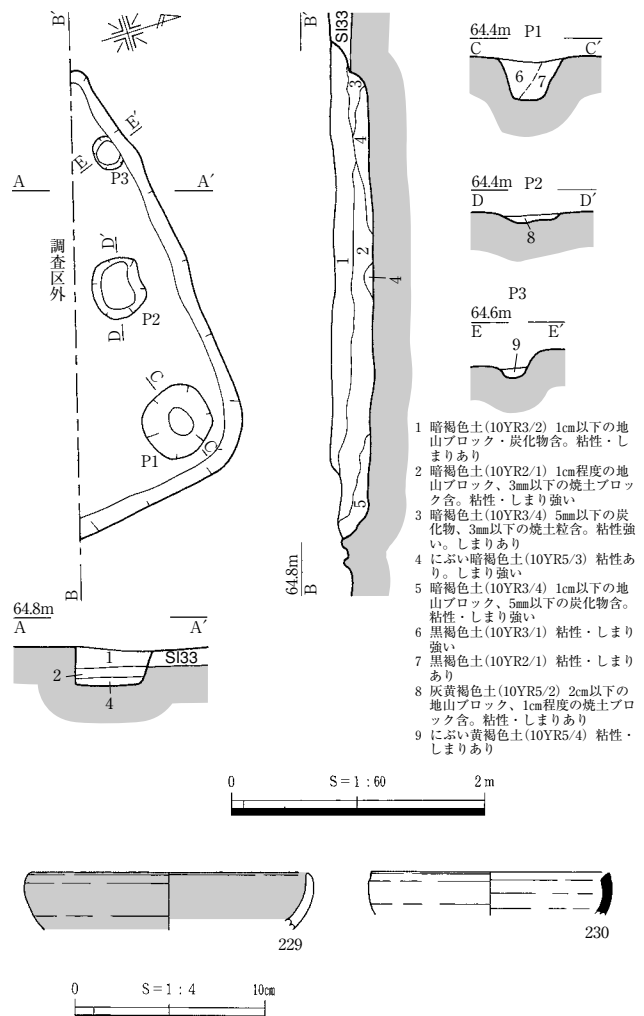
SI30 (第96図、PL.31・61)

M32グリッド、標高64.6mの西尾根平坦部に位置し、弥生時代の竪穴住居跡SI33を切る。

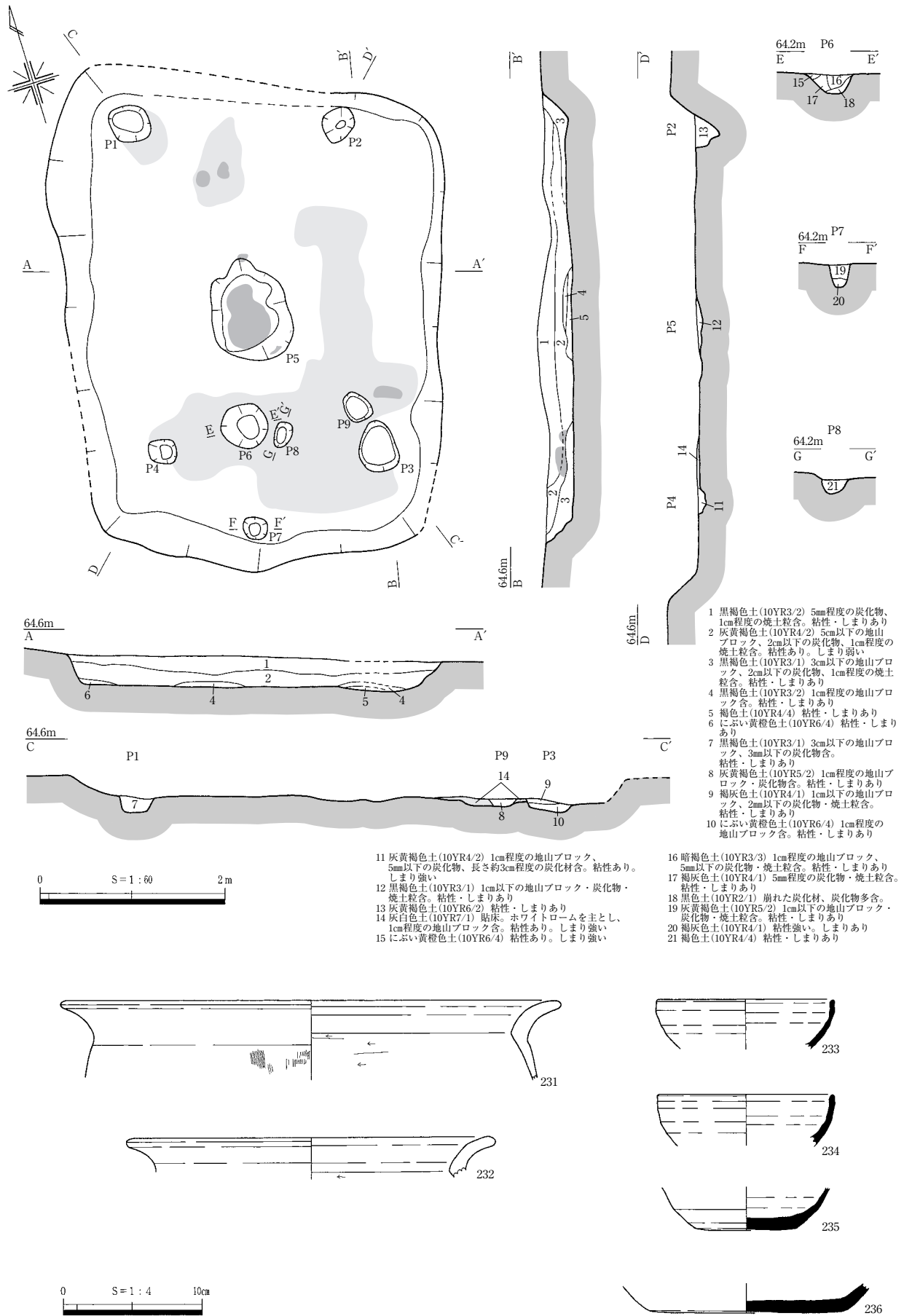
調査区外へとつづくため、今回の調査では遺構全体の北側1/5程度を調査したにすぎない。

検出した範囲では、東西3.5m、深さ30cmを測る。P1は主柱穴のひとつと考えられるもので、径54cm、深さ30cmを測る。埋土は壁際から中央に向けて堆積しており、住居廃絶後の自然堆積と考えられる。

埋土中からの遺物は少なく、図化できたものは2層出土の2点である。229は赤彩された土



第96図 SI30および出土遺物



第97図 SI32および出土遺物

師器坏口縁部の破片である。230は須恵器坏口縁部の破片である。以上の遺物から、本遺構の時期は奈良時代(8世紀後半)と思われる。(岩垣)

SI32 (第97図、PL.32・61)

西尾根南側、L31グリッドに位置する。標高64.2m付近の平坦地にあたる。古墳時代のSI39の南壁を切る。

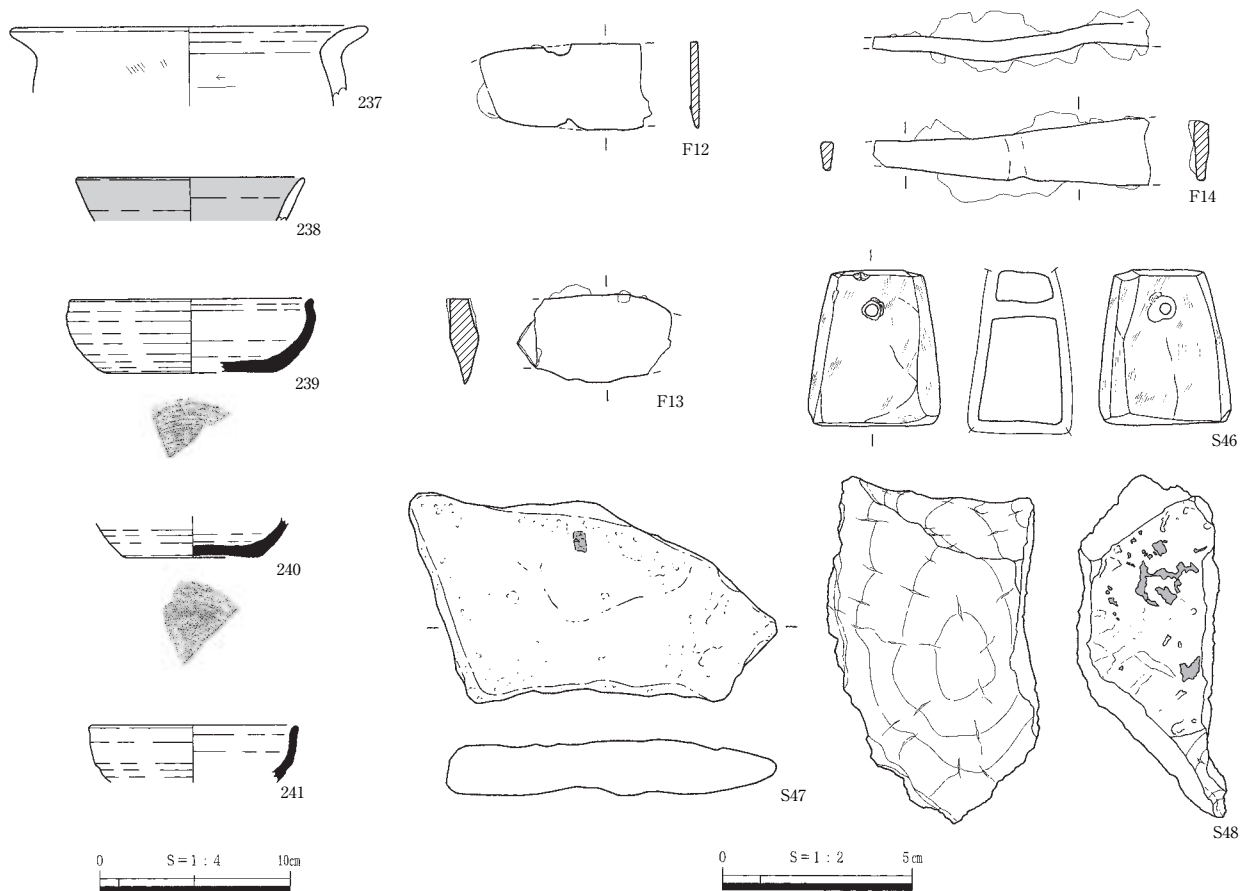
長軸5.4m、短軸4.3mの方形を呈し、深さは30cmを測る。床面積は18.2㎡である。

主柱穴はP1～P4の4本柱で、いずれも浅く、柱痕跡を残すものはない。主柱間距離はP1-P2間から時計回りに2.3m、3.6m、2.3m、3.6mである。このほか住居の中心に長軸1.14m、短軸84cm、深さ7cmを測る皿状のP5があり、南側には主柱穴と同じような規模のピットが4基認められる。また南側を中心とした床面には貼床が見られ、P5を中心に被熱面も存在する。

埋土は大きく3層に分けられる。壁際から埋没し、その後全体を埋めている。埋土中からは焼土や炭化材が出土しており、SI32は焼失住居と思われる。

231、232は土師器甕。外反する単純口縁をもつ。232は床面付近の出土。233～235は須恵器坏、236は須恵器皿。231・233を除き埋土下層から出土した。

出土遺物の特徴は高広ⅣA期を示し、SI32は奈良時代(8世紀後半)に位置づけられる。(湯村)



第98図 SK107出土遺物

### (3) 鍛冶関連遺構

**遺構の概要** 鍛冶関連遺構は西尾根南側、標高64m前後の平坦部に位置する。最も谷寄りに鍛冶炉を伴うSB3があり、南側調査区境に接して被熱面を有するSB4がある。SB4の北側10mには廃棄土坑SK107があり、これらの周辺には鉄滓を伴うSK75、SK141が点在する。また鍛冶関連遺構の東側は浅い谷頭となっているが、ここの遺物包含層を掘り下げた際、鉄滓が多く出土した。以上のことから、工房としての建物群と廃棄土坑が設けられており、近接する谷も廃滓場となっていた様子が窺える。

今回は微細遺物を含む鍛冶関連遺物の選別や分類ができていない。また鍛冶関連遺構の存在する付近は今回の調査区際近く、今後近接地の調査が行われ、さらに詳細な検討を加えることによって、当時の鉄器生産像が明らかになろう。(湯村)

#### SB3 (第99～101・104図、PL.33・61・69)

K31グリッドに位置する。桁行3間、梁行2間の建物で、主軸をN-4°-Wにとり、ほぼ南北軸となる。平面積は19.2㎡を測る。

柱穴はP1～P10までで、柱間距離はP1-P2間から順に1.6m、1.75m、1.8m、1.45m、1.85m、1.2m、2.55m、1.7m、1.5m、1.75mである。このうちP9からはガラス質滓が付着した羽口の破片242が出土している。

建物北半に鍛冶炉が2基検出され、北から鍛冶炉1、鍛冶炉2とした。

鍛冶炉1は長軸40cm、短軸35cm、深さ7cmの不整形円形で、浅い皿状の掘り込みとして検出した。全体的に炭化物が固着した状況であったが、2層とした部分はとくに顕著であった。炉底部は全面被熱痕跡を残していた。

鍛冶炉2は長軸50cm、短軸35cm、深さ10cmの不整形な掘り込みである。5層は鍛冶炉1の2層と同じく炭化物が著しく固着したもので、その上に灰色粘土(2層)が貼られていた。炉の底面を再生したものであると思われる。さらにその上には椀形鍛冶滓F15が残されていた。炉底面は被熱痕跡を有している。

建物内にはこのほかピットが6基認められる。計測値は表15に譲るが、P11を除いて埋土中から鉄滓が出土している。鍛冶工房に伴うピットとしては「足入れ穴」などがあるが、これらのピットはすべてが鍛冶炉に近接しているわけではないので、個々の性格は不明である。

SB3の時期を直接的に示すものはないが、攪乱層から須恵器坏243が出土している。鍛冶工房と廃棄土坑SK107が関連すると理解すれば、SK107出土遺物との時間的な矛盾はなく、奈良時代(8世紀後半)の遺構と位置づけたい。(湯村)

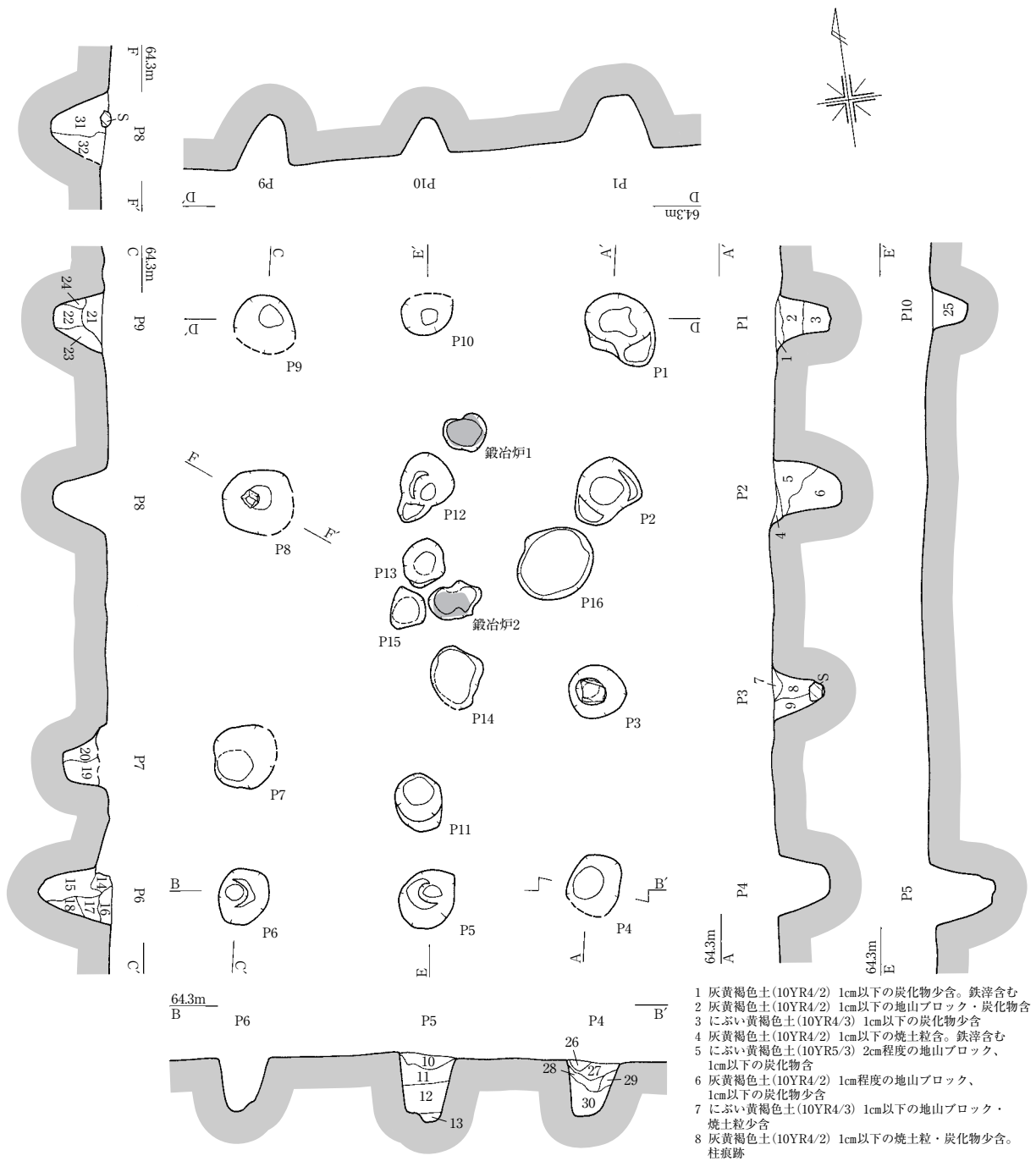
#### SB4 (第102図)

L32からM32グリッドに位置する。南側調査区境に接して検出した。桁行、梁行ともに2間の建物で、ほぼ南北軸をとる。平面積は15.5㎡を測る。

柱穴はP1～P8までで、柱間距離はP1-P2間から順に1.65m、1.95m、1.9m、2.1m、1.4m、1.95m、1.65m、2.05mである。P7で柱痕跡を確認している。

建物中央とP3-P5間に被熱面が確認された。

SB4の時期を示す遺物は出土していないが、SB3と主軸を同じにとることや、被熱面の存在から何らかの工房と考えられることから、奈良時代(8世紀後半)の鍛冶関連遺構と考えた。(湯村)



- 9 におい黄褐色土(10YR4/3) 2cm程度の地山ブロック、5mm以下の焼土粒少含
- 10 灰黄褐色土(10YR4/3) 1cm程度の地山ブロック、1cm以下の炭化物含
- 11 におい黄褐色土(10YR5/3) 2cm程度の地山ブロック含
- 12 黒褐色土(10YR3/2) 1cm程度の地山ブロック含
- 13 におい黄褐色土(10YR5/4) 1cm以下の炭化物少含
- 14 灰黄褐色土(10YR4/2) 1cm以下の炭化物少含
- 15 黒褐色土(10YR3/2) 2cm程度の地山ブロック少含。柱痕跡
- 16 におい黄褐色土(10YR4/3) 1cm以下の焼土・炭化物含
- 17 灰黄褐色土(10YR4/2) 1cm以下の焼土・炭化物少含

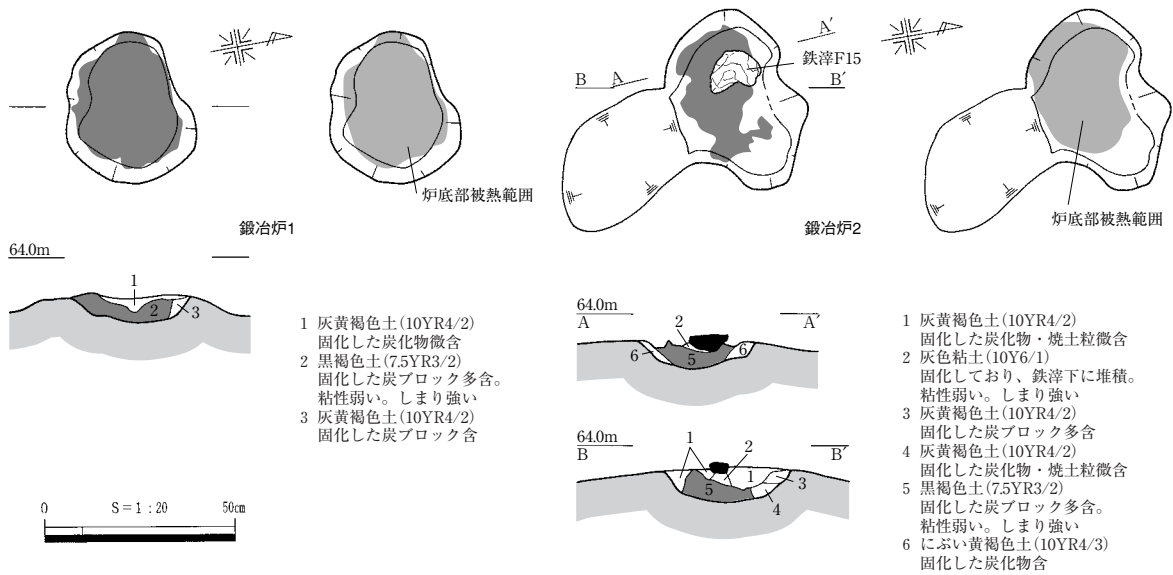
- 18 黒褐色土(10YR3/2) 2cm程度の地山ブロック含。1cm以下の炭化物少含
- 19 黒褐色土(10YR3/2) 2cm程度の地山ブロック少含。1cm以下の炭化物含。柱痕跡
- 20 灰黄褐色土(10YR4/2) 3cm程度の地山ブロック多含
- 21 褐色土(10YR4/4) 1cm以下の地山ブロック・炭化物含
- 22 灰黄褐色土(10YR4/2) 1cm以下の地山ブロック・炭化物含。柱痕跡
- 23 におい黄褐色土(10YR4/3) 2cm程度の地山ブロック多含。1cm以下の炭化物少含
- 24 におい黄褐色土(10YR4/3) 1cm程度の地山ブロック含

- 1 灰黄褐色土(10YR4/2) 1cm以下の炭化物少含。鉄滓含む
- 2 灰黄褐色土(10YR4/2) 1cm以下の地山ブロック・炭化物含
- 3 におい黄褐色土(10YR4/3) 1cm以下の炭化物少含
- 4 灰黄褐色土(10YR4/2) 1cm以下の焼土粒含。鉄滓含む
- 5 におい黄褐色土(10YR5/3) 2cm程度の地山ブロック、1cm以下の炭化物含
- 6 灰黄褐色土(10YR4/2) 1cm程度の地山ブロック、1cm以下の炭化物少含
- 7 におい黄褐色土(10YR4/3) 1cm以下の地山ブロック・焼土粒少含
- 8 灰黄褐色土(10YR4/2) 1cm以下の焼土粒・炭化物少含。柱痕跡

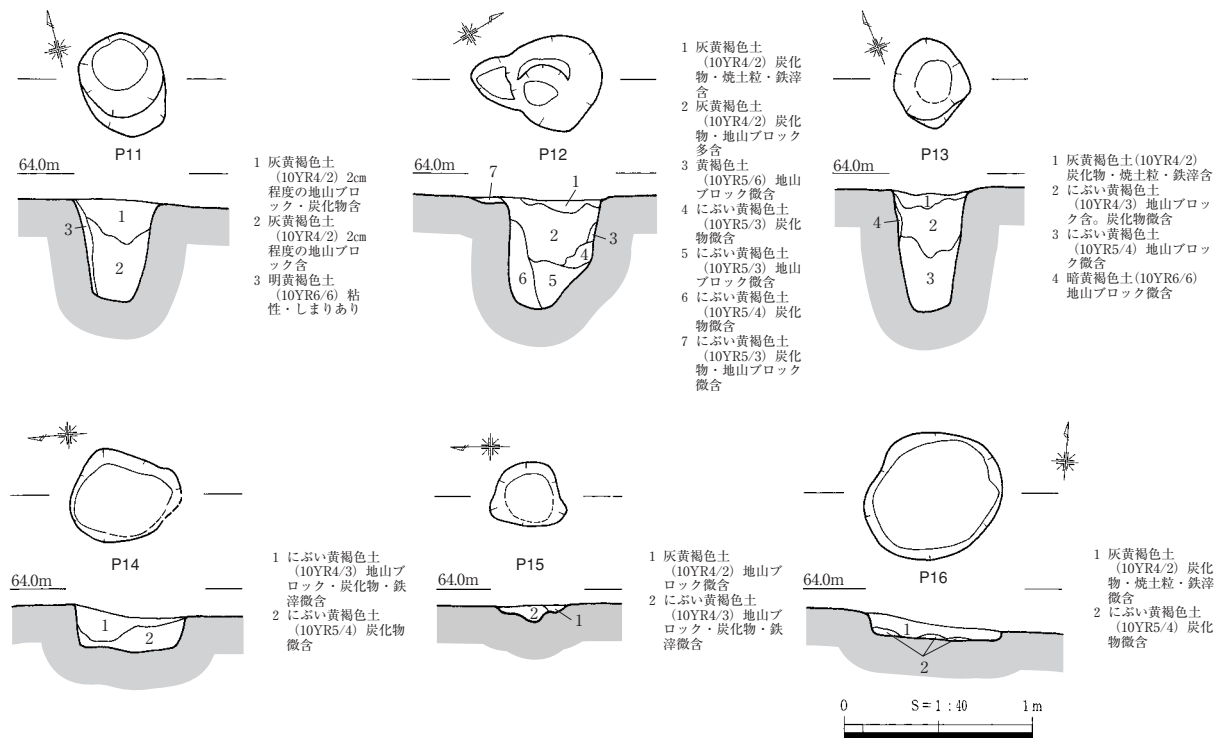
- 25 におい黄褐色土(10YR4/3) 3cm程度の地山ブロック多含。1cm以下の炭化物含
- 26 灰黄褐色土(10YR4/2) 1cm以下の炭化物少含
- 27 におい黄褐色土(10YR4/3) 2cm程度の地山ブロック含。1cm以下の炭化物少含
- 28 黒褐色土(10YR3/2) 2cm程度の地山ブロック、1cm以下の炭化物少含
- 29 におい黄褐色土(10YR6/4) 2cm程度の地山ブロック含
- 30 黒褐色土(10YR3/2) 2cm程度の地山ブロック含
- 31 灰黄褐色土(10YR4/2) 1cm以下の炭化物少含。柱痕跡
- 32 におい黄褐色土(10YR4/3) 1cm以下の炭化物含

第99図 SB3(1)





第100図 SB3(2)



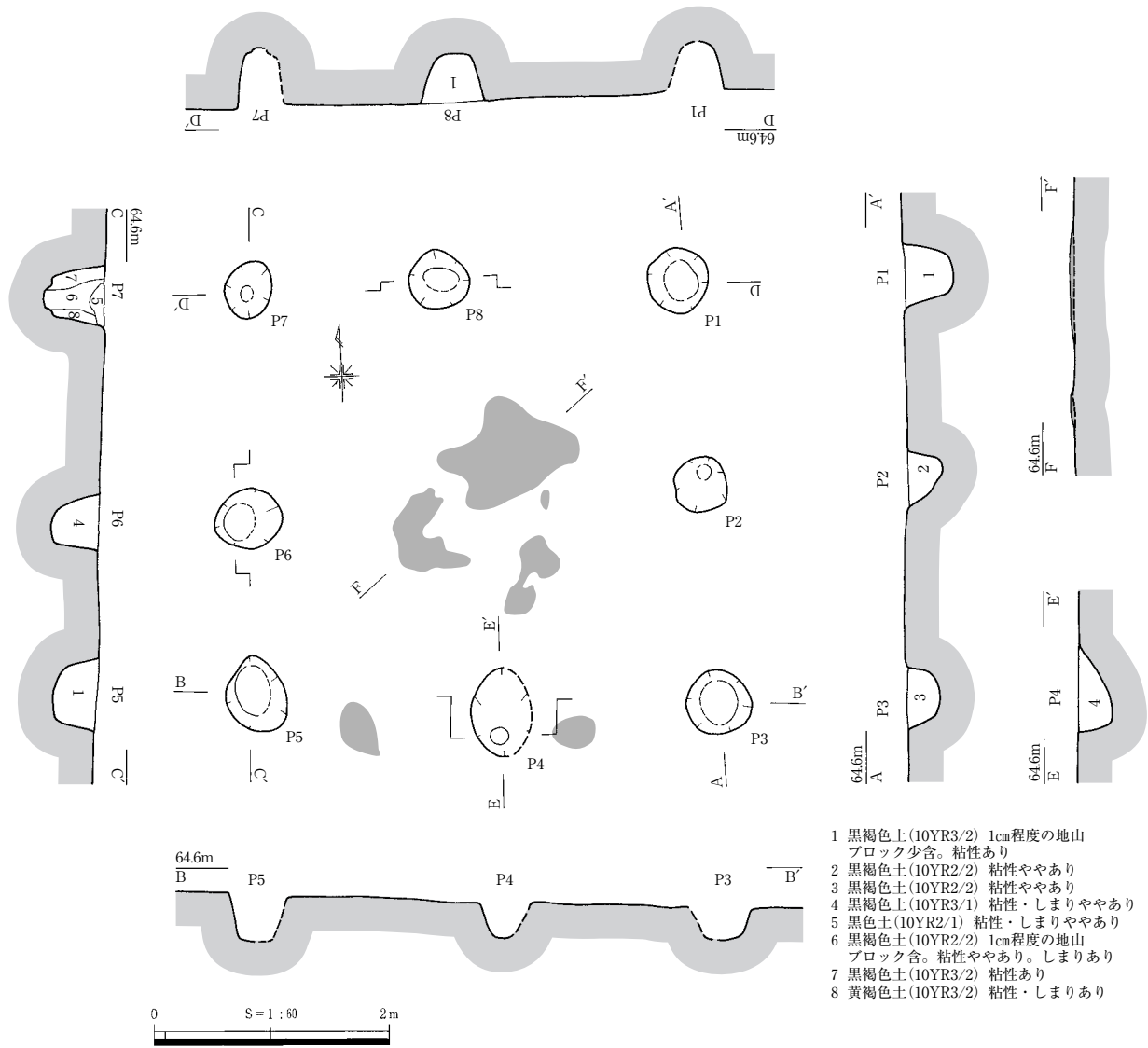
第101図 SB3(3)

SK107 (第98・103図、PL.32・61・62・68~70)

M31杭を中心とする西尾根南側、SI32の北西に近接している。長軸6.0m、短軸5.3mの不整円形を呈し、底面は東西それぞれに窪んでいる。検出面からの深さは東側底面まで75cm、西側底面まで80cm、両者の間の平坦面までは67cmである。

埋土は全体的に炭化物や焼土を含み、とくに西側底面の最下層に顕著であった。

遺物は埋土中から土器、鉄器、石器などが出土している。237は土師器甕、238は土師器坏。ともに

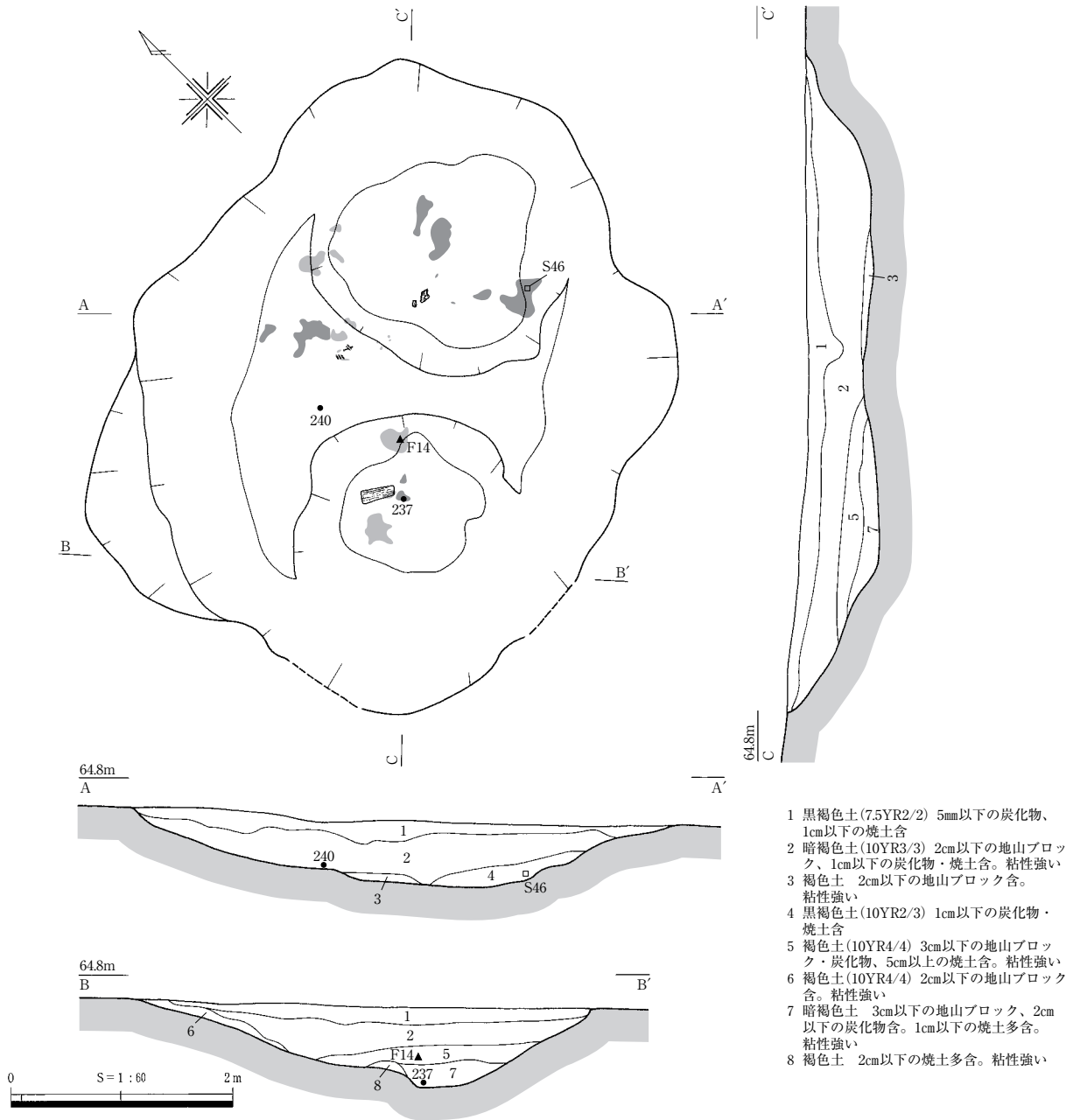


第102図 SB4

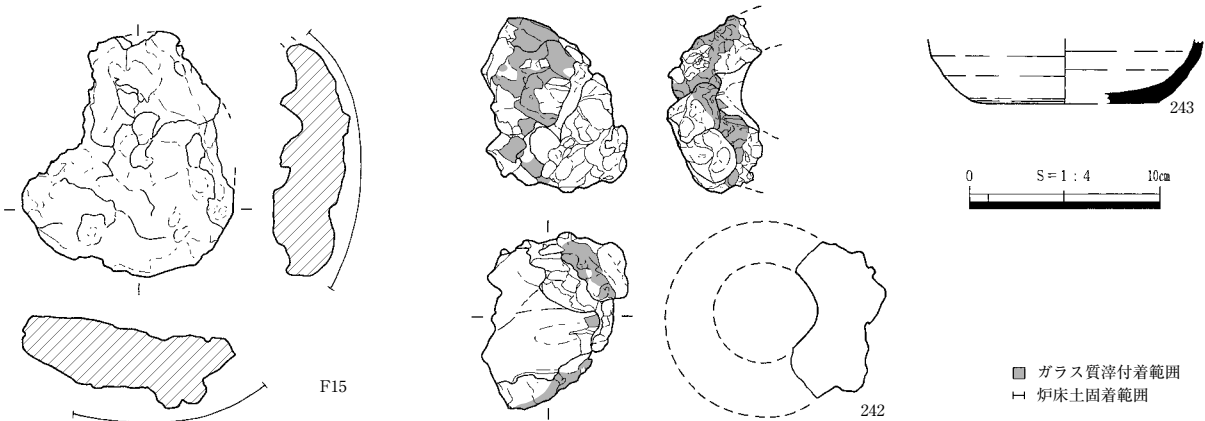
埋土下層からの出土。239～241は須恵器坏。240は底面よりやや上から、それ以外は2層から出土した。鉄器は刀子と思われるものなどが出土している。F14は埋土下層出土。S46も埋土下層からの出土で、携帯用の小型砥石である。S47とS48は鉄滓が付着した礫である。S48は2層出土で被熱により割れている。S47は1層からの出土。ともに二次的な滓の付着か。

SK107は埋土中に炭化物や焼土を多く含み、近接する同時期のSI32が焼失住居であることから、その廃材等を処理するためのものであったとも考えられるが、鉄滓付着礫が出土したことから、鍛冶作業に伴う廃棄土坑としても利用された可能性がある。SI32と鍛冶工房と考えられる建物の位置は同時に存在したと考えるには近いことから、SI32の焼失後、新たに鍛冶工房が設けられ、窪地となっていたSK107が廃棄土坑として利用された可能性もある。

出土遺物は高広ⅣA期の特徴を示し、SI32や鍛冶工房と同様に奈良時代(8世紀後半)と考えられる。(湯村)



第103図 SK107



第104図 鍛冶関連遺構出土遺物